

柊景夜は勇者である

しい君

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

いつの時代も神に見初められるのは心優しい無垢な少女たち。

少年は、地の神ではなく天の神に見初められた。

少年は、自分が見初められた意味も分からぬまま戦い続ける。

もう、何も大切なものを奪われない為に。

※一月五日に上里ひなたのタグ追加しました。

目次

オリキャラ&オリジナル設定や要素紹介	1
prologue「始まり(終わり)はいつも突然で」	5
第一話「過去と自己紹介と怖いもの」	21
第二話「稽古とデートと墓参り」	30
第三話「奥の手とクリスマスと決意」	46
第四話「初詣と修行とその後の話」	57
第五話「通信と愚痴と樹海化」	67
第六話「口ケンカと誕生日と未来への誓い」	79
第七話「帰省と愛の形と呼び名」	98
第八話「温泉と盗みと怒りの言葉」	112
第九話「夢の世界と現実とメイドさん」	128
第十話「願いと因果と希望の兆し」	143
第十一話「二人の勇者と巫女(水都)と水守(美森)の勇者」	161
第一二話「実力と質問と天使」	173
十三話「レクリエーションと卒業と告白」	184
第十四話「運命の分かれ道」	199
第十五話「三人と仲間と思い」	210
第十六話「完成型と絶技と夜」	218
第十七話「悪意と催眠とカイン」	230
最終話「愛と平和と勇者」	239
epilogue「明日の勇者たちに」	253

オリキャラ&オリジナル設定や要素紹介

オリキャラ紹介

名前：柊景夜

外見：身長は160後半で、焦げ茶色の眼、顔は中の上。髪は銀色。

誕生日：9月1日

血液型：B型

星座：乙女座

好き：本、昼寝、若葉、ひなた

嫌い：弱いもの虐めをする人

趣味：読書、ゲーム

特技：槍術

性格：お人好しで、大切なものになると優柔不断。

勇者衣装：ピンクのグラジオス

過去設定：元々はいつも笑顔でいつも楽しそうで、見ているこっちが幸せになれるような、そんな才能がある子だった。

名前：赤木紅葉

外見：身長は160後半で、瑠璃色の眼、顔は和風美人。髪は深紅色。

誕生日：11月18日

血液型：B型

星座：蠍座

好き：丸亀城のみんな、槍

嫌い：困難に立ち向かわない人

趣味：槍術、昼寝

特技：槍術

性格：サバサバとしている仕事人、情に厚く仲間想い。以外にも慎重派で聡い。

過去設定：七歳の頃には家を出て、一人で世界各地を転々と旅していた。バーテックスが襲来した時期に帰って来ていたのは偶然で、旅

の途中である物を拾ってきた為生き残る。

名前：柊華恵

外見：身長は150後半で、焦げ茶色の眼、顔は童顔に近く年齢より若く見える。髪は勝色。

誕生日：8月7日

血液型：A型

星座：獅子座

好き：家族、丸亀城の子供たち

嫌い：無理をし過ぎる人

趣味：料理、小物探し

特技：医術

性格：心配症で過保護、息子のことを本当に愛している。

過去設定：裕福な家庭で育った箱入り娘だったが、医学を学ぶために家元を離れて暮らしそこでシエルに会う。そこからはトントン拍子に話が進み大学院卒業と同時に結婚、学校で保険医をしながら兼業主婦に。

名前：シエル・フォトム

外見：身長は180後半で、碧色の眼、堀の深い顔。髪は綺麗な銀髪。

誕生日：2月10日

血液型：B型

星座：水瓶座

好き：華さんと景夜。

嫌い：バーテックス

趣味：料理、釣り

特技：料理

性格：景夜と同等以上のお人好し、部下の代わりに日本の会社に転勤するほど

過去設定：景夜が三歳の頃に胃がんで他界、家族を愛していた故に

最後まで生きて成長を見守れなかったことを悲しんでいる。トロールとなった理由はシエルの家系が北歐神話の主神であるオーディンの血を薄くだが継いでいるから。因みに景夜にも少しだけ継がれている。

オリジナル要素や設定

- ・ 早期に起こった千景の暴走……理由は千景を救うフラグ建て
- ・ 第四話の晴れ着の絵柄……勇者服や性格の示唆
- ・ 雪花の登場や諏訪の存命……ネタバレ不可避、諏訪を救いたかったというのがあります

・ 海斗の登場……とかゆ主人公である海斗君の名前の由来にもなる人物

- ・ 景夜と容姿が瓜二つな天使の登場……解説不可
- ・ 若葉やひなたとの二又……本来はこの選択によって未来を変えるつもりだった、だが執筆途中で景夜君の性格を考えた所どちらか片方を選ぶことが不可能なやめ没案になる。

無理にでも選んだ場合……若葉を選ぶとヤンデレ化したひなたに……

ひなたを選ぶと最終決戦で……

- ・ 精霊憑き……精霊に魂を喰取り込むことで憑りつかれること。原作では穢れが溜まったことによる暴走だったが、今回は精神が不安定な状態での『七人御先』の使用が原因。

- ・ 霊核……精霊の心臓とも言えるもの、人間の魂と似ている。

- ・ 精霊喰い……精霊の霊核を使用者が取り込むこと、普通の人間には出来ないが景夜の血筋とトロール^{シエル}の承諾の上ですることが出来た芸当。

- ・ 霊核魂……精霊の霊核を取り込み、自身の魂に霊核を宿し魂の器が広がった状態。

・絶技……天逆鉾の全力開放。詠唱が必要な上に一度の戦闘で一回しか使えない秘密兵器。その真価は、槍の穂先に日本国土の総質量を載せて放つというもので、日本神話での伊邪那岐神と伊邪那美神の国造りの再現に近い。

・信長の固有能力（他化自在天）……能力としては人間の望みを叶えたり快樂を与えて、それを自分の快樂とすること。

prologue「始まり（終わり）はいつも突然で」

二〇一八年七月三〇日。

乃木若葉のぎわかばと柊景夜ひいらぎかげやは香川県丸亀城の本丸石垣の上に立ち、瀬戸内海を見つめていた。若葉が手に持つのは一振りの刀。物心ついた頃から居合を納めていた若葉にとって、その重みは体に馴染んでいる。一方、景夜が持つのは分不相応に大きい槍。三年前に初めて槍を振った景夜にとって、最初は苦戦したものの今ではすっかり馴染んでいる。

真夏の日差しが頭上から降り注ぎ、肌に汗がにじむ。周囲ではセミが騒がしく鳴いていた。二人の間に会話は無く、それでも心は通じ合っているのか二人同時に目を閉じた。

少女が思い出すのは、あの日の絶望と怒り。

少年が思い出すのは、あの日の希望と悲しみ。

二〇一五年七月三〇日 夜

当時小学生の乃木若葉と柊景夜は、島根県にある神社の神楽殿避難していた。修学旅行中で香川から島根県にやってきていた若葉たちは、そこで強い地震に見まわれた。地震はその後も断続的に起こり、教師たちが非常事態と判断して、地域の避難場所である神社へ生徒たちを移動させたのだ。神社に避難した人の数は、近隣住人も合わせてかなり多い。

授業日数の関係で若葉の学校は夏休み中に修学旅行が行われるが、まさかこんな災害に巻き込まれるとは想像もしていなかった。

学級委員長の若葉はクラスメイトの点呼を取り、全員揃っているこ

とを担任教師に伝えた。教師から聞いた話によると、地震は島根だけではなく、全国各地で起こっているらしい。その影響で津波や地割れなども起こっており、日本中で被害が出ている……と。

しかし、避難してきた若葉と同学年の生徒たちは、修学旅行中に起こったこのイベントをむしろ楽しんでるようだ。友達同士で話したり、スマホを持っていている人はニュースサイトを見たりしている。

若葉の隣にいる景夜は、若葉の肩に頭を乗せて寝ている。髪の毛は銀髪で一見外国人かと思えるが顔つきは日本人そのものだ。父親が外国人で母親が日本人のハーフなのだ。気持ちよさそうに寝てる景夜をチラッと覗き見た後は三人組の女子グループがおしやべりをしているので、若葉は彼女たちの方に目を向ける。

「明日もここにいないといけないのかな？」

「えー、せっかく修学旅行なのに。」

「誰かトランプとか持ってない？」

(注意した方がいいか……いや、そこまでする必要はないな。むしろこうやっておしやべりすることで、不安は和らぐだろうから) 若葉そんなことを思っていると。

「……あ、乃木さんがこっち睨んでるよ」

「あたしたち、ちよつと騒ぎすぎ？」

「怒られるから、静かにしよう」

さっきまで話していた彼女たちは、すっかり静まり返ってしまった。

(あ……別に怒るつもりはなかったのに。……私の顔、そんなに怖く見えるのか……?)

「わーかーば、ちゃん」

後ろから声をかけられて振り返ると、パシヤリとカメラのフラッシュが光った。クラスメイトにして幼なじみの上里ひなたがスマホを構えていた。

「物憂げな表情の若葉ちゃん……んー、絵になりますね。背景が社殿の中というのも良いです。それに寝ている景夜君とのツーショットです。私の若葉ちゃん秘蔵画像コレクションがまた一枚増えました」

「ひくなくたく……私の写真など集めるな、消せ！」

「イヤです！ この画像コレクションは私のライフワークですから！」

わけの分からないことを堂々と宣言するひなた。

そのやり取りの所為で目が覚めたのか、景夜が欠伸をしながら眠りから覚める。

「やっと起きたか景夜、お前はこんな状況で良く寝てられるな。」

「おはようございます、景夜君。気分はどうですか？」

「若葉にひなたか、おはよう。気分は良好だよ、修学旅行が潰れてると言う現状がなきやな。」

景夜は、若葉の隣から腰をあげて立ち上がる。

「廁ってどこだっけ？」

「確か、ここを出て石畳にそって歩けばすぐですよ。」

「ありがとな、ひなた。ちよつと言ってくる。」

景夜が神楽殿から出てすぐ、ひなたが先程の話に戻す。

「そんな怖い顔をしないでください。眉間にしわが寄っちゃいますよ。ぐりぐり」

「……人の眉間を指で押すのはやめてくれ」

「ちよつと解してあげようかと思いましたが。そんな風に厳しい顔をしているから、さっきみたいにクラスメイトに怖がられちゃうんです。」

「み……見ていたのか。」

若葉は恥ずかしさで顔が熱くなる。

「まあ若葉ちゃんは生真面目すぎますからね。一年生の時からずっと学級委員長で超優等生。クラスの人たちから『鉄の女』ってイメージで見られていますし。」

「うぐ……」

自分でも自覚していたが、改めて言われるとショックである。

「でも……そんなイメージ、壊しちゃえばいいですよね！」

ひなたはにっこりと笑って若葉の手を取り、さっきの女子クラスメイトのグループの方へ歩き出した。

「お、おい、待て!?!」

「こんばんはー」

戸惑う若葉を無視し、ひなたは彼女たちに声をかけてしまった。彼女たちは何事かとキョトンとしている。

「すみません、実は若葉ちゃんが皆さんに混じっておしやべりしたいと」

「ひ、ひなた、何を!？」

「何を恥ずかしがってるんですか。さつきもですね、みんなを注意しようと思ってたんじゃなく、どうやって話しかけようかなーなんて可愛らしい悩みを抱えていただけなんです。」

「な、そ、そんなことは——」

否定しようとする、ひなたが手で若葉の口を塞いでしまった。

「んー、んー!」

女子たち三人組は少しの間キョトンとして——
やがて吹き出すようにして笑った。

「へー、なんか乃木さんのイメージ変わった」

「いつもきちんとしてるし、すごく優等生だし」

「そうそう、もっと厳しくて怖い人かと思ってたー」

「そうなんですよねー。あと、若葉ちゃんは無愛想だから損をしていると思うんです」

妙な成り行きだが、若葉とひなたは女子グループ三人に混ざっておしやべりをしてきた。ひなたに至っては、まるで数年来の友人のように親しげに話している。誰とでも仲良くなれる彼女の気さくさは、若葉にはないものだった。若葉は生真面目すぎる性格のせいで、クラスの中では少し浮いている。

「でも、中身はすごーくかわいい女の子なんですよ。それはこの上里

ひなたが保証します。だから、仲良くしてあげてくださいね」

「か、かか、かわいい……？ 何を言ってる!？」

若葉が睨んでも、ひなたは「まあまあ」と悪びれもしない。

「あはは、面白い。大丈夫だよ、私たち、もう乃木さんと友達だし」
彼女たちは若葉とひなたのやり取りを見て、笑いながらそう言った。

しばらくおしゃべりした後、若葉は神楽殿の外に出た。夜と言えど七月の暑さは相当のもので、少し夜風に当たりたかった。古来、神社の鳥居は外界との境界という意味を持っていた。まだ人々が信仰心を忘れていなかった時代、神社は異界とされていたのだ。若葉は神社の持つそんな意味など知らなかったが、この場の静謐な空気を感じることはできた。

空を見上げると、無数の星が輝いている。

「若葉ちゃん、こんなところにいたんですね。もうだいぶ遅い時間ですよ。寝ないんですか？」

ひなたも外に出てきて、若葉の隣に立つ。

「寝ている間に何か問題が起こるかもしれないからな。念のために起きておこうと思う」

「先生方が起きててくださいいますよ」

「私は学級委員長だから、責任がある」

「はあく……本当に若葉ちゃんは。真面目すぎるといふかなんとか」

少し呆れたようにひなたは微笑んで、

「だったら、私も起きてますよ」

「……付き合う必要はないぞ」

「いいえ、私は若葉ちゃんの幼なじみですから。ずっと一緒にいます」
はつきりとした口調でひなたがそう答えると、若葉としてもそれ以上強く言えなかった。

「……ひなた」

「なんですか？」

「さつきはありがとう。ひなたがいてくれなかったら、さつきもまたクラスメイトたちから距離を置かれてしまうところだった。」

「いえいえ、私は若葉ちゃんが誤解されてるのが嫌だっただけです
よ。」

当然のことのようにひなたはそう言った。しかし、それでは若葉の
気が済まない。

「何事にも報いを。それが乃木の生き様だ」

それは若葉の祖母がよく口にする戒めの一つ。祖母を慕っている
若葉は、その言葉をとても大事にしていた。

「だから私は、ひなたの友情に報いたい。してほしいことがあったら、
なんでも言ってくれ。」

「そこまで言うなら……うくん、では私の若葉ちゃん秘蔵画像コレク
ションを増やすために、何か……コスプレとかいいですかね。……こ
の際だから少し過激な……」

ひなたが不穏なことをつぶやき出す。

早まったかもしれない……と若葉は少しだけ後悔した。

「まあ、何をしてもらうかは後でじっくり決めます。とにかく、若葉ちゃんもつと気楽にクラスの人たちに話しかけたらいいんですよ。そしたら、みんなも若葉ちゃんのことを分かってくれて、もつと仲良くなれると思います。もし一人で話しかけるのが気後れするならば、さつきみたいに私が手伝いますから。」

ひなたの言葉がゆっくりと若葉の体に染み入っていく。

(もつとみんなと仲良くできる……か)

若葉はクラスで少し浮いているが、彼女自身も無意識に他のクラスメイトから距離を置いてしまっているのかもしれない。さつきも実際に話してみたら、簡単に仲良くなれたのだから。

「ああ、ですが、そうして若葉ちゃんがクラスで人気者になってしまつたら、もう私に構ってくれなくなるかもしれません。私は過去の女として捨てられてしまうんですね……よよよ。」

「な、何を言っているんだ!?! そんなわけがないだろう! ひなたは何があっても私の一番の友達だ!」

慌てて言う若葉に、ひなたはおかしそうに笑う。

「冗談ですよ。若葉ちゃんつたら——」

突如、地面が激しく揺れ始めた。

(これは……今までの地震とは段違いに大きい……!)

少し長めの用を足した景夜も、神楽殿に戻ろうとしていた。だが、そのとき突然強い揺れに襲われる。

(何だよ、また地震か……それにしてもさつきより遥かに大きい!)

「たくっ!?! 一体何なんだよ!」

景夜は姿勢を低くして耐える、数十秒の揺れのあとに急いで神楽殿の方に向かって走り始める。少年は運が良かった、とつびきりの豪運と言えよう。

空は一見、何の変哲もない星空のようだった。

だが、違う。今までとは決定的に――

無数の星々はまるで水面を漂うように蠢いていた。星のように見える『それ』は鳥か何かだろうか。しかし、動きが不規則な上に、夜にあれば多くの鳥が空を飛んでいるのはおかしい。

そして星々の幾つかが次第に大きくなっていき――

絶望が、空から降って来た。

先程も言った通り、柊景夜と言う少年は運が良かった。景夜は目の前で、尻餅をついている女の子に手を差し伸べる。女の子は景夜のクラスメイトだ、助けるのは景夜にとって当たり前で呼吸をするのと変わらない。

「だいじょう――」

そして、手を差し伸べて次の瞬間。差し伸べた手が、赤く濡れた。景夜はまるで血のようだと思い、そしてその赤い液体が本当に血であることを一瞬の内に理解した。だから、走り抜けた、目の前の女の子だった肉塊とそれを貪る白い『ナニカ』の横を通り抜けて神楽殿に。

頭の情報が追いつかないまま、神楽殿にたどり着く。脳裏に浮かぶのはいつも凜々しい顔をしている若葉と日常の中で柔和な微笑みを絶やさないひなた、二人の幼馴染の顔だった。神楽殿にも幾つかの白い『ナニカ』が入り込んでいた。中は滅茶苦茶でその中で一振りの刀を持ち白い『ナニカ』に立ち向かう若葉の姿が見えた。

「どうなってんだよ……これは。」

訳が分からないのも当然だ、こんな事に巻き込まれたら誰だってこ

うなるだろう。そして、景夜はもう一人の幼馴染でもあるひなたを見つめる。

「景夜君、何も言わずにこの槍を取ってください！」

いつもの彼女からは程遠い、力の籠った声に少年は答える。ひなたから渡された槍は何の変哲の槍だ、穂先の部分が錆びて茶色くなっている。柄の部分も腐りかけているだが不思議とその槍が暖かく感じた。

景夜がひなたから、槍を受け取ると槍の穂先の錆と腐りかけていた柄の部分もいつの間にか、生きているかのように瑞々しく輝き始める。穂先が綺麗に三等分に割けるその中から、新たな神々しい輝きをした穂先が現れる。三等分に割けた穂先が、まるでソードビットのように穂先を中心に円を描くように周り始める。

古の時、《国造り》の名を持つ天の神の父が居た。

かの神が国造りの為に使った、一本の槍が有った。

その槍は最強ではなく、持ち主に最高を与える。

その名は———あまのさかほし《天逆鉾》

「若葉ちゃん！外にもあの変なのが溢れてます！」

神楽殿の外から聞こえるひなたの声に応じて外に出る。

いつの間にかこれほど湧いたのか神楽殿の外は大量の化け物たちに囲まれていた。逃げようとした人々は退路をなくして絶望にくれている。

神楽殿の中から出てきた若葉は、刀を握りしめる。その瞳の先で一人の少年が自分の身長を超える槍を、巧みに使い敵を一体一体確実に倒していた。

だが、若葉には分かる。少年、いや景夜が武器を扱いきれずにあり余る力に振り回されていることが。

「キリがないぞー！どうにかならないのか。」

「景夜！大丈夫か！」

「何とか、そつちは？」

「私も平気だ、ひなたも大丈夫そうだな。」

辺りをもう一度見渡す。

（たとえ敵が何十匹いようと、負ける気はしない——）

そんな若葉の甘い考えは、余にも簡単に碎ける。

「…な、なに……？」

「うそ……だろ……？」

化け物たちに異変が起こった。

複数の個体が一か所にまとまり、粘土を集めるように巨大化しつつ姿形を変えていく……。

あるものはムカデのように長い体形となり。

あるものは体表面に矢のようなものを発生させ。

あるものは体組織の一部が角のように硬質化して隆起し。

（……進化……している……？）

単体では乃木若葉と柊景夜に勝てないことを学習したのだろう。彼らが自分達より強力な存在に対抗するために選んだ手段は、『進化』であった。『成長』なんて優しいものではない、明らかな生命としての『進化』。

ある意味では、その化け物は地球上のあらゆる生物を超越した存在を言えるかもしれない。例えば『神』や『悪魔』と呼ばれるような——集合し大型化した個体の一匹が、その体に発生した矢を射出した。矢は進行方向上にいた人間数人を貫き、その先にあった神楽殿を破壊する。たった一撃で、神楽殿は三分の一ほど崩壊してしまった。圧倒

的ともいえる力の差がそこにあった。

その間にも化け物の小型個体は次々と数を増し、集合と変形を繰り返し、無数の大型個体が生まれていく。

若葉と景夜の頭の中から勝てるなどと言う考えはとうに消えて無くなっていった。桁外れの破壊力を持ち、無数に出現する敵に、どうやって勝てばいいのか。

恐怖と絶望で全身が崩れそうになった時――

二人を支えたのは二人にとって共通の親友だった。

「諦めないでください、若葉ちゃん、景夜君。」

「……ひなた……」

「……ひな……た……」

「若葉ちゃんと景夜君、みんなを死なせたりはしません。」

はつきりと、何かの確信をもったような口調でひなたはそう言った。

ひなたはその場にいる人々全員に向かって叫んだ。

「これからは私に付いて来てください！安全な場所へ誘導します！」

そしてひなたは迷いのない歩調で歩き出す。その姿は十歳の少女とは思えない、凜とした空気があった。

「ひなた、どこへ……？」

「そうだ、ちょっと位説明を……」

「若葉ちゃんと景夜君は露払いをお願いします。」

今の彼女には有無を言わさぬ雰囲気があった。

「……わかった」

「ああ、もう……分かったよ！」

迷ってる暇などない。今はこの親友を信じるのみだ。

「生きたい者は、私たちについて来い！」

先頭に立って走り出す若葉と景夜とひなたに、戸惑いながらも、他の人々も同行した。ひなたの進む先にいる敵たちは、若葉と景夜が切る伏せていく。

景夜はそれ以降のことを覚えていない、若葉やひなたは覚えているだろう。だが、あの時の景夜は無我夢中だった。幼馴染である若葉やひなたを守るため、他に一緒に逃げる人を守るため。

だが、あの日にも希望はあった天逆鉾然り、生き残った若葉やひなたたちがいた。それが彼にとつての希望。

しかし、あの日には悲しみもあった、多くの友を失った守れなかった。

だからこそ、景夜は鍛えたのだもう何も失わない為に、後悔だけではないために。

「わーかーばー、ちゃん。かーげーやー、くん。」

背後からの声で、我に返った若葉とそろそろ来ることが分かっていた景夜が揃って振り返った。振り返ると同時に、パシャリとカメラのシャッター音が鳴る。

スマホを構えて笑っている上里ひなたうえさとがいた。

「刀を構え本丸から海を臨む美少女、その隣に槍を構えて同じく本丸から海を臨む美少年……絵になります。若葉ちゃんの秘蔵画像コレクションがまた一つ充実しました！」

「どれどれ、よく取れてるじゃないか。腕上げたな、ひなた。」

「はい！それは勿論！」

「ひーなーたー……！」

若葉がひなたのスマホに手を伸ばすが、彼女は素早く自分のポケットにしまってしまった。

「ふっふっふ、これで手が出ませんね。」

ひなたが勝ち誇ったように言う。

「まあ、諦める若葉。俺たちがひなたに勝ったことないだろ？」

（く……ひなたのわけわからん画像コレクションは、いつか絶対消してやる。）

若葉とひなたに景夜の関係は今も変わっていない。三人は最高の親友同士だ。

ふと、ひなたが真剣な表情になり、海の向こうを見た。

「今日もここにきていたんですね。」

「…ああ。」

「訓練終わりにな……」

三年前のあの日。

若葉たちが見た白い異形の生物——後に『バーテックス』と名付けられたそれは、世界中に出現し、人類を蹂躪した。

四国や長野の一部など、ごく限られた地域だけが、なぜかその侵攻

から逃れてるらしい。だがその他の土地は今や人類のものではなく、バーテックスの支配下に置かれてしまったと言っている。

その異常事態の中で、ごくわずかな少女たちが特殊な力を発言した。若葉と景夜とひなたもその一人だった。その力があつたからこそ、三人は神社に避難していた多くの人を救うことが出来たのだ。しかし。

あの時、失われてしまった命もあつた。

神楽殿で逃げ遅れ、バーテックスに殺された人たち。そのほとんどは若葉たちと同学年の、修学旅行に来ていた生徒たちだった。あの夜、若葉が仲良くなつたクラスメイトも殺されていた。

—大丈夫だよ、私たち、もう乃木さんと友達だし。

そう言ってくれた彼女たちの笑顔を、若葉は今でも忘れていない。景夜も忘れない、自分の目の前にでバーテックスに殺されて肉塊なつてしまったクラスメイトを。

生き残つた生徒たちも、目の前で友人を惨殺された精神的ショックは大きく、日常生活に支障を来しているという。未だにカウンセリングを受け続けている者も多い。

「……バーテックスは私の友達を殺した。罪のない多くの人々の命を奪つた。」

それは許されない大罪だ。

何事にも報いを……乃木の生き様である。

「必ずバーテックスに報いを受けさせる。そして、奪われた世界を取り戻す。」

「そうだな、もう何も大切なものを奪わせないために。」

「ええ。私も、お二人についていきます。」

西暦二〇一八年――

乃木若葉は、地の神の力を使う『勇者』。

上里ひなたは、神の声を聞く『巫女』。

柊景夜は、天の神の力を使う『勇者』。

そのお役目を担っている。

第一話「過去と自己紹介と怖いもの」

終景夜は虐められていた。七歳の時、小学校でみんなから仲間外れに遭った。

虐められた理由としては、景夜の髪が原因だ。父親がノルウェー人でその父から、銀髪の髪を受け継いでいた。

景夜の父親は仕事で日本に出張中に、景夜の母親である華恵はなえはい一目惚れ。そこからは、あれよあれよと時が経ち父親であるシエルは日本に永住。

だが、景夜が三歳の時にこの世を去った。それからは、華恵が女手一人で世話している。

彼の身の上はこんな感じだ。

そして、ある日。彼に暴力が襲った。

「おまえの、髪キモイんだよ。」

「この髪の毛、切っちゃまおうぜ。」

子供の純粹さが、景夜を傷つける。景夜にとってのこの銀髪の髪は、唯一の父親との？がりであり絆である。

それを切られそうになった時、流石の景夜も声を荒げる。

「やめろ！この髪は父さんとの最後の？がりなんだ！」

「だから、やめろってか？やなことだ！」

そう言つて、景夜の髪を掴みハサミで切ろうとしたその瞬間、義の拳が彼を救った。

「よってたかって、一人を虐めるとは何事か！それでも貴様らは男なのか？」

「痛ってーな、何すんだよ乃木！」

「そうだそうだ。先に殴ったお前が悪い」

景夜から見たら、彼女はヒーローだった。だが、それ以上に――

（俺は、女の子に守って貰えないとダメな奴なのか？）

けれど景夜を守ったせいで今度は、彼女が狙われていた。彼女の綺麗なミルクティー色の髪が切られてしまう。景夜は出ていた涙を拭き立ち上がる。

（違うだろ！自分で立ち向かえ！男だろ！）

景夜は、母親に言われた言葉を思い出す。

「景夜、これだけは覚えて起きなさい」

「なーに、かあさん？」

華恵は景夜の頭を優しく撫でながら、優しい声で景夜に語り掛けた。

「力はね、自分勝手に周りに振りかざすものじゃないのよ」

時刻は八時を少し過ぎた頃だろう、綺麗な月明かりが縁側に座っていた二人に当たっていた。

「力はね、大切なものを守るために使うの」

「大切なもの？」

「そう、あなたが思う大切なものを守るために使いなさい」

その時の、母の顔が凄く優しい顔だったのを景夜は今でも覚えてい
る。忘れることはないだろう。

「離せ！こんなことをして何とも思わんのか！」

「別にー、てか一々うるさいんだよ。乃木はさー」

「やめろよ」

最初は、擦れるような声だった。だが、次の瞬間には拳を思いつきり相手にぶつけながら叫んだ。

「乃木さんに、手を出してんじゃねえ！」

そこからは、駆け付けたひなたに先生を呼ばれ乱闘騒ぎは片付いた。

次の日から、景夜は若葉やひなたと遊ぶようになった。これが、三人の馴れ初めというやつだ。

「か…や…ん、…きて…だ…い」

「後、一時間…だけ〜」

「ダメです！もう！今日はみんなで顔合わせの会なんですから」

ひなたの無慈悲な宣言によりカーテンを開けられて、夏の眩し過ぎる程の日光が景夜の体降りかかる。

「アツツ！眩し！ひなた、開けるなら開けるって言えよ。流石にビツクリしたはー！」

「良いじゃないですか？目も覚めたんですし。さあさあ、早く着替えて降りてきてください。みんな下に集まっていますよ。」

「マジか！…あつ！ホントだみんな来てる。急げ急げ、ひなたは先降りてくれ」

先程、ひなたにカーテンを開けられた窓から下を見ると、全員が揃ってることが分かったのでひなたに先に降りるように促す。

「分かりました、早く来て下さいね」

「りょーかい、急ぐよ」

ひなたが部屋を出たのを見計らって服をタンスから出し着替え始める。

景夜の部屋は普通の小学生らしく？本棚は漫画・小説（ライトノベル）が3：7のような感じである。

その他にも、段ボールに紙で「ゲーム」と書かれた物がある、中には家庭用ゲーム機の「Uii」や小型ゲーム機の「Vs vita」などがありとても現代っ子らしい部屋だ。

ゲーミング用のPCだったり、少し大きめのTVもある。

彼の家はそこまで裕福ではない、なのに何故こんなにも持っているものが豪華なのか？

それは、彼が『勇者』だからだ。彼のお役目はそれ相応に危険が伴うためにこんなにも豪華な物が用意されているのだ。

本は趣味で買ったが、ゲームはこんなに要らなかつたかもと景夜は思った。でも、もしかしたら「今日は暑いから部屋でゲームでもやって親睦を深めよう！」という意見が出るかもしれないし良いか、と彼は思考を捨てて着替えに戻る。

上は白を基調に少し柄の入ったTシャツ、下はグレーの短パンだ。オシヤレとは言えないが、無難な格好で外に出た。

階段を下りると、不機嫌そうな若葉の顔が見える。

（こっちは…先手必勝！謝るが勝ち！）

「景夜！お前はこの暑い中何時まで——」

「ごめん！若葉この通り！」

綺麗に腰を九〇度曲げての謝罪、この手が若葉に通じなかったことは無いので今回も景夜はお世話になっていた。

「ーっ!?分かったから頭を上げろ。はあくこれからは気を付けろよ。」

「了解！」

どこで習ったのか、何故か敬礼をする景夜であった。

朝ごはんは、友奈の「香川のソウルフードである、うどんが食べたーい！」という要望により、うどん屋さんに来ていた。

みんなが、美味しそうにうどんを啜る中一人浮かない顔の景夜がいた。

「どうしたんですか？景夜君？どこか調子でも……」

「…あっ！ううん何でもないよ！ほら！こんなに元気にうどんを食べれる。」

勢いよく、うどんを啜る景夜。先程まで思い出していたのは、先日目の前で肉塊になってしまった女の子のことだ。彼はあの日ことを、少し引きずっていた。

だが、ひなたにそんな姿見せまいと空元気で頑張っていた。

ひなたは何も言わず、そのまま食事に戻った。

七人は丸亀城の一室でもある、応接室のような場所で一人ずつ自己紹介をしていた。トップバッターは勿論唯一の男子の景夜からだった。

「えーっと、柊景夜です。血液型はB型で、来月の九月一日に十一歳になります。父がノルウェー人で母が日本人のハーフですがよろしくお願ひします。好きなものは、本と昼寝と、後は若葉とひなた。嫌いなものは、弱いもの虐めをする奴。趣味はゲームと読書。特技はこれと言つてないかな。これからよろしく」

少しどころか、色々とツツコミ所が多すぎる。趣味がゲームと読書と聞いた瞬間、千景と杏がソワソワし始める。

そして、先に杏が飛びついた。

「本ってーど、どんなジャンルを読むんですか!」

「えっと、伊予島さんだよな?そーだなー、最近は恋愛系のラノベが多いよ、バトル系も良いけど」

「ラノベですか、でも恋愛!ならならどんなシチュエーションが良いですか?」

鼻息をフンスフンスと立てながら迫ってくる杏子は少し怖かったが、それでもちゃんと答えた。

「ベタだけど、サブヒロインの子がヒロインの親友で最終的に、主人公の背中を押して告白に行かせて自分はその後泣いちゃうって言うのが、結構好きだな」

「分かります!結ばれないんだけど、その儚さそのキャラのことをもっと好きにしてくれるんですよ!」

五分ほどの談義は続いた――

「あ、あの…柊君は…その、どんなゲームをやるの?」

「そーですね、最近有名なPCゲームのDeea? by Da?li

ghtとかやろうかなくと、思ってます！」

千景は一瞬嬉しそうな顔をして、ボソリと呟いた。

「フレンドコード、登録してくれるかしら…でも、迷惑かも」

「そうだ、郡先輩もやってるんだったらフレコ交換しませんか？そしたら一緒に出来ますし」

景夜が屈託のない笑みで問いかけると、千景は目を輝かせて頷いた。

全員の自己紹介が終わるころには、お昼になっていた。話過ぎたかなと思ったが、でもみんなと友達になれた気がしたので良かったと思いい、深く考えるのを止めた。

こおりちかけ郡千景、いよじまあんず伊予島杏、どいたまこ土居球子、たかしまゆうな高嶋友奈。この四人と新たに過ごしていく。

不安はあれど、心配はなかった。景夜から見たら、みんないい人だから。友奈と球子とはもう名前呼びし合ってる、という程の打ち解けの速さ。杏と千景とも、趣味が合っているので会話も楽しい、と景夜は感じていた。

みんなと一度別れて、部屋に戻って来た景夜は急いで洗面台に走る。先程まで食べていた、お菓子や朝のうどん。胃の中にあつた全てを吐き出した。

何日たつても、頭から離れない。フラッシュバックする、光景はあの日。血が付いて赤く染まるて、目の前で肉塊になる女の子。

全て現実で、夢でないことを思い知らされる。

「折角食べに行ったのに、無駄になっちゃった。ひなたと若葉怒るかな、こんなこと黙ってたら。」

「ええ、怒りますね」

声の主を、察して振り向く。そこには、悲痛な顔をしたひなたが居た。

「お前、なんでここに？」

「そんなの、決まっています！あなたが心配だからですよ」

景夜以外の六人は、お昼を取りに食堂に行った。景夜は、お腹が減っていないからいいと言って先に帰って来たのだ。ひなたはそれを見計らってきたのだろう。

「若葉ちゃんには、私に任せて下さいと言ってあるので大丈夫です。

……本当のこの言って下さい」

ひなたの力強い眼差しに負けて、景夜は全部を話した。

「…そうですか。そんなことが」

「怖いんだ、もしかしたら明日にはあいつらが攻めてきて……みんな死んじゃうじゃないかって」

「そんなことはありません、『神樹様』が守ってくださいます。」

『神樹様』とは土着の神々が、残された人類を守るために集まったもの。所謂、複合神性である。

でも、景夜はまだそんなことは上手く理解できていない。

「守ってくれるかなんて、分かんないだろ！怖いんだ！母さんが死ぬかもしれない！ひなたが死ぬかもしれない！若葉が死ぬかもしれない！今日仲良くなった四人が死ぬかもしれない！」

「景夜君……そこまで」

違うのだ、景夜はそんなことを恐れている訳ではない。恐れていない訳じゃないが、一番ではないなぜなら――

「俺の力じゃ、だれも守れない！」

失う以上の喪失。守れない、戦っても、頑張っても、足りないのだ
圧倒的に。

「みんなを守れない！折角こんな力を貰えたのに、俺には全然扱いき
れてない！それが怖い！俺が頑張れば守れたのに、もしそれで誰かが
死んだら？そんなのさいあ——」

続く言葉は、ひなたの抱擁によって声になることは無かった。見て
いられなかった、自分の大切な幼馴染がこんなにも辛そうにする姿
を。

だから抱きしめた、壊れないように優しく包み込むように。

「二人で抱え込まないで下さい、優し過ぎるんですよ景夜君は。大丈
夫です、ここには私も若葉ちゃんも華恵さんも居ます。頼って下さ
い、私たちはもう家族みたいなものでしょう？」

「ひい、なつ、だあつ」

全部をひなたにぶつけた景夜は、ひなたの胸の中で泣きつかれて寝
ていた。その顔は穏やかで、彼女は彼の役に立てたのが嬉しかった。

みんなが景夜の部屋に来るまで、ひなたは景夜に膝枕をした。

そして、景夜の頭を撫で続けていた。

「今はゆっくり、休んで下さい。」

(どうか、あなたの人生が光に満ち溢れていますように…)

心の中の祈りが叶うのは、まだ先のお話し。

第二話 「稽古とデートと墓参り」

地獄を見た。

最悪な最後を見た。

世界は炎に満ちていて、生きているものは少年一人だけ。その近くには、大切な者たちだった骸が転がっている。

二人の少女は胸に穴が開き、一人の少女は右肩から腹の方にかけて噛まれたような歯形がある。

もう一人の少女は、全身がボロボロすでに呼吸は止まっている。幼馴染だった、守るべき二人の少女もすでにこと切れていた。

声にならない叫びが響く。

守れなかったのだ、少年は誰一人として。

師匠も、母親も、大切な友も、愛していた人も……

誰一人として救えなかった、やがて少年も炎に包まれる。

少年の瞳に光は無い、暗闇絶望だけがそこにあった。

目が覚める、隣には何故か温もりのあるものがあり、景夜はまたかと呟いた。

「気が利いてるんだか、利いていないんだか」

最近、こんな夢ばかりを見ていた。ひなたに全てを打ち明けてから二か月が経ち、今は十月も半ば。

食事は喉を通るようになったが、最近夢の所為で寝つきが悪い。

だが、このままではダメだと思い。景夜は修行を始めた、瞑想である。

布団の誘惑に何とか打ち勝ち、ベットから出て服を着替える。

まだ、ベットの上ではひなたが小さい寝息を立てている。

ひなたに全てを話した日から、三日から四日に一回の間隔で景夜のベツトに忍び込んでいた。

景夜としては少し所が大変困るのだが、ひなたが気遣ってくれてると思うと強く言えない。

そんなこんなで、なあなあでこんな生活をしている。

ひなたは本当は、悪戯心七割、善意三割でやっているということ。景夜はまだ知らない。

この二か月は、色々忙しかった。まず、天逆鉾の扱いの為にある人に弟子入りした。

師匠から色々なことを教わりながら、暇な時間を見つけては友達と遊んだりした。

師匠からは、こう言われた。

「景夜くん、修行をするのも大事だけど仲間や友達是最も大事にするものなのよ」

その言葉に従い、杏と本の良さを語り合い、球子や友奈と外で遊び、千景とゲームをしたり。

二か月の間で、みんなともそれなりに仲良くなることが出来た。

千景以外とは、みんな名前呼びだ。

二か月のことを振り返っている間に、道場に着いた。

今日は日曜なのでまだ誰も来ておらず、景夜は座禅を組みひっそりと瞑想を始めた

「ふうー」

景夜の息を吐く音だけが、道場を満たしていた。

どれくらいの時がたったのだろうか、目を開けると刀の素振りをする若葉の姿が目に入る。

とても綺麗だ、と思いつつもその姿から目を逸らして、時計に目を

向ける。

「五時半過ぎ……か」

景夜は、もう一度目を閉じる。

今度は、瞑想ではなくイメージトレーニングを始める。

イメージするのは今日までの修行を終えた自分、その対面に昨日までの若葉を投影する。

そこからは、思いつく限りの戦術を試す。防御を捨てる戦術、攻撃を控えてカウンターを狙う戦術、武器を落としたりして意識を逸らす戦術。

三〇分程の時間で計二〇回は挑んだが、その中で勝てたのは防御を捨てて攻撃をし続けるというものだ。

攻撃は最大の防御なり、今回の作戦はそれでいこうと決意し立ち上がが若葉に稽古を持ちかける。

「若葉一本頼む」

「よし！受けてたとう」

若葉は中に鉄芯を入れて強度と重量を上げた木刀と、居合の為に必要な鞘を持つ。

景夜も柄の中に鉄芯を入れて強度と重量を上げた槍で、穂先はゴム性のものを使う。

そして、戦いの火蓋は切って落とされた。

その結果は……

景夜の持っていた槍が宙を舞い、後方でカランと音を立てていた。結果は……負けだ。

昨日までの若葉だったら勝っていたのに、今日の若葉には勝てな

かった。

「腕を上げたな、今回は危なかった」

「だあく！くそ！二か月そこらじゃ勝てないって分かっても、悔しい」

景夜は後方に落ちた槍を拾い、先の戦いを振り返り改善点を見つけ出す。

「あの場面でこういくべきだったのか？いやでもそれじゃあ……ブツブツブツ」

「おーい景夜！……ダメか感想戦に集中している」

景夜に声を掛けようとしたが若葉の声も聞こえておらず、よほど集中しているらしい。

時刻は七時を過ぎている、一時間も稽古していることに驚く者はここに居ない。

景夜が何やらブツブツ独り言を言っている間に、ひなたがやってくる。

「お二人ともお疲れ様です。これをどうぞ」

「助かる、ひなた。景夜！ひなたが来たんだもう出るぞ」

「……ああ、分かった」

ひなたからもらった飲み物を景夜にも渡し、若葉がタオルを受け取る。

「ひなた、タオルが一枚しか無いのだが？」

「ごめんなさい！忘れてしまったみたいです。」

「なら、いいよ。若葉が先に使え、流石に男子が汗を拭いたタオル使うなんて嫌だろ」

「別に、景夜なら構わんのだが…。ならば、ありがたく先に使わせてもらおう」

こんなやり取りをして、若葉が汗を拭き終わった後に景夜もタオルで汗を拭く。

そう言えば、とひなたが突然言い出した。

「景夜君、今日って空いていますか？」

「別に修行以外の予定は入れてないけど？どうかしたのか？」

「なら！修行の予定はキャンセルして下さい」

景夜はこの時点で嫌な予感がしていた、だがひなたの頼みを断る理由がないため、そのまま了承する。

「分かったけど……何かあったか今日？」

「はい！景夜君——」

……とひなたが、爆弾級の発言をした。

「デートに行きましょうー！」

「はーい！」

景夜と若葉の声が道場に響いていた。

時刻は午前一〇時、諸々の準備をして場所に向かうひなた。景夜に

は先に待ち合わせ場所に行ってもらっていた。

昔、よく遊んだ公園を待ち合わせ場所を選んだ。

ひなたの服装は白を基調としたロングワンピースに、橙色のカーディガンを羽織っている。黄色の小さいバックには財布やスマホ、あとはリップクリームなどの小物が入っている。

ひなたは、オシャレな格好に気を使っていた。

景夜は、ギターケースと灰色パーカーにジーンズという何とも無難な格好で待ち合わせ場所にいた。

ギターケースには、念のために天逆鉾が入っている。

(幾ら、幼馴染とはいえ女の子と出かけるんだからもう少し…、いえ景夜君はあれがデフォルトでしたね)

「スイマセン、景夜君。待たせてしまいましたか」

「いや、別に。それに女子の着替えに時間が掛かるのは前から知ってるよ」

「もう！景夜君は、面白くないですね。本を読んでるんだから、もつとこう…」

「わかったよ、その服新しいやつだよな？似合ってると思う、カワイイぞ」

「ふえ?!いい、いきなり言わないで下さい！ビツクリするじゃないですか、もお」

ひなたは景夜の唐突な褒め言葉に、少し頬を染めて先に歩き始めてしまった。

そんな、二人を後方から見守る影が五人。

「なあ、若葉こんなことして楽しいか〜」

「何言ってるの、タマツチ。すっごく楽しいよ!」

「アンちゃんは嬉しそうだね!」

「それにしてもよ、乃木さん。私たちが付いてくる意味はあったのかしら?」

「い、いや、それはだな……」

若葉が言葉に詰まってる間に二人は動き出してしまい、五人は急いでそれを追いかけた。

先程から周りにじろじろ見られている気がする。景夜はそんな風に思っていたが、ひなたが注目されてるのだろう考え特に何も言わなかった。

だが、現実とは違った。

「あそこにいる子たち可愛くない」

「分かるく、女の子も可愛いし、男の子の方はハーフか何かかな? カッコいい」

ひなただけではなく、自分も注目されてるなど知る由もない。

あるデパートにて、二人は買い物をしていった。服屋さんに入っは、試着や物色をして店を出る。

何回か、それを繰り返した末に。景夜もひなたも冬服を何着か買って出で来る。

その姿を見守る五人、すでに二人は違う行動をしているが。

「タマツチもう行くよ!」

「分かったから、少し待ちタマえ」

「郡さん、そろそろ」

「待って！今良いところなの」

「何だか、こういうのも良いよね！」

景夜とひなたは新しい店の前に来ていた。

でも、先程までとは全然違う。

ランジエリーショップだ。

「な、な、な！お、おいひなた！こんな所に来るなんて聞いてないぞ！」

「はい。言ってますから！」

景夜の訴えに何てことないように、笑顔で返すひなたはまるで小悪魔のようだ。

「景夜君は、いや…ですか…？」

上目遣いで尋ねられた景夜に、それを断れる訳もなく。そのまま店内に連れていかれた。

「あー！か、景夜君たちがランジエリーショップに！」

「ら、らんじよりーショップ？なんだそりゃ？」

「ちよっとお高い女の人の下着屋さんだよ、そうだよねアンちゃん」

「そうです、友奈さん。友奈さんも知ってたんですね！」

「うん、たまにドラマで聞いたりしたから」
二人の話す内容に着いて行けない、千景、球子、若葉の三人。
だが、一つ分かったことがある。

それは、――

「あの、景夜がそんな場所に入ったただど！」

景夜が、女性その下着んなのお店場所に入ったということ。

その頃、ランジェリーショップに入った景夜はとても気まずかった。

店員の女性とひなたが話すのを見ながら、周りに視線を向ける。
下着、下着、下着。どこに行っても下着だらけ、時たま過激すぎじゃないかと思うような物もあった。

「景夜君、こういうのはどうでしょうか？」

「へっ?!…悪くないと思う」

一歩間違えれば、変態扱いされかねないので慎重に言葉を選んだ。

ひなたが見せて来たのは、白い水玉模様の入った水色の下着だった。

景夜は、なんでこいつはあんなものを堂々と自分に見せられるのか疑問に思っていた。

「ふむふむ、悪くないですか。そうですか！」

そこから景夜にとって羞恥に悶えるのは、当たり前前の結果だった。

一二時を過ぎた頃になってやっと解放された景夜は、フードコートに買った袋を持ってやって来ていた。

ひなたには軽いものを持ってもらい、重いものは率先して持った。神器のブーストがあるので全部持つと景夜が言ったが、ひなたが譲らないのでこうなっていた。

荷物をひなたに任せて、昼ご飯を買いに行く。

「ざるうどんの大に野菜かき揚げのトッピングと、とろろうどん下さ
い」

「はい、ちよつとまってね。えーつと合計で六八〇円だよ」

「じゃあ、千円からで」

「はいよ、お釣三二〇円とレシートね。このブザーが鳴ったら取りに
来てね」

うどん屋さんのおじちゃんから、お釣とレシートと一緒にブザーを
渡される。

その後は、ひなたの下に戻り少し話す。

「今日ここに来た、本当の目的って何？」

景夜の言葉に、ひなたが少し言い詰まってしまう。

「……それはですね」

そうして、景夜に離れたここに来た目的を。

「へえ、ひなたちゃんも育ってきたね、そろそろ下着付けた方が良
いよ。遅くなると、胸が垂れてきちゃったりするから」

「そうなんですか？それは大変です！」

「そうなのよ、だから今週末近くのデパートにでも買いに行きなさい」

「はいーそうします」

ひなたが親しそうに話す年上の女性は、ひいらぎはなえ 柎華恵。丸亀城の養護教諭にして景夜の母だ。

ひなたが保健室を出ようと椅子を立った時、華恵が「ああ、それと」と言っただけか言おうとしたのでひなたは止まる。

「何ででしょうか？」

「行く時に、景夜を連れて行ってあげて」

「景夜君をですか？」

「…ああ。ひなたちゃんや若葉ちゃんあたりならもう気付いていると思うけど。最近、景夜が不安定な調子なんだよ。だから、気分転換も兼ねてお願いしてもいいかな？」

華恵は悲しそうに言ったのを見て、ひなたは心が痛む。ひなたはいつも気丈に振る舞えるだけの極々普通な女の子だ、だからこそ戦えないからにはみんなをサポートしようと決めた。

華恵が悲しいのは、息子が自分母親を頼ってくれないということ。それが悲しいのだ。

「華恵さん、景夜君があなた母親に言わないのは、景夜君の優しさだと思うんです。ですから……」

「分かってるんだけどね、やっぱり親は子供に頼って欲しいもんさ。大切なあの人との息子だからね」

華恵がそう言ったのを見て先程は違う、親としての苦悩を見た。

「あと、それと———に行ってきたりしてくれないかい？」

「…分かりました、地図を貰っても?」

「ああ。少し待って、今渡す」

三分程待つと、華恵からある地図を渡される。

「では、これで」

「ええ、気を付けて帰りなさい」

保健室を出た、ひなたは景夜をどうやって連れ出そうか考え始めていた。

(どうやって誘いましょうか? 景夜君のことなので私が誘ったら断らないと思いますが……)

「うーん?……そうだ! デート! デート! デートと言うそういう体で行きましよう」

(うふふ、少し楽しみです!)

「こんな感じですか。どうですか?」

「そっか、そんなことが。母さんに心配掛けてたのか、はあく。全く、俺はまだまだだな」

こんなことを言ってる景夜の顔は、とても嬉しそうだった。その顔を見てひなたも頬を緩めて笑う。

それを見守る五人。

「そう言うことだったのか…。皆帰ろう、これ以上二人の邪魔をしたくない。」

「そうだな、タマもそう思う」

「カゲヤ君のお母さんも凄くいい人だね！」

「ええ、そうね。私もそう思うわ」

「良いお話ですね。感動します」

そうして五人は静かに去っていった。

その後、昼食を食べて少し休憩してる時。事件は起こる。

「ひったくりよー！誰か捕まえて」

二〇代前半位の女性から、鞆をひったくる四〇代後半程の男性。景夜はすぐに立ち上がり、ギターケースを持って男の前に立つ。

「退けガキ！」

「やなこつた！」

右手を使つて景夜を突き飛ばそうとした次の瞬間、男性は背中を床に強打して声を上げて蹲っていた。

「ぐああー！ー！」

周りの者の殆どには見えなかっただろう、それ程の早業だった。だが、使った技はただの背負い投げだ。

景夜の身長は146cm、それに対してひったくり犯の身長は170cm程だ。普通なら体格差的に出来ないが、景夜は今神器を背負っている。

神器による、身体能力のブーストのお陰で大人一人位なら軽々と持ち上げられる。

事件は早々に解決し、ひったくり犯は警備員に連れていかれた。女

性からお礼を言われて、少し照れる景夜をひなたは誇らしそうに見ていた。

まるで、私の幼馴染は凄いですとでも言いたげな表情だった。

その後は、デパートを少しぶらついた。三時頃に、ひなたが行きたい所があるといいバスを使って移動する。バスに揺られること二〇分程、そこに着いた。

「ここは……霊園」

「そうです、頼まれごとがありました」

「それってもしかして！」

「景夜君が考えている事で大体あつてると思います。」

霊園の奥の方に進んで行く、その先でポツンと一つだけ場所が離れた墓を見つける。

「父さんの……、ひなたがどうしてここを？」

「華恵さんに、頼まれたんです。最近行ってないだろうから、と」

「母さんが……」

その言葉の通り、景夜はここ最近と言うか二か月近く行けていない。

天災が起こる前までは、一か月に一度ここに来て近況報告をしていた。

父である、シエル・フォトムの命日の日に必ず来ていたのだ。

それが、最近は行けていなかった。

父が死んだ後、ノルウエーの方からも親族が来てくれた。景夜から

したら従兄にあたる者たちは、みんな景夜に優しくしてくれた。
寒い国から来た従兄の心は、とても温かく感じた。

だが、もうその従兄達もいない。

全て、あの『バーテックス』と言う化け物たちに殺されてしまった。
悔しくて、だからこそ精一杯生きようと思った。

景夜とひなたが無言で墓掃除を始める。丁寧に丁寧に、心を込めて洗う。

その後は、色々なことを父に話していた。新しく出来た友達のこと、これから来るお役目のこと、そして決意を――

「父さん、俺頑張るよ！頑張って生きて見せる。それでさ、決めたよ俺の生き様。若葉がいつも言うから、俺もやりたくなくなってみたんだ！」
その生き様は……

「若葉が、何事にも報いをなら。俺の生き様は――」

たっぷり息を吐き、宣言する。

「明日を生きる人に希望を」

明日を生きる人に希望を、それは明日を生きる人に希望を持ってもらいたいという願いと、自分が強くなり希望になって見せるという決意。

「とても良いです！カッコいいですよ、景夜君」

日はもう傾き始めて、時刻はもう五時を回っていた。

「そろそろ帰るか」

「そうですね……ハックシユ！」

ひなたがカワイイ、くしゃみをする。景夜は来ていた服を脱ぎ、ひ

なたに渡す。

「ほら、風邪引くぞ。ひなたのお陰でいい休日になったのに、ひなたが風邪引いたら申し訳ない。」

「大丈夫ですよ、景夜君。服は買いましたから」

自分の買い物袋から、服を取り出そうとするひなたの手を掴み無理矢理止める。

「それじゃあ、冷たいだろ。いいから着ろ、俺は長袖着てるから寒くないし」

明らかに無理をしてるのが分かる、ひなたはクスリと笑い。景夜からもらったパーカーを着る、サイズはあつてないしコーデイネートとしてもダメダメだ。

けれど、着ていると落ち着くし温かい気持ちになる。景夜の匂いが付いてるからか、景夜に抱きしめられてるようだと思ひひなたは少し照れた。

「景夜君、手を握って下さい。手も寒いので」

ニツコリと微笑むひなたの顔が綺麗だと思ったが、景夜は言わない。

言ったらきつと、からかわれる気がしたから。

「分かったよ。…ひなたの手ホントに冷たいな」

「景夜君の手は、温かいですよ」

二人で手を繋ぎながら霊園を出て、丸亀城家に帰る。帰る間、二人の間に会話はなかった。

それでも、心は通じ会っていると二人は信じていた。

第三話 「奥の手とクリスマスと決意」

西暦二〇一五年

季節は冬。今日は十二月二四日、世間は少し活気を取り戻しクリスマススムードを作っている。

外は雪が降り積もる中、景夜達勇者はある説明を受けていた。

「へ〜、奥の手か〜。何か凄そうだね!」

「友奈もか!タマもそう思うぞ〜!」

放課後になり、みんなが寄宿舎に帰ろうとした時にひなたに呼び止められたのだ。

何でも、自分たちが将来使うであろう奥の手のことを説明してくれた。

「それにしてもトロールと——か……。何か、俺の奴はどっちもヤバそうな奴なんだけど」

「…:そうね、柊君の精霊は少し私たちのとは違うわね」

「ですが、私たちの精霊も妖怪とかの類なんですよね……」

杏の言う通り、景夜以外の勇者に告げられた奥の手と言う名の精霊はどれも起源は妖怪や化生の類なのだ。

精霊とは、勇者たちの奥の手。勇者本人が意識を集中させることで、神樹内にある概念データに接続して戦況に合わせ自ら選び出して具現化する。精霊は人間の魂や妖怪などで、その特徴を必殺技のように使える。

身体的に過重な負荷をかけるため、大社から使用を極力控えるよう命じられている。

ひなたの説明はざっとこんなものだ、その他にも個人で扱う精霊の

特徴なども伝えられた。

一般的なトロールについてのイメージは、巨大な体躯、かつ怪力で、深い傷を負っても体組織が再生でき、切られた腕を繋ぎ治せる。醜悪な容姿を持ち、あまり知能は高くない。凶暴、もしくは粗暴で大雑把、というものである。

景夜の父であるシエルの故郷では有名であり、景夜にも半分はシエルの血が流れているために相性がイイらしい。

能力としては、自己治癒能力と怪力と変身能力と多い。

その他にも固有の能力として、ノルウェーの「トロールのいたずら」を少し改変した相手の特徴を盗むことが出来る。

景夜は、「チート過ぎない！」と言葉が漏れたが若葉に「盗めても使いこなせなければ意味がない」とバツサリ切り捨てられた。

「そう言えば！今日は十二月二四日ですね！明日はクリスマスですよ！」

「ひなたの言う通りだな……。みんなは予定あたりするのか？」

景夜の問いにほぼ全員が「特にない」と返す中、千景が一人頭に疑問符を浮かべていた。

「クリスマス……？」

「郡先輩、……その……もしかしてクリスマスの事知らないんですか？」

「そうなの！ぐんちゃん！」

千景の反応に、全員が驚いた顔している。球子など「五万ぶつタマげただ」と意味の分からない発言を飛ばしている。

「じゃあ！明日クリスマスパーティーしようよ！」

「タマは賛成だ！」

「私も賛成です！」

「私も別に構わまない」

「こう言う、イベント事は欠かせません！」

「俺も別に大丈夫だぞ」

全員が賛成したのを見て、千景もおずおずと言葉を放つ。

「みんながやるなら……」

そこからは、急いでクリスマスの準備が始まった。買い出し組と飾りつけ兼食事組に分かれて作業を行う。

買い出し組は球子&杏&若葉、飾りつけ兼食事組は景夜&ひなた&友奈&千景だ。

景夜は本当なら、荷物持ちとして行きたいのだがなにしろ料理経験があるのがひなたと景夜しかないのだ。

景夜はある人に電話を掛ける。

『スイマセン、師匠。今お時間良いですか？』

『全然いいわよ！それで何か用なのかな？』

景夜は少し事情説明をして、師匠にお使いを頼む。

『えっと、骨付き鳥とケーキね。分かったは少し多めに買ってくるからねー！』

『ええ!?べ、別にいいですよそんな。』

『アタシが食べたいの！アタシの分も含めて用意しておいてね〜！それじゃ〜！』

「えつちよ！師匠！…ダメだ、電話切れてる。」

景夜は「面倒ごとになりそうだな〜」と呟き、食事の準備に入った。

一方、買い出し組はというと…

「結構買ったなく、パーティは景夜の部屋でやるんだろ。大丈夫なのか？あの部屋結構狭いぞ」

「狭いように見えるのは、景夜が色々ものを置いてるからだ。昨日の内にはひなたと片づけをしたと聞いたから大丈夫だ」

「そうなんですか？」

杏は少し意外な顔をした。

「若葉さんは、手伝は無かったんですね」

「まあな、いつもは一人でやる奴なんだが。昨日は中々に整理するものが多かったから、ひなたに応援を依頼したらしい」

そういうしながら、買い物を終えた三人は丸亀城への帰り道を歩いていた。

若葉だけが気付いていた、ストーカー不審者に。

「土居、伊予島。私が合図を出したら、急いで走れ。今、何者かに追われている」

「ま、マジかよ。…わかった、合図が来たら杏を引っ張って走る」

「私も状況は把握できました。どんな合図ですか？」

若葉は、先程拾っておいた石を後方から付けて来た男に向かって投げつけた。

「今だー！」

「おい！若葉いきなりすぎるぞー！」

「もうちよつと安全な作戦を立てましょうよー！」

球子と杏はこう言いながらも、ちゃんと走っている。数分程追いかけてつことが続くと杏に疲れが見え始めた。

「ハア……ハア……ゼエ……ハア」

まだ、鍛え始めて4ヶ月も経っていない。

元々病弱で運動もあまりしてこなかったインドアの杏からしたら、数分のチエイスも中々に堪える。

距離も少しづつ詰まってきたりどうするべきなのか、若葉は思考し始めた。

その時、追い掛けていた男が急に止まった。

前を見ると、そこには笑顔で怒っている景夜がいた。丸亀城の敷地まで後二〇〇mはあるだろう、なのに何故か彼はいた。

その姿を見て、若葉が叫ぶ。

「景夜！こいつを頼む、私は二人を」

「りよーかい！任せとけー！」

言葉はそれだけなのに、自然と頼まれたことは理解し処理することができる。

景夜が一步踏み出す、背負っていたギターケースが揺れ、男が一步後ろに下がる。

景夜が二歩目の足を出す、先程までの笑顔が無くなり真顔になり、男は少年の異様な雰囲気には驚き腰を抜かして尻もちをつく。

景夜が三步目の足を出す、段々と男との距離が詰まる、男は何度も立とうとするが何故か足が上手く動かず立ち上がれない。

そして、四歩目に――

「すいませんでした!」

「いやいや、別にいいよ。こつちこそ疑わせるようなことをして悪かった」

男はただ球子が落とした、ハンカチを拾って届けようとしただけのいい人だった。

でも、中々声を掛けることが出来ず。最終的にストーカーの様に付いて行ってしまったのだ。

運が悪かった、それだけだが少しムカついたので――

(若葉め!後でひなたと一緒に前回のコレクション増やしてやる!)

こう思っていた。

その後は、普通に準備をして一日を終えた。

景夜の部屋には、飾りつけ用のリボンやらなんやらがダンボールに入れて置かれていた。

景夜はその箱を無視しつつ、パソコンに向かっている。

イヤホンマイクを被り、通話をしながらゲームをやっている。

「郡先輩、そっちの方に殺人鬼行きましたよ」

「分かったは、発電機の修理よろしく」

短い言葉を交わして、景夜はゲーム内の自分のキャラを動かして発電機を直させる。

景夜と千景がやっているゲームはDea? by Da?ling
htと言う、簡単に言えば殺人鬼と生存者に分かれてやる鬼ごっこ
だ。

生存者はマップ内にある発電機を修理し、脱出ゲート開けて逃げ
れば勝ち。

殺人鬼はすべての生存者をフックにつることが出来れば勝ち。

簡単そうに見えるが、奥の深いゲームだ。景夜は初めて3ヶ月は経
つが未だに殺人鬼が近づいて来た時の心音にはドキツとしていた。

そんな時――

「ごめんなさい、柊君。殺人鬼そっちに行つたわ」

「え、ちよま！ああ、もう！郡先輩は発電機の方俺のやつ継続してお願
いします」

その後、結局は千景に助けられ何とか脱出に成功した。

「郡先輩お疲れ様です」

「柊君もお疲れさま。今日は遅いからもう寝ましようか」

「そうですね、それじゃあおやすみなさい」

「ええ、おやすみなさい」

景夜はパソコンをシャットダウンさせて、ダンボールにぶつからな
いように歩きベツトにダイブする。

「今日も疲れた〜」

眩きは、誰に聞かれることもなくただ消えていった。

昨日から、一様は冬休みになったが鍛錬もあったのでみんなが集まったのは四時を少し過ぎたあたりだった。

「——という理由で、今日は俺の師匠も参加するけど許してくれ」
景夜は頭を下げるが、みんなは全然気にしてないと笑って許してくた。

それが嬉しくて、景夜もたちまち笑顔になる。

「それで！なあなあ、タマたちにも師匠のこと教えてくれよう」

「それ！私も聞きたいな！」

「ああ、私も興味があるぞ」

「どんな方なんでしょうね？」

「そうね……、私も知りたいわ」

「気になりますね」

みんなが口を揃えて言ってくるので、景夜は師匠の説明を始めた。

「師匠は今一五歳だよ。それでいて結構綺麗な女の人かな？」

「え!?女性の方なんですか!」

ひなたがビツクリして立ち上がる。だが、その他の勇者は違う違和感を覚えていた。

「景夜、今一五歳と言ったか？」

「言ったぞ、別に変な事でもないだろ。こんな世の中だぞ？」

「そ、それもそうか」

何故か、納得した若葉は質問を止めてしまう。

その後も、少し質問攻めのような感じになったが何とか躲して師匠を待った。

五時を過ぎたあたりになってようやく玄関のドアが開いた。

「景夜くん、ケーキと骨付き鳥買って来たわよ〜」

オフの日特有の、師匠の間延びした声が聞こえてくる。

「スイマセン、師匠。何かパシリみたいにしちゃって」

「別にいいわよ、暇だったしね〜」

そんな師匠を見て、ひなたと若葉が驚いて声を上げた。

「も、紅葉さん！」

「も、紅葉姉さん！」

「あら〜、ひなたちゃんに若葉じゃない！久しぶりね〜」

三人のやり取りに少し付いていけない他の勇者たちに、景夜が紅葉を紹介を促す。

「ごめんね〜、勝手に盛り上がっちゃって。私の名前は赤木紅葉、あかぎもみじ景夜君の槍の先生兼若葉の従姉です！みんなよろしくね〜」

紅葉のテンポに付いて行けなかったメンバーも、時間が経つごとに紅葉と距離が近くなっていく。

主に精神的にだが。

楽しい時間はあっという間に過ぎていく、ゲームやらお喋りをして最後に「王様ゲームをやろう！」と紅葉が言いだした。

景夜が割り箸を用意して、ついにゲームが始まった。

(ひなたにだけは、王様になって欲しくない！)

景夜と若葉が同時にこう思っていた。

そして――

「私が王様だね〜」

紅葉に当たった。王様になった紅葉がどんな命令を下すか分からないが、ひなたになるよりはマシだと思いい紅葉の言葉を待った。

「じゃあね〜」と紅葉が声に出したその後顔つきと声が変わった。

「全員の戦う理由を教えてください」

簡潔な問、その問いに一番早く答えたのは若葉だった。

「奴らにバーテックスに報いを受けさせる、それが私の戦う理由です！」

若葉の次に球子と杏が――

「杏を守るためだ！」

「タマっち先輩を守るため」

二人は息が合っていて、行っている言葉も似ている。お互いがお互いを守るそんな関係。

次に友奈と千景が――

「私は、大切な友達を守るため！」

「私も、…高嶋さんや柊君のような友達を守るため」

似ているようで、少し違う。友奈は全を守りたい、千景は大切な小を守りたい。似ているようで違って、逆にそれが綺麗に見える。

次にひなたが――

「私は戦えませんが、せめて皆さんの帰ってこれる場所に
優しいひなたなりの、自分自身と戦う意思表示。」

「景夜くん、あなたは何の為に戦うの。何の為にその力を振るうの？」
紅葉の問いに、景夜は迷いなく答える。

「もう、これ以上大切なものを奪わせない為に。そして、終景夜の生き
様：明日を生きる人に希望を！これを果たすために戦う」

景夜の迷いなき答えに、微笑む。

その姿は、まるで妹や弟を大切にする姉のようで、母のような温か
い何かがあった。

「そっか、それなら……修行頑張らなくちゃね！」

「はい！これからもよろしくお願いします！師匠！」

この日、また少年に新たな決意が生まれた。

みんなが明日を生きたいと言う決意が。

第四話 「初詣と修行とその後の話」

一月一日、元旦である。

昨日はみんなで年越しうどんを食べて、どんちゃん騒ぎをしていた。

もちろん景夜の部屋でだが、その所為かみんなが景夜の部屋で寝落ちという事態が発生。

師匠である紅葉や生真面目な若葉ですら、景夜の部屋で眠っている。

昨夜のこと思い出し、感慨に耽りながらもみんなを起こしていく景夜。

「おーい！みんな起きろ！」

「…タマはまだ眠いぞ…」

「私もー！」

球子と友奈は返事をしたものの起きない。

「もう…そんな時間かしら…？」

「…そろそろ起きないですかね」

目を擦り、眠そうにしながらもちゃんと起きる千景と杏。

「おはようございます！景夜君」

「…すまんな景夜、眠りこけてしまった」

朝起きて、開口一番が挨拶と言うひなた。朝起きて、開口一番が謝罪と言う若葉。いかにも二人らしいものがそこにある。

「……むにゃく……まだ眠い」

相も変わらず、オフの日はトコトン脱力する紅葉。

全員を何とか起こした景夜は、手短かに支度を済ませて簡単な朝食を作る。

昨日の内に買っておいいたマーガリン入りの黒糖バターロールを、オーブントースターで焼く。

焼いている間に昨日作ったうどんの残り汁を使い、手早くスープに早変わりさせる。

野菜多めに作っておいたので、まだ野菜も残っている。

和風寄りのスープ？にバターロールは合わないと思うが景夜的には、手早く作れて残り物を無駄にしない最高の一品でもあった。

若葉やひなたに手伝ってもらい、十分程で朝食は完成。

まだ、寝ぼけている連中にも朝食を出していく。

時刻は七時を少し過ぎたあたりで、これからのことを景夜は思案していく。

(みんなが飯を食い終わったら、着替えて初詣にでも行くかな…)

そんな景夜の考えを読んだのか、ひなたがみんなを誘いが始める。

「皆さん、この後とことなんですが」

「何かなひなちゃん」

「どっか行くのか？」

先程まで、眠そうにしていた2人は既に起きています。

紅葉も朝食を食べながらひなたの話聞いていますよ。

「初詣にいくんでしょ！それなら、アタシに任せて〜！」

紅葉が何か思いついたように、声をあげる。

「紅葉姉さんが何かやるのか？」

若葉は不安を隠せないでいる、かくいう景夜も少し動揺している。

「初詣…？」

やはりというべきか、千景は初詣も知らないようだ。

ここまでくると、彼女の家庭環境がどれだけ悪いかは分かってくるというもの。

景夜は苦笑いを浮かべながら、初詣について説明をする。

「初詣とは、年が明けてから初めて神社や寺院などに参拝する行事です。一年の感謝を捧げたり、新年の無事と平安を祈願したりするのを言うんです」

「後は、初参ともいいますね」

「へえ……、みんなで行くのかしら？」

「そうですね……昨日皆に聞いたけど、用事はないみたいですし」

ひなたの補足も入り説明を終えた後の食いつきに、景夜は驚きながらも嬉しかった。

(郡先輩、段々とこういうイベント慣れて来たんだな…)

その後は、景夜以外の全員が紅葉に連れていかれ景夜だけが部屋に残された。

「師匠のことだ、まうた何かやってんのかな」

紅葉のことを疑うが信じていない訳ではない、みんなが完全に嫌がることはしないだろうと踏み指定された場所に一人移動し始めた。

景夜が向かったのは丸亀城近くにある、丸亀護国神社。

神樹様という神様が現れてからは、寺ではなく神社の方が参拝客増

えているらしい。

恐らくだが、もう少し先の未来では神棚などが学校に配置される事態がくるというのが景夜の見解だ。

神社に着いてからしばらく待つと、一台の車が景夜の前に現れる。そこから出て来たのは、晴れ着姿の少女たち。

「待たせてすまなかつたな景夜、……どうだ変ではないか？」

「……はっ！スマン、ちよつとみんなに見とれてた」

景夜は本当に見とれていた、呼吸をするのも忘れて見入っていた。

そんな景夜をおちよくるようにひなたが肘で小突く。

「そんなに似合ってますか私たちの晴れ着は？」

「ああ！すっごい似合ってる！」

「そ、そうですか……」

思ったことを言っただけなのに、何故かひなたが顔を赤くしていた。

そんな事には気付かないのか、ひなたと若葉の手を引っ張りながら進んで行く。

みんなの晴れ着は花がモチーフの物だ。

若葉が桔梗、友奈が山桜、球子が姫百合、杏が紫羅あらせいとう欄花、千景が彼岸花、ひなたが紫のアネモネ、紅葉が七竈だ。

それぞれが違っているが何故か景夜には皆のその選択、おかしいほどにしっくりくる。

(偶然なのか？……いや、気のせいかな……)

景夜はその違和感を放り捨て、お参りの順番が自分たちに回ってき

たことに気付く。

「俺たちの番だな」

「景夜、間違えるなよ」

「二礼二拍一礼ですよー!」

ひなたの言葉の通り、二回深く礼をし二回拍手をしてなた礼を一回する。

みんなの願いはそれぞれだ。

ひなたの願いは、みんなの健康。

若葉の願いもまた健康。

球子の願いは、みんなともっとバカをやれますように。

杏の願いは、こんな何でもない日常が続きますように。

友奈の願いは、もっとみんなと仲良くなれますように。

千景の願いは、ちゃんとみんなの目を見て話せますように。

紅葉の願いは、全員が欠けることなくお役目が終わりますように。

景夜の願いは、みんなの笑顔がこの先も見られますようにだ。

このようにして、八人の初詣は無事に終わった。

一月二日十五時半頃、丸亀城近くの山にて。

「はあ……はあ……」

「まだまだいくよー!」

紅葉の槍による神速ともいえる突き、連続で放たれるそれを景夜は一つ一つ確実に落としていく。

槍の基本攻撃は突き、払い、斬り（相手を）跳ね飛ばす、叩き潰す、などだ。

柄を長く持つときは長さを有効活用し、相手の有効攻撃圏外から先制攻撃を仕掛けやすい。

柄の中ほどを持つときは棒術や格闘技で威力を發揮しやすく、切り替えもスムーズに行うことができ、また石突き部分を効率良く使いやすい。

柄を短く持つときは至近距離での突き刺し、斬り裂きなどの戦闘を行いやすいが、柄が長いためのナイフのように取り回せないことを考慮しなければならぬ。

後は、相手の足に柄を引っ掛けて転ばせる足払い。

などのものがある、最後の足払いはバーテックスには通じないのであまり修行では使わないようにしてる。

紅葉が柄の中ほどを持ち、棒術を使い叩きつけるような攻撃が増えていく。

景夜も柄を中ほどで持つことで、紅葉の攻撃に対応していく。

上段からの叩きつけるような攻撃を柄の部分を使い横にスラリと受け流し、流れるように攻撃に繋げる。

だが、受け流されるのを分かっていたのか紅葉の動きは早く、叩きつけるようにして振った槍の運動エネルギーをそのままに一回転して、攻撃をしようとした景夜の槍を払う。

振り下ろす力が相当に強かったのか、回転の速さは凄まじく景夜に攻撃の隙を与えない。

かれこれ三時間は休まずに修行をし続けているが、景夜の当たった攻撃は零だ。

景夜も成長し強くなっているが、それ以上に紅葉が化け物すぎる。

柄の中ほどを持つとき、この持ち方では戦闘に十分対応するには個人の経験や技術などが深く関係し特に扱いに不慣れな者は使い難い。

簡単に言えば、景夜はそこそこには使い手に近くなっている。

修行を始めて五か月、驚きの成長スピードといえるだろう。

けれど、こんなことで越えられるほど紅葉という壁は薄くない。

紅葉は十一月十三日生まれの一五歳、物心ついた時から振っていたという槍の経験値は計り知れない。

バーテックスは神の力が宿った神器でしか倒せない。

景夜が聞いた話によると、何と紅葉はバーテックスを神社に奉納されていた護神刀で倒したという。

有り得ないことだ、いくら神社に奉納されて少しばかり神の力があるとはいえバーテックスを護神刀で倒すなど。

これが出来る程には、紅葉は天才化け物ということだ。

彼女の本領は槍だ、もし自分の神器である天逆鉾を彼女が持っていたなら……まさに鬼に金棒だろう。

景夜は溜まった疲労のせいで膝を折りかけるが、根性でそれを耐える。

強くならなければいけない、勇者唯一の男としてみんなを守るために。

(若葉より強くならないと！じゃないと、あいつは俺に自分のことを守らせてくれない！)

「景夜くん、精霊を使ってみて」

「トロール……ですか……」

「そうよ！精霊の力は聞いているは代償はあるけど、それでも使い慣れることにも意味はある！」

胸を張って言う紅葉に従い、まだ未だ未完成の勇者システムを使い精霊を呼び出す。

精霊を体に宿したことより、体に変質していく。

皮膚の色が緑色のようになり、体も若干だが筋肉質になっていく。

景夜も筋肉をつけてはいるが、成長に影響がないレベルでしかつけ

ていないために余計筋肉質に見える。

トロールを宿したことにより、異常ともいえる速度で紅葉に付けられた打撲の跡が消えていく。

この光景を見たものは思うだろう、悍ましいと……

現に、景夜は加速度的に可笑しくなっていく自分の体を嫌悪している。

ようやく、体の怪我や疲労が治ったところで精霊を外そうとする。

おおよそ、体の怪我や疲労を治すのに掛かった時間は三〇秒程というところだ。

「景夜くん、精霊を外すのはもうちょっと待って」

「どうしてですか？ 師匠」

「少し試して見たいことがあるの」

そういうと、紅葉は景夜から数歩下がり対面に立つ。

「せやあ!!」

勢いのいい掛け声と共に突進してくる、明らかに先程より速い。

景夜はそれを先程とは違い、余裕をもって躲す。

精霊を宿すことによつて、明らかに身体能力が向上している。

それも、当たり前だろう精霊とは空想上や幻想上の生物だったり、史実に語られる者だったり様々だがトロールはその中でも身体能力は良い方である。

だからこそ、本気を出した紅葉の突きも躲す事が出来る。

紅葉はそのことに驚きながらも、攻撃の手を緩めない。

あらゆる方向から攻撃が飛び出してくる、足を払う攻撃を躲したと思つたらその直後には背後にいて突きを放たれる。

だが、景夜はその攻撃を見てから躲す。

紅葉の攻撃速度も化け物だが、景夜の反射速度や運動能力も精霊のお陰で化け物並みになっている。

五分間、紅葉の本気の攻撃を躲し続けた景夜は息切れもしていない。

景夜は今、絶対に発展途上の今の景夜では届き得ない高みの場所を見た。

「はい！ここまで、精霊を外して元の修行に戻るわよ」

「分かりました！」

紅葉の指示を受けて、景夜も精霊を外す。

この後も修行を続けたが、景夜は結局一度も攻撃を当てることは出来なかった。

その後も、時間は停まることを知らず進み続けた。

丸亀城の生活も一年を過ぎた頃には、若葉と景夜の実力は余り無くなっていた。

その頃には、みんなとの距離も縮まり段々と家族のような温かい関係が出来ていた。

みんなで紅葉の修行を受けることもあったが、ついて行けたのは若葉と景夜だけだった。

千景との仲も良くなり、景夜は「千景先輩」と呼ぶようになった。千景は「柊君」のままだったが。

二年を過ぎた頃には、若葉と景夜の実力は同等程になり偶に勝てるようになっていた。

色々なイベントをやったことで、千景も少しはみんなとの距離も縮まることに成功した。

学年も上がり、勉強も少し難しくなっていく。

友奈と球子の定期補習を景夜が行うようになったのはこの頃から

である。

バレンタインには、みんなから手作りチョコをもらい少し嬉しかったりしている景夜の姿もある。

母の日には、華恵の為に景夜がみんなに手伝ってもらい手作りのケーキと手紙を渡し、華恵を感動して泣かせていた。

三年が過ぎた頃。

天逆鉾特有の浮遊する穂先の扱いにも慣れてきていた。紅葉に対してもやつと一撃を当てられるように成長を遂げた。

そして、もう一つ。これも天逆鉾特有のものだ、天逆鉾の真価を発揮させる絶技を習得する。

制約があり、一回の戦いで発動できる回数は一回だけというものだ。それがあってもあまりにも強力過ぎるこの絶技は、紅葉の助言により本当に危なくなった時以外は使わないと決めた。

勇者たちの共同生活も四年目に突入した、ここから本当の戦いが始まる。

「景夜君？どうしたんですか？」

「ん、いや、ちよつと考え事」

これまでの三年間を振り返っていた、景夜にひなたが話しかける。少しの間瞑想ついでに振り返っていたのだ、記憶を遡り追体験した。

景夜はとても楽しい三年間だと思った、それと同時にこれから始まるかもしれない戦いに闘志を燃やしていた。

未来のことは分からない、だからきつと良いものにしてみせると誰かが思っていた。

第五話 「通信と愚痴と樹海化」

西暦二〇一八年八月末日、丸亀城にて――

「景夜くん！もつと集中して！穂先のコントロールが乱れてるよ！」

「そんなこと言っても！この状況はいくら何でも難しいですよ！」

グラウンドにて、地面に突き刺さった直系五cmほどの木の棒の上に立ち、紅葉の攻撃を避けながら穂先の精密操作をするという、あまりにもスパルタかつ頭のオカシイ特訓をしていた。

そんな頭のオカシイ特訓を目の当たりにした、友奈と球子は開いた口が塞がらないでいた。

「ヤバイ特訓してるとは聞いてたが」

「ここまでやってるとちょっと怖いね」

友奈と球子も紅葉に教わったトレーニングをしているが、あそこまでのものは見たことがない。

そんなことはさて置き、特訓している景夜の下にひなたと若葉が近寄ってくる。

「……相変わらず、何と言うか凄い特訓ですね」

「はつきり言わないとダメだぞひなた。景夜、その特訓は流石にやり過ぎだ」

若葉の最もな指摘を受けて、複雑な顔をする紅葉と「そうだろそうだろ！」という同意の顔をする景夜は、ひなたの視点からみてもとても面白い光景だった。

「ですってよ師匠。…で、何か用があるんだろ？何の用だ？」

「諏訪との通信だ、景夜も来てくれ」

「歌野か…あつちもまだ無事なんだな」

「まだ無事」その言葉は景夜にとっては、「必ず助けに行く」という言葉だと若葉とひなただけが知っていた。

「師匠、今日はこの辺で」

「はいはい、ちゃんと一人でもやりなさいよ？」

「師匠の攻撃が無ければもっと、楽ですよ！」
漫才をしながら、その場を後にする。

丸亀城は一部改装され、若葉たちの学校として使われている。改装と言っても、外観はほぼ残したままで、内部の構造を少し変えた程度だ。

その学校に通う生徒は六人のみ。六人の『勇者』と、一人の『巫女』。勇者とは、土地神から力を授かり、バーテックスに対抗し得る者のことである。若葉も勇者の一人で、三年前のバーテックス襲来の日、その力に覚醒した。四国には六人の勇者がおり、全員がこの学校に通っている。

巫女は土地神の声を聞く者。ひなたがその一人で、三年前にバーテックスから人々を救うことができたのは土地神の声を聞いたからだ。『声を聞く』と言っても、それは言語として伝わってくるのではなく、象徴と暗示によって伝達される。

勇者も巫女も、すべて幼い少女である。穢れを忌み嫌う神に触れることができるのは、無垢な少女だけだからだ。

だが、景夜だけが少し違う彼の力は元々は天の神の父伊邪那岐神の

ものであり、神樹とのアクセスも大社が呪術と化学を併用して景夜専用の勇者システムを作ったのだ。

そして若葉は四国の勇者の中で、暫定的にリーダーとされている。放送室に入り、彼女は無線機のスイツチを入れて通信を繋いだ。しばらくの雑音の後、落ち着いた少女の声が通信機から発せられる。

『……長野より、白鳥です。勇者通信を始めます』

『香川より、乃木だ。よろしく願います。今回は景夜もいるがよろしく頼む』

長野県諏訪湖東南の一部地域には、四国と同じく結界が存在し、人々が暮らせる環境が残っていた。白鳥はただ一人で長野の守護を担う勇者である。

『歌野、そっちの状況はどうだ？』

『芳しくはありませんね。もつとも、そんなことを言えば三年前のあの日から状況が芳しかったことなど一度もありません』

『……違う』

若葉は口調が暗くならないよう努めた。

元々長野は、諏訪湖を中心としてもつと広い地域が安全に保たれていた。しかしバーテックス出現から三年の間に、次第にその地域は侵攻され、今や保たれているのは諏訪湖東南の一部のみである。

『今は現状維持ができるだけ……ザー……でしよう』

通信の途中で白鳥の声が乱れた。

『すまない、通信にノイズが入ったようだ』

『ああ、現状維持ができるだけでも御の字だと言ったのです。通信の

ノイズ、最近多くなっていますね』

『そうだな……』

『この通信もいつまで続けられるか……』

考えると少しだけ気分が沈むが、若葉と景夜は不安を見せぬよう、景夜は敢えて冗談めいた口調で話題を変えた。

『ところで歌野。そろそろ決着をつけようじゃないか……』

『ええ、私もそう思っていたところです。今日こそは雌雄を決しましょう……』

白鳥も不敵に答える――

『』『うどんと蕎麦、どちらが優れているか、を！』『』

その後は、若葉と景夜と歌野の論争は終了のチャイムまで続いた。

『時間切れか。蕎麦は命拾いをしたようだな』

『それはこちらの台詞です。うどんこそ命拾いをしましたよ。……明日からは新学期が始まりますから、通信は放課後の時間にした方がいいですね』

『うむ、そうしよう。では、また明日も。長野の無事と健闘を祈る』

『四国の無事と健闘を祈ります』

若葉は通信を切った。

白鳥と軽口を交わすのは大切な時間だ。四国から出ることでできない若葉よ景夜にとって、この通信は唯一の『外』との繋がりである。四国以外にも共に戦う仲間がいることを実感できるのだ。

翌日、今日は景夜の誕生日だ。彼は少しウキウキ気分で学校に行く。

朝の訓練を終えた後、寄宿舎に戻りシャワーを浴びて、服を着替える。

この三年間で当たり前前になっている日常が、そこにあった。学校に着くと、そこにはもう若葉と球子に杏も来ていた。

「おはよう、朝早いな三人とも?」

「おっはよう! 景夜」

「おはようございます、景屋さん」

「おはよう、景夜」

三人に挨拶をした後、授業の準備に入る。

「おはようございます」とひなたの挨拶が聞こえて、その後のやり取りも聞こえたが景夜は無視していた。

何せ後ろでは、ひなたの胸を千切ろうとする勢いで揉む球子がいるのだから、そんな場面を見たら今日一日はひなたの顔を見れなくなってしまう。

景夜の考えを余所に、ドアが開き千景が入ってくる。

少し辺りを見渡し、友奈がないのを確認したら景夜の方に来て話し始める。

もちろん二人の共通の話題と言えば――

「柊君は、一二月にできるスマブラの予約する?」

「します、します。今回はXの時と同じでストーリーもあるっぽい

ですし」

二人が今年の一二月に発売されるスマブラについて話す、その間には過ぎて友奈が時間ギリギリで滑り込んだ。

「おはよーございまーす！高嶋友奈、到着しました。良かった、遅刻じゃない！」

これが当たり前の日常、三年前終わってしまいまた始めることのできたちよつと違うけど、楽しい生活。

それがまた、音を立てて崩れようとしていた。

午前の授業は座学と訓練、普通の学問以外にも神道のことを学ぶ。

訓練教官は、紅葉。

必然的に訓練はスパルタになる、三年間もやれば慣れるが未だに杏や千景のような体力が余り無い連中はぜえぜえ言っている。

訓練が終わり、昼休み。

みんなで食事をとる。

最初は反対していた者もいたが、友奈の「ご飯は、みんなで食べた方が美味しいよ」の一言にて終わった。

景夜達は各自セルフサービス形式なので食事をトレーに取っていく。

「景夜は今日もパスタか」

みんなの視線が痛いがない、基本景夜は麺類で何が好きかと聞かれるとパスタと答える。

うどんも勿論好きだが、華恵の特製パスタの味は忘れられず、無理をいってパスタを置いて貰ってるのだ。

「訓練の後のご飯は美味しいー！」

友奈の言葉にみんな頷く中、ご飯を食べながら本を読む杏に球子と景夜からのダブルパンチが飛ぶ。

「こら、あんずっ。行儀が悪いぞ」

「そうだぞ、親しき中にも礼儀あり、だ。食事中にそういうことは控えろよ」

「ああ、今、いいところだったのに……」と杏の声が聞こえたが無視して食事続ける。球子に本を没収され、ようやくみんなが普通にご飯を食べ始める。

「……にしてもさー、毎日毎日訓練訓練って、なんでタマたちがこんなことしないといけないんだろーな」

ボヤクように球子がそう言った。

「バーテックスに対抗できるのは勇者だけですからね……」

「そりゃ分かってるよ、ひなた。でもさ、普通の女子中学生って言ったら、友達と遊びに行ったり、それこそ恋……とかしちやったりしてさ。そういう生活をしてるもんじゃん」

球子はため息をつく。球子の言いたいことが分からない訳ではないが、それでも言わなきゃいけない。

「今は有事だからな、自由が制限されんのは仕方ねーよ。第一、別に俺ら不便な思いしてねーだろ？」

景夜の答えに、球子は納得していないように腕を組む。

「うーん……」

「我々が努力しなければ、人類はバーテックスに滅ぼされてしまうんだ。私たちが人類の矛のならないならなければ——」

「分かっているよっ！分かっているけどさあっ！」
球子が声を荒げた。そしてすぐに顔を俯けてポツリと呟く。

「…………ごめん…………」

「タマっち先輩…………」

杏は球子の服の裾をそっと握り、彼女を見つめた。その瞳は不安そうに揺れている。

場が沈黙する。

若葉にも景夜にも球子の気持ちは理解できた。球子は我が儘で不平を言っているのではなく、不安なのだ。

バーテックスとの戦いには危険が伴う。

もし実際にバーテックスとの交戦になれば、生き抜けるかどうか…………いや、むしろ命を落とす危険の方が高い。

事実、三年前に若葉と景夜がバーテックスと戦った時も、ひなたがいなければ若葉と景夜は殺されていたかもしれない。

(まして土居は…………自分以上に伊予島が傷つくことを恐れているのだろう…………)

若葉は俯いている球子を見ながら、そう思った。

杏は運動が得意ではなく、格闘技の訓練でも一番成績が悪い。

強さの順で言えば、景夜<友奈<若葉<球子<千景<杏、という感じだ。

いざ戦いとなった時、命を落とすの可能性が一番高いのは杏だろう。

重い沈黙を破ったのは景夜だった。

「なあ、若葉。」

「な、何だ、景夜?」

「いつ俺が、自分の身を犠牲にしてまで人類他人を守れなんていったよ」

「それは……」

「後は、球子」

「お、おう」

「怖いなら怖いって言え！言わなきゃ分からん！」

「……ああ」

いつもと違う景夜に驚く者たちがいる、だがひなただけが落ち着いていた。

「人間の手は長くない、伸ばして守る範囲には限界がある。だから、自分の身と大切な奴だけを守れ！……それが出来ないんなら。……自分の身も守れそうにないんだったら——」

「……ないんだったら……」

千景が少し怯えた声で言葉を紡ぐ。

「俺を守る、何からも、どんな時も、俺という存在の全てを懸けて」

きつぱりと言い切った。

景夜の言葉が耳に響く、心に響く。

「ごちそうさま、今日も美味しかった！」

友奈の満足そうな気の抜けた声が響く。

「どうしたの、みんな？ 深刻な顔して」

「……友奈……さっきまでの話聞いてなかったのか？」

友奈は困り顔をつくり、苦笑いで答える。

「え、えっと……ごめん、若葉ちゃん！うどんが美味し過ぎて、周りのことが意識から飛んでちゃって……」

その場にいるみんなが、一斉にため息をついた。

「ええ!?なんでみんなため息つくの!?!」

友奈は心外だと言うように周りを見回して、

「大丈夫だよ。私たちみんな強いし、みんなで一生懸命頑張ればなんとかなるよ」

笑顔で、そう言った。

昼食後、三人だけで廊下歩きながら、若葉はひなたと景夜に眩くように言った。

「私は……リーダーに向いてないのだろうな」

「なんでそんなことを思うんです?」

「私は他人に自分の考えを押し付けすぎるところがあるのかもしれない。そのせいで仲間に反発を抱かせて、チームワークを乱している。本当にリーダーに向いているのは、友奈や景夜のような——」

「えい!」

若葉の言葉を遮り、ひなたは彼女を抱きしめた。

「ひ、ひなた!?!」

「何を弱気になっているんですか、若葉ちゃんらしくない。若葉ちゃ

んにはね、ちゃんとリーダーしてますよ」

「そうだぞ若葉、俺にはリーダー何か向かない。大体、お前と違って俺は全部救いたいなんて思ってない。俺が守りたいのは、救いたいの
は、この日常と丸亀城のみんなだけだよ。だから、そのために人^他類を守
る」

ひなたと景夜の言葉を、若葉は頭の中で反芻する。
本当にそうなのか自分では良く分からない。

「へえく若葉ちゃんにそんなことを」

「何だか大変ね」

今、景夜は保健室にいる。誕生日プレゼントを渡され嬉しい反面、
先程の会話がどこか引っかけかりそのことを話した。

「母さんと、師匠にも何か聞けたらなくと」

「そうね、母さんからしたら…多分心配してるんじゃないかしら?」

「心配?」

「そう」と言っつて、華恵がそのまま言葉を続ける。

「自分が導いていけるのか、自分が纏めていけるのか。もし、自分の指
示のミスの所為で死んだらどうしようとか……そんな感じじゃない
かしら?」

「そっか…」

華恵の言葉を聞いて納得した景夜は、若葉の下に向かおうとする。

時刻は夕暮れ時だ、その時…

何かが変わった、カチリと世界の変わる音が景夜の耳にはつきりと

聞こえた。

景夜の耳にスマホの耳障りな警報音が鳴り響く。

世界の時間が止まる、先程まで喋っていた紅葉や華恵も動かない。外で宙を舞っている木の葉が空中で制している、蝉の鳴き声や船上を行く船も遠く見える海の波も、全てが止まっている。

警報音がなるスマホを見る、画面には『樹海化警報』という文字が大きく表示されていた。

そして、海の方から蔓や根が伸びてくる。

神樹のものだろう、それが世界の全てを覆う。

今日、この日。

新たな物語が始まった。

第六話 「口ケンカと誕生日と未来への誓い」

「いつもとは違う世界」、こう言ったら聞こえはいいが、実際は戦場でバーテックスという化け物から神樹を守らなければいけない。

景夜は走っていた、槍は常時持っていたので直ぐに変身して戦線に急ぐ。

そこには、変身し終えた若葉の姿がある。

桔梗を意匠にした勇者装束で、イメージカラーは青や紺だ。花言葉は「永遠の愛」、「誠実」、「清楚」、「従順」である。

対する景夜はと言うとピンクのグラジオラスを意匠にした勇者装束で、イメージカラーはピンクや桃色だ。花言葉は「たゆまぬ努力」、「ひたむきな愛」、「満足」である。

みんなを待っているであろう若葉に声を掛けようとした時、後ろの草むら？のような所から友奈と千景が出できた。

「若葉ちゃん！カゲヤくん！」

声の方を振り返ると、友奈と千景が駆けて来ていた。友奈は手甲を、千景は死神を思わせる大鎌を持っている。若葉の刀同様、それが彼女たちの武器である。

「はあ、はあ……急に時間が停まっちゃって、周りはずつかい蔦みたいなのが出てきてぐわーつとなるし、びつくりしちゃったよ！ 地図のおかげで、みんなの居場所が分かって良かった……！」

友奈は息を切らせながら、スマホの画面に表示されたマップを若葉に見せた。勇者たちとバーテックスのいる位置が、それぞれ光点で示されている。

「というか若葉ちゃんにカゲヤ君、もう変身してる!？」

今気づいたのか、友奈が驚く。

「常在戦場。刀をいつも持参しているのも、すぐ戦えるようにするためだからな」

「若葉ほどじゃないが、俺も万が一に備えて出来るだけ近くに置いてるだけだよ」

「そういう真面目さと責任感の強さ、若葉ちゃんとカゲヤ君らしいね……私も見習わないとー」

友奈は拳を握りしめ、まっすぐに感心の視線を向ける。

「高嶋さんは……今のままでいいと思う……」

千景は独り言のようにつぶやいた後、周囲を見回して眉をひそめた。

「それにしても……これが樹海化ね……」

四国の土地全体が、壁と同質の植物組織に覆われている。

樹海化が起ると、四国の内部は時が停止し、生物も非生物も植物に覆われ同化してしまう。わずかに原形を残しているのは、丸亀城や瀬戸大橋、送電鉄塔や高層ビルなど、大型建築物だけだ。

樹海に吞まれて同化した生物は、バーテックスからの攻撃で被害を受けることがなくなる。そして勇者だけが樹海化の中で本来の形を保ち、動くことができる。

（樹海化のことは、知識として聞いてはいたが――）

若葉も変わり果てた四国の光景を見つめながら、険しい表情を浮かべた。

現実味がないほどの変貌。

まるで異界だ。

友奈は近くに生えている巨大な植物の蔓に触れる。

「こんな大きな植物、見たことないよ。これも神樹様が起こしたんだよね……?」

「ああ。樹海化は、神樹による人類守護の緊急手段って先生も言ってただろ?」

四国を守る壁と結界は、まだ未完成と言われている。

バーテックスが一群となって四国へ侵攻した際、神樹は敢えて結界の一部分を弱め、彼らを内部へ通す。バーテックスの侵攻を防ぐために結界を強化し続ければ、神樹が霊力を浪費してしまうからだ。

もし神樹の力が枯渇すれば、四国の人々は生活ができなくなる。四国という閉じた世界が、エネルギーや物資などを自給自足できているのは、神樹の霊力による恵みなのだから。

そのため、四国内へ通されたバーテックスの撃退は、勇者の御役目となる。

そしてバーテックスが侵入している間、神樹は人々を守るため、樹海化を行う――

(だが、樹海化の防御も絶対ではない……)

若葉は確認するように心の中でつぶやく。

樹海の一部がバーテックスの攻撃で損傷したりすると、その傷は現実世界に自然災害や原因不明の事故という形でフィードバックされるのだ。

くわえて、樹海化もやはり長時間続ければ、神樹の力を消費してしまふ。

くわえて、樹海化もやはり長時間続ければ、神樹の力を消費してしまふ。

ゆえに、できる限り迅速にバーテックスを殲滅し、樹海化を終わらせねばならない。

「おお〜いつ！ みんなー！」

大きな声とともに球子が走ってくる。その後ろには、球子に手を引かれる杏もいた。

「悪い、遅くなった！」

球子は鋭い刃のついた円形の盤——旋刃盤を、杏は連射式のクロスボウのような武器を持っている。

「全員揃ったな。……これが私たちの初陣だ。我々の手でバーテックスどもを討ち倒す」

仲間の勇者たち五人を前に、若葉が告げる。

リーダーとしての責務と私情。

「人類を舐めた辛酸を、奴らに思い知らせてやろう。」と。

「それはいいけど……当然、あなたが先頭で戦うのよね……あの化け物たちと。リーダーなのだから……」

千景は静かにそう言って、試すような視線を若葉に向ける。

場の空気が濁るような陰悪さを帯びていく。

「誰が先頭かとかじゃなくて全員で戦えばいいでしょ。それがチームワークってもんっですよ」

呆れたような口調で反論したのは球子だった。

「チームワーク……」

咀嚼するように千景が呟き、杏に目を向けた。

杏は小刻みに体を震わせ、顔色も悪い。

怯えている——

「伊予島さんは……戦えるのかしらっ？」

「……………」

杏は俯き、何も答えなかった。答えられなかった。

「土居さんたちがここに来るのが遅れたのも……伊予島さんが委縮して動けなくなっていたからでは……？そんなあなたたちがチームワークなんて……口にするものじゃないわ……」

千景の言葉に、杏はぎゅつと目をつぶり、拳を握りしめた。それでも体の震えと怯えは消えない。

「ましてや……」

「郡さん、言い過ぎです」

千景の声を若葉が遮った。若葉の鋭い視線を受けた彼女は面白くなさそうに目を逸らす。

（しかし、郡さんは言い過ぎだが……確かに今の状態の伊予島は良くない）

若葉が杏を見つめ、

「伊予島。怖いのはわかるが、私たちが戦わなければ人類が滅びる可能性だってあるんだ。顔をあげろ」

景夜に否定された筈の言葉をまた使っている。

「ご、ごめんなさい……」

杏の目に涙が浮かぶ。

「若葉、もういいだろ」

杏を守るように、若葉との間に立つ球子。

そんな三人を見ながら、千景は皮肉気に目を細める。

「兵の士気高揚も指揮官の務め……。乃木さん……あなたにリーダー

としての資質が足りてないから……このような事態になるのではないかしら……？」

「……！」

その言葉は若葉の痛い部分をついた。自分はリーダーという役目にふさわしいのか——若葉には確信が持てていない。

勇者たちを覆う空気は、ますます淀みを増す。その空気を吹き飛ばすように声をあげたのは、友奈だった。

「みんな仲良しなのはいいけど、話し合いは後にしようよ！」

「「仲良し??？」」

若葉・球子・千景の声が重なり、友奈の方を見る。

「うん、ケンカするほど仲が良いって言うよね？」

「「いや、それは違う（わ）」」

三人が同時に友奈にツツコミを入れた。

「即答で三人ともから否定された！」
シヨックを受ける友奈。

「えっと、あの、友奈さん……私も違うと思います」

「アンちゃんまで!？」

更に追い討ちだった。

「うう……」

四人からのツツコミを受けてダメージを負った友奈を景夜が慰める。

「友奈、その考え俺は好きだぞ！」

「カゲヤくん！あり——」

「まあ、二次元の中だったらな」

「ぐふう……」

いや、慰めではなく追い討ちだった。

何とか総ツツコミのダメージを耐えて、友奈は気を取り直して力強く言う。

「——でも。みんながケンカする原因を作ったバーテックスがすぐそこまで来てる。怒るにしてもケンカするにしても、相手はあいつらだよ」

友奈の言葉に続き景夜も笑いながら話始める。

「それに、今日は俺の誕生日だ！折角の誕生日パーティーをあいっつらに潰されてたまるか！……それに、言っただろ杏。何があっても守るって」

「景夜さん……」

友奈の言葉と景夜の冗談に、若葉はハツとした。

(……そうだな。仲間を責めるのも、苛立ちを感じるのも、お門違い。それはすべて、この状況を生み出した奴らにぶつけるべきものだ。)

球子と千景も気まずそうに、顔を見合わせる。

「ま、確かにそうだな」

「高嶋さんの言う通り……ね」

杏はまだ怯えているが――

（構わん。伊予島が戦えないのなら、その分私が戦えばいい。そのためのリーダー役だ）

若葉はこう思い、景夜は――

（杏のことはタマに任せるとしてもフォローが出来るようにしよう、それでアイツが戦えない分は俺がヤレばいい。それが仲間ってやつだ！）

似てるようで違う、そんな二人の意見。

若葉は刀に重みを感じながら、そう心に決めた。

景夜は軽くなった槍を握りしめ、そう心に決めた。

「よし、じゃあタマたちもそろそろ気合い入れっか！」

若葉と景夜以外の四人が携帯を取り出し、アプリをタップする。

「みんなで仲良く勇者になるー！」

友奈の声を合図とするかのように、それぞれの纏う服装が変化していった。

友奈の勇者装束は、山桜をモチーフにした桃色のものに――

千景の勇者装束は、彼岸花をモチーフにした紅色のものに――

球子の勇者装束は、姫百合をモチーフにした橙色のものに――

それぞれの花言葉は山桜は「あなたに微笑む」、「純潔」、「高尚」、「淡泊」、「美麗」。

彼岸花は「情熱」、「独立」、「再会」、「あきらめ」、「悲しい思い出」、「思うはあなた一人」、「また会う日を楽しみに」。

姫百合は「誇り」、「可憐な愛」、「愛らしさ」。

モチーフの花が分かった、景夜は少し嬉しかった。

(案外、神樹様も人間のことちゃんと見てんだな)

しかし、杏だけは変化が起こらなかった。勇者の振るう力は精神面に大きく左右される。

戦う覚悟と意志がを固めなければ、勇者装束を纏うことは出来ない。

「……………」

千景は変身できなかった杏を、無言で見つめる。

「……………」
「……………」
「……………」

涙を浮かべる杏の肩を、球子と景夜が元気づけるように叩く。

「着にすんなっての！タマたちだけで全部倒してくるから」

「そうだぞ、タマの言う通りだ。俺たちに任せタマえ！」

「……………」
「……………」
「……………」

杏は悲しげに頷く。

若葉はスマホのマップで、バーテックスの数と動きを確認した。

結界内に侵入してきたのは五〇体前後とあったところか。バー

テックスは一直線に若葉たちの方へ向かって来ていた。

彼らの行動特性としては、何よりもまず人間を狙う。

今、樹海化した四国の中にいる人間は若葉たちのみ。ゆえに真っ先に狙われるのだ。

若葉の視界に、遠くのバーテックスの群が見えた。

その距離、目算にて三km……………二km……………

「郡さん。さつきは生意気なことを言ってますみませんでした。言葉で

はなく、行動を持って示すべきですね」

若葉は千景にそう言う、刀を持って跳躍した。1kmほどの距離を一跳びで消滅させ、敵集団に肉薄する。

「うおおおおおおおおおおおつ!!」

鞘から抜き取られた白刃の一閃が、まず先頭に居たバーテックスを両断した。斬られた死骸が消滅する前に、敵の体を足場にして再び跳躍。更に別の個体を真つ二つにする。

若葉の居合切りは三年前とは比較にならないほど鋭く、迅く、無駄がない。

肉体的成長、神樹の勇者装束、そして積み重ねてきた訓練の結果だ。

まあ、もう一人いるのだが。天才化け物に鍛えられた秀才化け物が。

群がってくる無数のバーテックスたちが斬りながら。若葉は四国すべてに届けというように叫んだ。

「勇者たちよ!!私に続け!!」

勇者とバーテックスの戦争が始まった。

若葉と景夜が前線に立つ、それ以外の者は若葉や景夜を狙わなかった。バーテックスを処理する。

景夜は、自分の方に敵が来るようにワザと大きく立ち回る。

他の者ではなく、自分に敵が集中するように。

「せやあ——!!」

槍の一振りで一体、宙に浮いた穂先で一体を仕留める。

浮いた穂先を階段のように使い空を駆ける、一体一体はさほど強くないためか危なげなく戦闘を続ける。

紅葉に鍛えられた三年間、地獄のような辛さもあつたがそれ以上に

紅葉の槍に魅せられた。

あんな風な槍兵になりたい、何度もそう思い挫けそうな心を支えて来た。

若葉に負けて悔しくて、中々勝てない自分に嫌気が指すときもあった。

でも、守りたかった。化け物からも人間からも、彼女たちを襲う奴らから。

そのために訓練した、その結果景夜は秀才化け物になった。

師匠である紅葉程ではないが、景夜が若葉に負けることはもうないだろう。

彼は強くなった、三年前とは比較にならないほどに。

一重に愛のなせる業、彼の「ひたむきな愛」の成果だ。

槍を振るう、時に突き、時に石突で叩く。

その全てが星屑バーテックスに対して一撃だった。

だが、様子が変わり始める。

敵が残り五分の一を切った頃、バーテックスが何体か集まり始め。

『進化』し始めた。

三年前のバーテックス襲撃の際にも起きたもの。

難敵が現れた時、バーテックスは複数の個体が融合し、より強力な個体を生み出すというもの。

今回ののは巨大な棒状の一個体となった。

全員が少しの間硬直する、進化体は何をするか分からない。

「なんだ、あいつ……う？」

球子が首を傾げる。

冷静な杏は、自分の武器での様子見を考えた。

だが、それを景夜が止める。

「やめとけ杏、あれは多分お前のじゃダメだ」

「なら、どうすれば……」

誰もが悩んだその時、一人の勇者が飛び出した。

「勇者パ——ンチっ!!」

友奈が進化体バーテックスの反射板に叩きつける。

反射板、景夜が何故分かったのか？

簡単だ、答えは勘。それ以外のナニカではない。

紅葉の特訓のお陰か、景夜の感覚が天才のそれに近くなりつつある証拠だ。

「一回で効かないなら……十回、百回、千回だって叩き続ければいい！」

友奈の勇者装束が変化する、精霊『一目連』を降ろした状態だ。

『一目連』は、暴風を具現化した精霊だ。

一目連は竜巻の勢いと力を友奈の拳に与えた。

「千回いい……勇者パ——ンチ！」

竜巻は強力なものになると、鉄筋コンクリートの建造物さえ破壊するほどの猛威を十数分も吹き続け、その威力は核兵器に匹敵するといふ。

竜巻の勢いを得た友奈の拳が、絶え間なく板状組織に打ち込まれる。

その数が八〇〇発を超えたところで板状組織に亀裂が走り、九〇〇発で亀裂は全体に広がり、千発目で進化体は粉々に砕け散った。

他のバーテックス個体と対峙しながら、若葉は友奈の戦いを見ていた。

勇者の『奥の手』は、肉体に大きな負担がかかる。
ゆえに、できる限り使わないよう大社から言われていた。
もし使う必要がある時は、若葉や景夜は自分が使って敵を倒すつもりだったのだが。

「……友奈の奴……」

「サンキュー、友奈！アイツには俺の精霊相性悪かったから助かったわ」

若葉が物思いに沈む中、バーテックスが襲い掛かる。

反応が一瞬遅れ――

ギリ、ブチイ！

「甘いんだよ！」

「……不味いな、食べたものではない」

喰われたのは若葉ではなく、バーテックスの方だった。

若葉はバーテックスの動きを最小限で避け、同時に敵の体の一部を噛みちぎって見せたのだ。

景夜は、最速で若葉の下に駆け寄りバーテックスを槍の払いで一閃した。

バーテックスの肉を飲み下す。

それが、四国に侵入してきた最後のバーテックスだった。

バーテックスを噛みちぎった若葉の姿をみて、球子と杏は引きつった顔をする。

「タマ、これからは若葉をあんまり怒らせないようにするよ……」

「う、うん……それが良いと思う」

「若葉ちゃん！変な物食べちゃダメでしょう！景夜君も何で止めない

んですか！」

戦いが終わり、樹海化も解けて元の世界に戻る。

教室の一室で若葉と景夜はひなたに説教をされていた。

「だが……」

「俺は関係な——」

「だがじゃありませんし、関係なくもありません！」

ひなたに怒られる二人、景夜に至ってはとぼっちりも良い所だろう。

「奴らは昔、私の友達を喰らったんだ。だからその仕返しをだな……何事にも報いをというのが……」

「お腹壊したらどうするんですか！」

「う……むう……」

若葉はもう言い返せない。

「まあまあひなたちゃん、景夜と若葉ちゃんも反省したことだし。今夜は景夜の誕生日会よ、楽しくいきましよう！」

華恵の一言により何とか収集が着いた。

誕生会もそろそろお開きに差し掛かった頃、残っているのは勇者組とひなただけで華恵と紅葉は仕事の都合で先に抜けた。

球子が話し始めた。

「なあ若葉。みんなで話し合ったんだけどさ」

「なんだ？」

若葉が怪訝そうな顔をする。

「やっぱり、お前がリーダーやるのが一番いいと思う。今までは大社に言われたから若葉がリーダーってなってたけど、今回の戦いでハッキリ分かったよ」

「……どうしたんだ、急に？」

「いやさ、この前の戦いの時、お前と景夜が先頭になって戦ってくれたから、タマたちも戦うことができた。そうでなかったら、誰かが大怪我してたか……死んでたかもしれない」

戦いが終わってみれば、バーツテクスの三分の一は若葉で、もう三分の一を景夜が倒していた。

彼女や彼の奮闘がなければ、杏や千景は危険だったかもしれない。

「だが、景夜も先頭に立っていた。それにこいつはワザと敵の注意を自分に向けて戦っていた、景夜の方がいいのではないか……？」

若葉の言葉を聞いても、杏は身を乗り出すように言う。

「私も景夜さんより、若葉さんがリーダーをやるのが良いと思います！」

「うんうん。若葉ちゃんって、いかにもリーダーって雰囲気あるしね」
友奈がにこにこ笑顔を向けている。

「……反論はないわ。あなたの活躍は確かだったし……高嶋さんも柊君も、あなたが

リーダーに適格って言うから」

千景は若葉の方を見ることもなく、ボソボソとそう言った。

若葉は隣にいる景夜を見つめる。

「言っただろ、俺はお前らさえ守れば良いって奴だ。こんな俺よりお前の方が向いてるよ、若葉」

「……………」

若葉は全員の顔を見つめ――

「……………ありがとう」

今まで、自分がリーダーであつていいのか、確信が持てなかった。けれど――仲間たちの言葉を信じようと思う。

「良かったですね、若葉ちゃん」

ひなたは若葉に微笑ましげに見つめていた。

「ところで……………そうと決まれば若葉。一つ言いたかったことがあるんだけどよ」

球子の話はこうだ、「何で自分のことを名前で呼んでくれないんだ！」。

その後は、杏や千景からも名前呼びでいいと言われ、しかも千景に至っては敬語も外して欲しいと言われた。

そして、――

「分かった、今後はそうさせてもらう。千景、球子、杏」

（――これが、結束というものか。）

若葉は心が温かくなるのを感じていた。諏訪との連絡が途絶えたのは辛いけど、いつか訪れようと心に決めた。

「それじゃあ、みんなで記念撮影をしましょう！」

ひなたがそう言って、満面の笑顔でスマホを取り出す。

「今日は四国勇者の再出発記念日、そして景夜君の誕生日と若葉ちゃんのリーダー着任記念日ということだ。……ふふふ、私の若葉ちゃん秘蔵画像コレクションが増えます」

ひなたの不敵な発言に若葉が顔を顰める。

「ひなた！お前はまだまだそんな収集などしていたのか！いつか絶対消してやるからな！」

「俺のがないのは助かるな……」

「景夜君のもありますよ！」

「秘蔵画像コレクション？なんだそれ？」

「おもしろそう！ひなちゃん、私にも見せて！」

「球子、友奈！興味を持つな！」

「頼むからやめてくれ！」

「私も見たいです！」

「……柊君のは少し見たいかも……」

夜の教室でわいわいと騒ぐみんなの姿を、ひなたは写真に収めるのだった。

深夜一時頃、景夜が無心で槍を振るっていた。

演武のように見える足捌きと槍の振り方は、ほぼ完成形の域に達している。

誕生会が終わり、みんなも寝静まった頃。

彼は槍を振っていた。

あの時の若葉の言葉が忘れられなかった。

「諏訪は落ちたかもしれん……」

大社にイラついたが、それを言っても意味はない。

歌野が稼いでくれた時間で自分たちが強くなれたのに、それを否定してはいけない。

そんな景夜の下にひなたと紅葉が訪れる。

「こんな時間まで何してるの景夜くん」

「そうですよ、そろそろ寝ないと明日に響きます」

そんな声を見無視して槍を振る景夜、一種の極限状態に入ってるのか周りの邪魔なものを全てそぎ落としているように見えた。

「どんなに頑張っても、諏訪を救えなかったことは変わらないのよ」

その言葉を景夜は許せなかった。

「ふざけんな！歌野はまだ生きてる！藤森さんも！諏訪はまだ完璧には落ちてない！」

何の意味もない感情の叫び、たかが数度しか話したことは無いのに。

彼は歌野を信頼し尊敬していた。

「分かってるんだよ！無駄な事も！今から助けに行くなんて出来ないことも！でも——」

溢れ出した感情は止まらない。

「報われて欲しいんだ！あそこで頑張ってた歌野に藤森さんに！絶対

に助けに行くって約束したんだ！なのに——」
留まることを知らず溢れ続ける。

「何で俺は……そんな約束さえ守れないんだ！」
涙が出ているのに、動きは止まらない。この三年間でつけた実力の賜物。

「この槍術は！諏訪にいたみんなが生きた証だ！師匠から三年もかけて教えてもらったこの槍が、あの人たちが生きた証なんだ！」

頭ではもう助からないと分かっている、心が絶対に生きているし助けてみせると叫んでいた。

「だから、必ず約束を果たしてみせる！」
それは、彼の未来への誓いだった。

第七話 「帰省と愛の形と呼び名」

田園に囲まれた細い道を一台のバスが走って行く。

千景の座席の傍らには、専用武器である大鎌が布袋に収めて置いてあった。この大鎌は折り畳んで携帯できるようになっている。

彼女は特別休暇を利用して、地元である高知へ帰ってきていた。

そして、彼女の隣には長時間のバス移動&修行疲れで眠る景夜が居た。

窓の外に広がる風景を眺める。

季節はもう十月。

秋の風が田園の黄金色の稲穂を揺らし、遠くに見える山々も紅葉して色づき始めている。

千景は、景夜が自分の地元である高地に帰るのに付き添うと言った時のことを思い出す。

「千景先輩が地元に……?」

「…ええ、父に帰って来てほしいと頼まれて……」

景夜は千景の過去を知っている。

愛されたい母親、自己中心で家族のことを心配しない父親。

結局の所、父親の所為で母親は不倫。

千景は蔑まされるようになった。

両親は彼女を押し付け合った、母親は再スタートするのに子供が邪魔で、父親は自分の為に金を使いたいので子供が邪魔だった。

皮肉な話だ、最初は愛し合っていたのに。

千景は、愛が脆いことを知っている、その上で愛されたいし認められたいと思っている。

悲しい話だ、愛が脆いと知っているのに愛されたいと思う。

彼女は無価値な自分が嫌いだった、愛されず認められない自分が腹立たしい程に。

小さい村だったので、直ぐに不倫のことは広まり千景が何故か虐めの対象になった。

虐めの詳しい詳細は知らないが、相当のものだったと景夜は聞いていた。

華恵からは「精神的に難あり」と言われていた。

そんな千景を、一人で地元に戻すのは不味い。

そう思った景夜が、思い切って声を掛けた。

「俺も……着いて行っていいですか……？」

「……何もない所よ……それでもいいの……？」

「はいー」

千景の了承の下に、景夜は千景の実家に着いて行った。

それが、今までの経緯だ。

景夜の寝顔を見ている間に、時間は過ぎた。

最初はゲームをしながら待つつもりだったが、彼の寝顔は見ていて飽きなかった。

目的の停留所に着いたので、千景は少し残念そうに景夜を起こす。

「柊君、もう着いたわよ……」

「……はっ！スイマセン、疲れて寝てました」

バスを降りて数分も歩くと、一階建ての小さな借家に着く。ここが千景の実家だ。

玄関扉を開けて中に入ると、悪臭が鼻についた。

廊下は端にホコリが溜まり、空き缶や空き瓶が転がっている。隅に置かれたゴミ袋は、回収日に出されることを忘れられ、もう何週間も放置されたのだろう。

景夜は少し驚く、自分の家も裕福ではなかったがここまで酷いものではなかった。

「ただいま……」

「お、お邪魔します……」

返事は帰って来なかった。

仕方なくそのまま廊下に入り、空き缶を避けながら歩く。景夜もそれに習い、空き缶を避けながら歩く。

居間に入ると、布団に伏せている母の姿があった。

薬を飲んで眠っているようだ。

白髪交じりの髪、落ち窪んだ目、痩せてカサついた肌……まだ三代だとは思えない程に年老いて見える。

向かいの襖が開いて、父が部屋に入ってきた。

「千景、帰って来たのか！……そこにいるのは終君だね知っているよ！それにしても久しぶりだな、元気にしてたか？」

大げさに両腕を広げ、娘の帰省を喜ぶ。

明るい表情を作っているが、どこか疲労の色が見えた。

父は千景が持っている大鎌の布袋を見て、一瞬顔を強張らせた。だが、すぐにまた作ったような笑顔を貼り付ける。

「それが勇者の……大変だったろう？」

何に対しての『大変』なのか。

勇者として戦っていることに対してか、こんな物騒で重いものを携帯して帰省したことに對してか。

千景には分からなかった。

その後の会話を、景夜は見ることしかしなかった。

聞けば、千景の母は『天空恐怖症候群』らしい。

空から降ってきたバーテックスへの精神的なショックから起きた精神病の一種。

症状として空を見ることができないため、大半の人間が建物の中に籠りつきりになっている。

症状は四段階に別れており、ステージ4になると、発狂・自我崩壊に至る。千景の母親はステージ3。症状が軽ければ治療も可能である。

ステージ3になった患者は、ステージ4に至るまでそれほど時間は掛からないという。

景夜は千景の母に同情したが、それと同時に自業自得だとも思った。

病の進行のため、母は間もなく専門の病院へ入院することになる。その前に実家へ戻って顔を見せてほしいと、父は千夏にそう言った。

更に症状が進めば、長くせず母は千景が誰であるかさえ分からなくなるだろう。

そうなる前に少しの間でも母と一緒に過ごして欲しいと言う。

諦めを隠そうともしないその言い分も腹立たしかったが、千景は断る理由も思いつかず、帰省することにした。

「千景に柊君、ご飯は食べて来たか？お腹が空いているだろう、今から出前でも——」

「いいよ……食べたくない」

「俺も、御遠慮します。今日は日帰りの予定何で、ご飯はあつちで食べます」

父の言葉を遮り、千景は両親に背を向け、居間の出入り口に向かう。景夜も断りを入れて、千景に着いて行く。

「どこに行くんだ？」

「せっかく帰ってきたんだから……友達に会いって来る……」

「そうか……」

何か言いたげな雰囲気や背中越しに伝わって来たが、千景は無視して部屋を出た。

(やっぱり……帰ってくるんじゃないかな……)

歩く、歩く、歩く。

どれ位歩いただろう、学校の近くから少し体調が悪そうな千景を気遣いながら進む。

何故か、耳を抑える千景を不思議にそして悲しいものを見る目で景夜は見守っていた。

「なんで……」

眼の奥が熱くなる。

千景は思い出していた地獄の記憶思い出を。

何で思い出してしまうのか。

香川に居る時は思い出しもしなかったのに。

あの頃の記憶なんて、すべて頭から消え去ってしまえばいいのに。

(帰ろう……)

二人の心が重なる。

千景と景夜は学校に背を向けた。
もう、一秒でも故郷には居たくない。
すぐに香川に戻ろう。

(高嶋さんに……会いたい……)

直ぐ近くに頼れる仲間が居るのにそれ以上に、彼女に会いたかった。

精神が不安定になっている証拠。

香川に戻れば――

友達と話していれば――

きつとまた昔の記憶なんて忘れられる。

「あなた……郡さん？」

背後から女性の声がして、二人は振り返った。

そこに立っていたのは、かつて彼女の担任だった女性教師だ。

彼女は昔よりも老けてしまった顔で微笑んだ。

それからのことは、酷いものだった。

景夜の主観で見れば、それは悲劇の序章のように見えた。

過去に千景を虐めたものが、過去に千景を蔑んだものが。

揃って、千景を褒めたたえた。

生まれた時に祝福され後に疎まれ、そしてまた祝福された。

千景は布袋に入れたままの大鎌の柄で、地面を叩いた。

乾いた音があたりにやたらと響き、一瞬で彼女を取り囲む人々は静まり返る。

「……皆さんに……訊きたいことがあります」

その場にいる全員が彼女に注目する中、千景は小さな声で言った。
それは、悪魔の言葉にも等しいもの。

「私は……価値のある存在ですか……？」

人々はしばし怪訝そうな顔をし、やがて誰もが答えた。

またしても、悪魔の言葉を。

「もちろんよ。だってあなたは勇者様だもの」

同じような言葉が、すぐに他の人々から投げかけられた。

誰もが勇者である千景を称賛している。

千景は今まで、ずっと最底辺だった。

蔑まれ、疎まれ、傷つけられ、お前は無価値な人間だと、体と意識に刷り込まれるように生きてきた。

だが、今はどうだ？

かつて千景を傷つけていた人間が、彼女に媚びへつらっている。

以前は千景など路傍の石とすら思わなかっただろう大人が、彼女を両手に揉みあっている。

（私が……勇者だから……）

だから、彼は彼女を連れだした。

彼女の膝と首に手を回し、お姫様だつこの要領で逃げる。
いつの間に勇者に変身したのか、だがその顔は暗い。

千景の心が分かかってしまう、その位には彼女との距離が縮まったから。

「柊君！離して！」

「嫌です、離しません」

そんなやり取りを続ける中、二人は四国に帰っていった。

千景の地元に行った日から間もなく、バーテックスの二度目の侵攻が起きた。

侵攻だけで見ればそれは難なく終わった。

進化体は千景が『七人御先』を使うことで倒した。

進化体は無数に矢を放つ能力があり、千景の『七人御先』と相性がいい。

『七人御先』…その力を纏った千景は七つの場所に同時に存在し、七人の千景が同時に殺されなければ死なない。

一人撃墜されても二人撃墜されても、致命傷となった千景はすぐに消滅して新たな千景が出現し、『七』という人数は絶対に増減しない。一言で言えば、不死性のある精霊だ。

そして、戦闘中の千景の思いはこうだった。

(……私が一番多く殺して……一番勇者として活躍する……)

承認欲求の強い彼女ならではの思い。

(私は……勇者だからこそ価値がある……)

人々を守り、バーテックスを討つ勇者だからこそ、彼女は称賛され、愛される。

彼女は、そう考えた。

ならば、最も多くのバーテックスを倒して活躍した勇者となれば、更に価値を認められ、愛されるだろう。

間違いない、と彼女は確信していた。

(もつと頑張れば……もつとみんなが私を好きになってくれる……)
無価値な自分に戻りたくない。

そのためなら、どんなことだってやってやる。

こんな思いを持って、バーテックスと戦った。

ハッキリ言おう、歪んでいる。

彼女は壊れかけの鏡もいいところだ、石を一つぶつければ簡単に壊れるだろう。

だが、そうはならなかった。
彼女の心を壊したのは『七人御先』だった。

樹海化が終わり、みんなが変身を解く。
千景と景夜を除いて。

「友奈、お前は無茶のし過ぎだぞ」

「そうだぞ、友奈。検査入院だっけ？それで病院にいたんじゃないのかよ」

「そうですよ、友奈さん。不調があれば、今の内に教えて下さい」

「みんなこそ心配し過ぎだよ……、ぐんちゃんにカゲヤ君？」
変身を解かない二人に、友奈が声を掛ける。

その瞬間、友奈に向かって大鎌が降り下される。
それを間一髪で、景夜が受け止める。

「「「「なぜ、邪魔をするの柊君」」」」」

「邪魔するに決まっていますよ、今の千景先輩は何かオカシイですから」
声がオカシイ、七人の声が重なったように聞こえる。

頭の回転が速い景夜は、一番にその答えにたどり着いた。

「精霊憑き……か」

「「「「精霊憑き……どうでもいいわ……そんなこと」」」」」

「どうでもいい……ですか……」

「憎い…憎い…憎い！」

何故か友奈に向けられた、理不尽な感情。

「なぜ…あなたたちは愛されるの！なぜワタシは愛されないの！」

「何ででしょうね？…俺が聞きたいですよ」

なぜ、という疑問。

自分が愛されないのは何故なのか？

千景と共に彼女の地元に行った日、景夜が感じたものは間違えではなかった。

七つの体と七つの思考、それに意志が加わることで『七人御先』は動いている。

だが、今は違う。一つの体に七つの思考と一つの意志。

七つの思考が、過去に何故愛されなかったのかを考える。

だが、答えはでない。だから「なぜ」が出てくる。

「なぜ！あなたたちには価値があつて、ワタシにはないの！」

「千景先輩にも価値はありますよ、絶対」

「嘘よ！だったら…だったらなぜワタシは疎まれたの蔑まれたの！どうしてなのよ！」

体に傷が増えていく、何とか受け流しているが千景の気迫は凄まじいもので、景夜との実力差を憎悪の気持ちで埋めていた。

それが、無性に悲しかった。

だから、景夜は防ぐのを止めた。
彼女の大鎌の刃が景夜の脇腹を斬る、その場にいた全員が動揺する。

だが、景夜はお構いなしに『トロール』を使い瞬時に傷を直して千景を抱きしめる。

千景が本格的に動揺し始める。

(まだ……意識はこっち側にあるな……なら、いける！)

景夜が千景を抱きしめながら、話し始める。

「千景先輩、全部吐き出してください。嫌な事はゼーんぶ！綺麗サツパリ」

「な、何で……？……私はあなたのことを……」

「あれは精霊の所為ですよ、千景先輩がやったんじゃないやありません」

景夜は千景の反論をバツサリと切り捨てる。

「千景先輩は愛されたいんですよね、なら俺が愛します」

「ふえ?!……え、えつと……どういう……」

杏が鼻息を荒くして、他の者も相応に驚いている。

「間違えました、俺たちが愛します!」

「……………???

頭に疑問符が増える、こういうのは鈍感らしい。

「千景先輩、俺は丸亀城のみんなを家族だと思ってます」

「……ええ、知っているわ……」

「家族に色んな形があります……、それこそ千景先輩の家のように少し空気が重くなる、だから景夜は声を張り上げた。」

「俺の思う家族は！いつも笑顔で愛が溢れる家族です！」

「……そんなの……物語の中だけだわ……」

千景の諦めたような声が聞こえる。
けれど、景夜は諦めない。

「だったら作りましょう！俺たちで、俺たちみんなで！」

景夜は息を吸って、深呼吸をする。

そして、もう一度声を張り上げた。

「俺は千景先輩のこと好きですよ！それに、ここにいるみんなは苦手な人もいるかもしれませんが千景先輩のことが嫌いな人なんていません！」

景夜の思いで何かが解けたのか、景夜の胸に顔を埋めて泣きじゃくる。
「なんで」「どうして」、そんな言葉が彼女から漏れた。

時間にして十数分、ひとしきり泣きじゃくった千景は恥ずかしそうに景夜に顔を向ける。

「その、さっきのことは……」

「気にしないでください、家族でしょう？」

「……ええ、そうね……」

千景が立ち上がろうとすると、景夜が腕を差し伸べる。
その腕は二本。

「千景先輩、最後の質問です。どちらの手を取りますか？千景先輩から見て左の手を取ると、俺はあなたのことを勇者・郡千景として見て一緒に居ます。右の手を取ると、俺はあなたのことを家族として友達として見て一緒に居ます」

千景は少し考えて、笑顔で右の手を取った。
その瞬間、友奈が千景に抱き着く。

「ぐんちゃん！」

「た、高嶋さん！苦しいわ
みんなが笑顔になる。

後ろから頭を撫でられる。

「よくやったわね、景夜くん！」

「師匠、そうでしょうか？」

「ええ、あなたは良くやった！」
紅葉やひなたに加えて華恵まで来たせいで、案外大所帯となっていた。
友奈が華恵に病院を抜け出したことを叱られる中。

景夜の下に千景が寄って来る。

「あ、あのね柊君。その……景夜君って呼んでもいいかしら……？」

「いいですよ！それなら、俺も……チカなんてどうですか？」

「あだ名……ええ！それをお願い。後、敬語も……」

「分かりませ、じゃなくて。分かったよ、チカ」

二人の間の壁は無くなった、多分他の仲間ともすぐに打ち解けるだろう。

千景は少し、レベルアップ出来たような気がしていた。

第八話 「温泉と盗みと怒りの言葉」

二〇一九年一月初旬。

景夜たちは高松市の温泉に来ていた。

高松市は香川一の都会であると同時に、四国有数の温泉地でもある。内陸部の山地には江戸時代から湯治場として利用されてきた塩江温泉郷があり、瀬戸内海沿岸や市街地にも天然温泉が湧く。

バーテックスとの戦いも幾度目かを終えた頃、巫女の神託により、襲撃がしばらく起こらないことが告げられた。そのため景夜たち勇者は休養として、貸し切りの温泉旅館で過ごすことが許可されたのだ。

「にしても、いい湯だな」

普段よりも数倍緩んだ顔の景夜が、湯船で寛いでいた。

木の板の向こうからは、女子特有のピンク色の会話が響いてくる。

だが、今の緩み切った景夜に届くことはない。

「月が綺麗だな……」

ここには、勇者の六人に加えて巫女のひなたと引率役の華恵に紅葉が来ている。

今頃、あちらは更に賑やかになっている事だろう。

普段とは別人のような緩んだ顔で若葉が湯に浸かっていると、露天風呂の戸が勢いよく開けられた。

球子を先頭に、友奈、杏、千景が姿を現す。

「あ、やっぱり先に入ってやがったなっ！ タマが一番風呂になろうと思っただのにつ！」

指差してくる球子に、若葉は湯に浸かったまま答える。

「球子があ、『旅館探検だー』などと言ってえ、館内をうろつき回っていたのがあ、悪いんだらう?」

「うわ、溶けかけの飴みたいに緩い顔しやがって。よし、一番風呂は逃したが、三番目はタマのものだーっ!」

「タマっち先輩、走っちゃダメだよ!」

止めようとする杏の声も聞かず、球子が飛び込むようにして温泉に入る。

「はあ〜……」

杏はため息をついた。

その後、友奈、千景、杏も、球子に続いて温泉に浸かる。

学校のいつもの七人と α で、温泉旅館に泊まる——人数は少ないが、ちよつとした修学旅行気分だ。

球子はひなたの前に行き、手をワキワキさせながら言う。

「よくし、じゃあ定番の身体チェックと行こうか。さあさあタマに見せてみタマえ、春の身体測定以降、持たざる者を置き去りにして、お前の体がどれだけ遥かな高みへと成長しているのかっ!」

「あ、あの、球子さん、何を……?」

身の危険を感じ、後退るひなた。

若葉と杏が、ひなたを守るように球子の前に立ちふさがった。

「球子、お前の行動は読んでいる! ひなたには触れさせん!」

「タマっち先輩、温泉は人の体を調べる場所じゃないんだよ!」
むっ、と怯む球子。

だが次の瞬間、彼女の目はむしろ杏の身体に焦点を合わせた。

「あんず……よく見たら、お前も成長してないか？」

「え？」

「許せーんっ！」

球子は杏に飛びかかり、体中をくまなく触って調べ始める。

騒いでいる球子たちを、友奈は困ったような苦笑するような顔で見ている。そして、ふと思いついたようにその場にいる全員へ尋ねた。

「そういえばみんな、お医者さんの検査で、おかしなところとかはなかった？」

「おかしなところ……？」

千景が怪訝そうな顔をする。

友奈の質問に全員が答えようとする中、露天風呂の戸が静かに開かれた。

「そうね、皆には何か違和感があったら言って欲しいわ」

「そうそう、子供は健康第一だからね」

凜とした優しい声と肩の力が抜けそうなほど間延びした声が、露天風呂に木霊する。

「紅葉姉さんに華恵先生まで……」

「……クソウ！タマも成長すればあんな風になれるのか！」

「……凄いわ……」

「……凄いですね……」

「……凄いな……」

「……凄いです……」

勇者五人と巫女一人、三者三様の声が聞こえる。

二人は手短かに体や髪を洗い、すぐに湯船に浸かる。

「で！皆は特に変わったことはある？」

華恵は友奈の言葉を借りつつ、全員に尋ねる。

勇者たちは医療機関で、定期的に身体状態を調べられている。

特にバーテックスの襲来が始まって以降、戦いの度に綿密な検査が行われていた。

勇者の力を使うことが人体にどんな影響を及ぼすのか、まだ不明瞭な部分が多すぎるためだ。

それに、勇者の中にはイレギュラーがいる。

勿論、景夜である。

彼だけが、土地神の集合体である神樹からではなく、天の神の父・伊邪那岐神から力を借りている。

今後、彼の体にどういうことが起きるのか？

誰も、予想がつかない。

若葉たちからは特に何か違和感があるという発言はなかった。

油断は出来ない、もしこの子たちに何かあったら。

きつと自分は冷静でいられないだろう、と華恵は感じ始めていた。

「華恵先生！ちよつと触ってみてもいいですか？」

深く考え混んでいた華恵に球子が声を掛ける。

「?ええ、いいわよ」

華恵は特に何も考えず返事をしてしまった。

「それじゃあ!お言葉に甘えて!おお!ぶつタマげた、何でこんなに大きいのにフワフワして柔らかいんだ!」

「ひゃっ!ちよ、ちよつと!た、球子ちゃん、い、いきなりなにを!」

「だって、先生が触ってイイって言ったんですよ?」

先程まで、真面目な雰囲気か漂っていた露天風呂は、ピンクな雰囲気か充滿していた。

景夜は一人部屋でみんなが来るのを待っていた。

「暇だ……汗かかない程度に槍でも振るか?」

いかにも修行厨な景夜らしい発言だが、その提案を紅葉が却下した。

「それは、ダメ!そろそろみんなが来るから、それにご飯も」

「えーつと、やっぱり。俺はこの部屋で寝る感じですか?」

「そりやそうよ!みんなの団結力を高めるものでもあるし、絆を深めなさい!」

景夜からしたら、みんなとの友情レベルや信頼レベルはカンストしてると思うのだが。

そこは景夜、諦めは早い。

こういう時の紅葉にどんな理屈をぶつけても、よく分からん超理論か飛んでくる気がしたのだ。

紅葉と話す事数分、みんなが戻って来た。

「すまないな景夜、待たせた」

「すいません、待たせてしまいましたよね？」

「別に、師匠と今後の修行について話してたし。全然待つてないよ
最初の一言が無ければ、最高なのだが。」

そこは景夜、余計な一言を挟んでみんなを出迎える。
みんなが来ると、ほぼ同時に料理が運ばれてきた。

「……何だか、豪華過ぎないか？」

景夜の言う通りだ、テーブルには一人につき一匹の大きな蟹と刺身の山が築かれていた。

「……そうかしら？ 私たちは一様は勇者だもの、世界を救ってるに等しいことをしてるんだし、当然じゃないかしら？」

一様、と付けてる辺り。そこら辺の問題は解決していると言っている。
い。

そんなことを言う千景を嬉しそうに見ながら、景夜は食事に手を付けた。

晩御飯を食べた後は、ゲームで盛り上がった。

将棋にTVゲームにトランプに人狼ゲーム。

色々なゲームをやり、今はトランプの頂上決戦。

『スピード』で勝負をしている。

ちなみに景夜を除いた四人は全く勝負にならず、球子や杏は自信喪失して体育座りになっていた。

『スピード』は、札を出す速さを競うゲームだ。

無数のアクションゲームやシューティングゲームをやり込んできた、卓越した動体視力と状況判断力を持つ千景。

対して、武術によって鍛え上げられた凄まじい反射神経と集中力を持つ若葉。

三回勝負で、現在どちらも一勝一敗。

若葉と千景が対峙する。

「……負けない、絶対……あなたには……」

千景は小さく呟く。

それはただ相手への繊維の表れに過ぎないはずだが、若葉には何かそれ以上の——意味があるように思えた。

だが、今までのゲームで若葉は千景の動きを把握している。

恐らく、次の勝負は勝つ。

二人の手が動き、目にも留まらぬ速さで次々に札を出していく。わずかに若葉の札の方が速く減っている。

この勝負、若葉の勝利——

「うひゃあああ!?!」

突然奇声をあげ、若葉は持っていた手札をバラ撒いた。

ひなたが若葉の耳を後ろから甘噛みしていた。

「な、何をする、ひなたあ?!」

若葉がひなたに抗議している間に、千景は札を出し終わってしまった。

「勝者、ぐんちゃん!」

「勝者、チカ!」

友奈と景夜が千景の手を上げる。

ひなたは若葉を叱るように、

「ダメですよ、若葉ちゃん。ゲームなんだから、そんな怖い顔しないで、もっと楽しんでやらないと」

「だ、だからと言って……く、くすぐったいだろう……!」

そこからは、若葉の弱点である耳を弄ったり。

勇者ゲームという名の枕投げをして暇を潰した。

夜中三時頃だろうか。

布団がめくれる音で目が覚めた若葉は、自分の隣で寝ていたひなたと景夜がいけないことに気付いた。

目が起きたついでに探そうと思い、若葉も布団の誘惑を断ち切って部屋の襖を開けた。

ひなたと景夜の後姿を見つけて、急いで追い掛ける。

景夜は天逆鉾を持っていたので、何か鍛錬でもするのだろうと思っていた。

二人は月明かりが照らす中、静かに話していた。

「不和による危機……か」

「はい、そういう神託が授かりました」

若葉の所からでは上手く聞こえないので、近付こうとしたが何故か足が止まった。

理由は、分からなかった。

「ヤバそうなのは若葉か、あいつはまだ死んだ奴らの復讐の為に戦っている。それじゃダメだつて言ったのにな……」

「……景夜君は、やっぱりそう思いますか？」

「まあな、あいつが戦う理由は過去にある。本当は未来の為に戦っていくのが正解だと思う。何せ、あいつは誰かを見捨てるなんて出来ないやつだからな、だから若葉には未来を生きる人の為に戦ってほしい」

それ以降の言葉は、聞こえなかった。

だが、あの二人が自分のことを話しているのは何となく分かった。時刻は夜中の三時頃、幻想の月が何故か赤黒く輝いていた。

「多すぎるだろ……」

スマホに表示されるマップを見ながら、景夜が険しい表情を浮かべる。

バーテックスの襲撃が起こったのは、勇者たちが丸亀城に帰ってから半月ほど経った頃だった。

今回はマップに表示されるバーテックスが異常なほど多い。

「今までの十倍……？ううん、もっというかも」

友奈も敵を示す印で埋め尽くされたマップを見ながらもつぶやいた。

その声には緊張の聲が混じっている。

過去のバーテックスの襲来では、四国に侵入してきたのはせいぜい百体程だった。

だが、今回の数は目算しただけでも千以上。

戦闘に慣れていききた今の勇者たちにとって、バーテックスの一体一体を倒すことは難しいことではない。

しかし、これほどの数になれば、状況は変わってくる。

数で押し切られれば、危うい――

(いや、ここは落ち着いて連携を取って行こう。幸いなことに杏は目が良い、その少し臆病な性格は戦闘では役に立つ！)

景夜は瀬戸内海の海の向こうから押し寄せてくる敵群を見据え、槍の柄を握る。

「連携して――」

「私が先頭に立つ」

景夜が言葉を言い終わる前に、若葉が飛び出した。そこからが地獄の始まりだった。

先行した若葉の周りにバーツテクスが集まっている、先に若葉を潰す作戦らしい。

落ち着こうとした思考が、若葉がバーツテクスに噛みつかれたのを見て彼方に消え去った。

急ぎで、他の勇者に指示を出す。

「若葉は俺がどうにかする、みんなはここを死守してくれ！司令塔は杏だ、お前の目があれば戦況の変化にも気付ける！」

「ですが！景屋さん、無茶ですよ！幾ら景夜さんが強いと言っても、あの数は……」

流星にあの数は辛い、だから『トロール』を使う。

トロールを宿して少し肌が緑がかった色になった景夜、僅かに筋肉も付いている。

勇者装束もそれに合わせて変化し、花の模様と装束の色が変わる。装束の色は、白色に橙色に紅色に桃色に青色、それとピンク。

花の模様は花便が六つになり、紫羅欄花・姫百合・彼岸花・山桜・桔梗・グラジオラスの六つの花が咲く。

トロールの変身能力故の形なのだろう、景夜はそのまま若葉の下に跳んだ。

邪魔になる奴は斬り捨てて、一刻も早く若葉の下に向かう。
その行動が招いた結果は――

「っ！！！！あうああああ！！！！」

右腕に噛みつかれて咄嗟に槍を持ち替えて、敵を斬る。
噛みつかれた所為で、右腕が取れた。
尋常ではないものだ、噛んだだけで右腕が千切れた。

意識が飛びそうになる、痛みが全身を巡る。
脳に灼けるような激痛が走る、その為に行動が鈍りまた噛みつかれる。
今度は左足だ、噛んで骨さえ砕く歯のようなナニカで音を立てながら近寄って来る。

もう痛みを感じる余裕がない、だから景夜は禁忌に手を出した。

「その性質、盗ませてもらおうぞー！」
進化体になるためには、何体かのバーテックスが溶け合って作られる。

バーテックスは言わば細胞だ、一つでは完成せず複数が揃いやつと完成する。

それに加えて、たった数体が揃っただけで反射板のようなものを作るなどありえない。

きっとだが、数体が合わさることで作用が起き中で増殖 or 増大させてるのでは？

そう考えたからこそその一手。

そしてこの、禁忌とも言える一手は成功した。

自分の細胞が少し有れば、増殖して作れる。
失ったなら作ればいいのだ、一から。

右腕と左足から出でいた血を使い、腕と足を生やす。

体中に電撃のような痛みが走ると共に、腕と足が再生した。

たった数分間の出来事なのに、その数分が一時間にも二時間にも感じた。

「退けよ！あいつは、若葉は、お前らが喰っていいような奴じゃねえんだよ!!」

また、跳ぶ。

腹に噛みつかれ、臓器を食われても。

体当たりで、体を潰されても。

不死鳥のように何度落とされても、彼は諦めず走り続けた。

少年は代償に気付かない。

若葉は混戦の中、復讐心に身を焦がして憎悪のままに戦っていた。

だから、気付かない――

自分の背後に迫る、敵に。

「しまっ――」

「俺の仲間になんか近寄んじやねえ!!」

空から、勇者が降って来た。

景夜の勇者装束は血だらけで、所々穴が開いている。

「景夜、お前……」

「両腕合計四本、両足合計七本、臓器合計は不明。これが俺の負傷した

場所だ」

「な、一体何が！」

「これを帰ったら伝えろ、俺はそこまで持たない。……死ぬなよ」

「っ！分かった、お前こそ死ぬなよ！」

疲労と苦痛を押し殺し、若葉は刀を構えた。

満身創痍の勇者二人は、周囲のバーテックスへ武器を振るう――

かつてないほど大規模なバーテックスの攻勢だった。

その戦いは、止まった時の中で行われたが、勇者たちの体感時間にして六時間以上に及んだ。

長い戦いの末、勇者たちはかろうじて、バーテックスの撃退に成功する。

しかし、勇者たち全員の負傷と疲労はひどく――

特に景夜は、戦いが終わった後、すぐに大社管理下の病院へ搬送されることとなった。

樹海化が解け、景夜が丸亀城から病院へ運ばれた後。

若葉の頬に千景の平手打ちが入った。

友奈が止めようとするが、それでも千景は止まらない。

「乃木さん……どうしてあなた、あんな勝手なことを、したの……」

頬の熱を感じながら、若葉は千景の責めを無言で受ける。

「あなたが一人だけで勝手に戦おうとするから……景夜君が……」

球子と杏は、何も言わず若葉たちを見守っていた。

止めるべきかどうか迷っている――

そして実際に止めることができないのは、彼女たちも千景の

言っていることに心のどこかで共感しているからだ。

友奈は心のどこかで共感していても、それで責めることをしない。何故なら彼女は、「自分がこうしていれば」と言う自責の部分があるからだ。

もし今、千景が怒鳴っていないかつたら、球子が代わりに怒鳴ったかもしれない。

「自分勝手に特攻して……景夜君を巻き込んで……！せめて神樹の精霊の力を使って戦えば、影夜君の負担は減ったのに……あなたはそれもしなかった……！」

千景の言葉は事実で、だから若葉は何も言い返さない。

「彼は！あなたのために精霊まで使って……手や足を噛み千切られても助けに行つたのに……！」

(全て……私の判断ミスと思いがりだ……)

自分一人で戦っているかのような吐出と、怒りに任せた暴挙とも言える行動。

それが景夜を危険に巻き込む結果になってしまった。

精霊の力を使わなかったのは、あの戦い方は消耗が激しく、長期戦に向かないからだ。

しかしその判断も、やはり『敵を一体でも多く倒す』ことしか考えていなかった。

精霊の力を使っていれば、景夜の負担を減らす戦い方もあったかもしれない。

「あなたは……周りが何も見えていない……！自分が、勇者のリーダーだったこと……もっと自覚すべきよ……!!」

勇者の先頭に立つ人間として相応しいのか――

かつて自分に向けた問いが、再び若葉の心に浮かぶ。

冬の空は冷たく重く、勇者たちの頭上を覆っていた。

大規模襲撃の翌日深夜にて。
特別治療室前にて。

「はあく、やっぱりこうなったか……」

「……………」

死んだように眠る景夜を見ながら、紅葉がため息交じりに呟いた。
「やっぱりって？もしかして、分かってたの？」

「まあ、何となくですけどね。」
華恵もまた、ため息を吐いていた。

顔色は悪く、恐らく昨日から寝てないだろう。
だが、それ以上に恐れていることがあった。

「若葉ちゃんから聞いた話が本当なら、あの子は四肢を合計して一〇本以上喰われているのよ。それ以外も臓器もやられたと言っていたわ」

ありえない、と呟く。

何故なら――

「ならどうして、この子はこんなにも健康体なの？」
景夜は特別治療室に居た。

だが、それは治療の為ではなく検査のためだ。
四肢を一〇本以上失って、それを再生させる。
そんなのが、デメリット無しで出来る筈がない。

だからこそ、この特別治療室には医者以外にも大社職員が何人も出

入りしていた。

「ねえ、紅葉ちゃんはまだ無理なの？」

「無理ですかね、私のは景夜くんと同じで結構特殊な部類なんで……。スイマセン」

紅葉がらしくない感じで謝るものなので、華恵も少し冷静なる。

「いいのよ、元々子供たちに世界を任せるなんて屑の所業に近いもの」
この日。

冬の空は冷たく重く、大人たちの頭上も覆っていた。

第九話 「夢の世界と現実とメイドさん」

少年は夢を見る、あつたかもしれない普通の日常の形。

「か…や……かげ……景夜？」

「と、父さん！」

意識が鮮明になると同時に、ここが旧家だと分かった。

そして、何故か死んだはずである父。

シエルが景夜のことを心配そうに見つめていた。

少しの間呆然とする、久しぶりに感じる畳の匂いと見慣れた家具の数々。

和風の家なのに、ダイニングや洋室があつたりと少し不思議な家だ。

景夜も今なら分かる。

あれは父の為に合わせて作られたということが。

自分の今の状況を整理しようとする。

（若葉を助けるためにトロール使つて突っ込んで……バーテックスに右腕を噛まれて……）

そこで違和感に気付く。

（バーテックス？……バーテックスって何だっけ？）

記憶障害なのか何なのか、景夜は分からずにいた。

だが、もっと重要なのは景夜の父、シエルはとうの昔死んでいる。

そのことに気付かない時点でオカシイのだ。

「景夜？…どうしたんだい？早く食べないと、若葉ちゃんやひなたちゃんを待たせてしまうよ？」

「そうだったーっ、ごめん父さん、パンだけ貰ってく！」

景夜は、急いで椅子に掛けていたブレザーを羽織り、パンとバツクを持って外に出る。

外には、少しご機嫌斜めな若葉とそれを見て面白そうに微笑んでいるひなたが居た。

「遅いぞ、景夜。早くしないと遅刻してしまうではないか」

「悪い悪い、朝ごはん食べてる間に何かポーつとしちやつて」

若葉とひなたが驚いた顔を見せる。

「景夜君が食事中にポーつとするなんて……」

「何かあったのか？悩み事があるなら聞くぞ？」

「何もねえよ！て言うか俺は二人の中ではそんなに食いしん坊キャラだったのかよ！」

三人でとりとめのない会話をしながら学校への道を歩く。

景夜は気付かない、二人の制服も自分の制服も丸亀城で着ていた物ではないことを。

若葉は寝れずにいた、昨日治療室の前で千景に言われた言葉がまだ耳に残っている。

「あなたはいつも、バーテックスへの復讐のためだけに戦っている……！だから……怒りで我を忘れてしまう……！自分が周りの人間を危険に晒しても、気付きもしない!!」

この言葉に、若葉は何も返すことが出来なかった。

(復讐の為だけに戦っている……か。)

けれど分からなかった、復讐それを否定されたら自分はどうかやって戦っ

ていけばいいのか。

だから、今日はひなたの部屋を訪れた。
不安を握りしめるように、枕を抱えて。

部屋のドアを開けると、ひなたが忙しなくバックに服やノートなどを詰め込んでいた。

「何をやっているんだ、ひなた？」

「ああ、若葉ちゃん、いらっしやい。今、ちよつと荷物を纏めているんです」

「……？なんでそんなことをしている？」

ひなたは荷物を詰め終わったバックのファスナーを閉めながら答える。

「明日、この寮を出ます」

「え!?!な、何があつたんだ!?!」

若葉は動揺して枕を握りしめる。

何故ひなたが寮を出て行くのか？

まさか『勇者付き添い巫女』という立場が変わってしまったのか？

いや、そもそも巫女の本来の役割は勇者の付き添いではないのだから、今までずっとひなたがこの学校にいたのがおかしかったのではないかい？

だとしたら、ひなたは本来の巫女のお役目に戻るだけであり――

グルグルと若葉の思考が回っていると、ひなたは安心させるようにクスリと笑う。

「若葉ちゃん動揺し過ぎです。別にずっとこの寮からいなくなるわけじゃないですよ。ほんの少しの間だけです。大社の本部に呼び出されてしまった」

若葉はホッとしてため息をついた。

「そ、そうか……。しかし、いったい何故突然？」

大社からの呼び出しなど、滅多にあるものではない。若葉たちの学校に大社の職員が入りしているのだから、大抵の用事は彼らを通じてやり取りすればいいからだ。

ひなたの表情が少し曇る。

「理由は聞かせてもらえませんでした。ですが、年が明けてから色々ありましたからね……。前回のバーテックスの襲撃は今までは比喩物にならないほど大規模でしたし、重傷者も出てしまいましたから……」

バーテックスの四国への侵攻が始まってから数カ月——今、何かが大きく動こうとしているのかもしれない。

バーテックス側も人間側も……

「ところで、若葉ちゃんは何か用事でもあったんですか？こんな夜中に」

「あ、う、そうだな……」

若葉は言い出しづらそうに口ごもる。

幼馴染のその姿を見て、ひなたはベットに膝を掛け、ポンポンと自分の膝を叩いた。

若葉はひなたに膝枕をしてもらいながら、ぽつぽつと話し始める。
千景に言われたこと。

自分がこれからどう戦えばいいのか分からなくなったこと。今までの自分が間違っていたのかという迷い——話している内に、若葉の目に涙が浮かんだ。

そして、景夜のこと。

幼い頃から、若葉が他人に涙を見せることは全くなかった。

しかしひなたに対してはだけは別だ。

彼女の前でだけは、若葉は身も心も無防備になる。

「私はどうすればいいんだろうか……？」

「……………」

ひなたは若葉の問いに、答えることが出来ずにいた。

若葉はいつだって、迷った時はひなたに頼ってきた。

ひなたはいつもそれに応えてきた。

世界を守る勇者という重責を背負う若葉に対し——そして幼い時からずっと一緒に過ごしてきた一番の親友に対し、できる限りのことはしてあげたいと思う。

自分にだけは素直に頼ってきてくれる若葉を、愛おしく思う。

(景夜君も若葉ちゃんも……本当に似ていますね)

二人は似ているようで違う、景夜は大切な人たちさえ守れば良いと言う。

それに対して若葉は、全ての人を守りたいと言う。

でも知っている、本当は景夜も見ず知らずの人が死んでもきつと悲しんで後悔するということを。

けれど、景夜は立ち直るのだ、もう大切なものを失いたくないから。だからこそ、今ここで若葉に答えを教えることが、本当に正しいのだろうか？

若葉が抱える問題点と、その解決方法を、ひなたが言葉で教えてあ

げることはいできる。

そして飲み込みの早い若葉は、すぐに状況を改善できるだろう。

——その方法は本当に正しいのだろうか？

表面的に問題をなくすことはできたとしても、若葉の内面はきつと変わらない。

ひなたと景夜以外の誰も気づいていない、若葉の精神的な脆さは消えないままだ。

それはいずれ、若葉の命を危険に晒すことになるかもしれない。

「……………」

若葉はひなたの言葉を待つ。

だが、ひなたは若葉に、答えを与えることはなかった。

「今、若葉ちゃんが抱える問題は、自分で答えを探して、自分で乗り越えるしかありません」

「え……………」

若葉は耳を疑った。

ひなたの言葉は——口調こそ優しくかったが、若葉を突き放すものだ。

ひなたはハンカチで幼馴染の涙を拭う。

「ほら、もう泣かないで下さい。泣き顔、撮っちゃいますよ」
スマホを取り出して、若葉に向ける。

「…………勝手に撮ればいいだろう」
不貞腐れたように言う若葉。

ひなたはスマホのカメラのシャッターボタンを押した。

「本当に撮った……」

若葉はひなたにジト目を向ける。

「明日から、少しの間ですが、若葉ちゃんに会えませんからね。若葉ちゃん分の補充が必要なんです」

ひなたはスマホに写った若葉の写真を見る。

この泣き顔が、大社から戻って来た時には、前向きな顔になっていきますように——そう願う。

「若葉ちゃんならきつと、今抱えている問題は自分で乗り越えることができます……私は、そう信じています」

景夜は今、剣道場で若葉と対峙していた。

「今日は勝たせてもらおうぞ！景夜！」

「望む所だ！」

若葉の木刀と景夜の竹槍が舞う。

二人の実力は同等、リーチが長い分景夜の方が若干有利ではあるが、若葉自慢のスピード重視の攻めは中々に強い。

一回一回の攻撃が軽い訳ではないのに、スピードは凄まじい。

景夜もそれを受け流している時点で、相当の腕前だということが伺える。

「柳橋さん、今回の勝負はどうですか？」

「うーん、今回はいい勝負だね。多分引き分けだと思うよ」

「そうですか」

傍から見たら超人同士の戦いにしか見えない、何せ木刀と竹槍がぶつかる度に重たい音が剣道場に響いているからだ。

「はあく、あいつらも良く飽きないな。俺だったら毎日同じ相手とやるのは飽きちゃうよ」

「ライバルみたいなものですから……それに、柳橋さんだってあの二人に渡り合える柔道部唯一の人じゃないですか!」

柳橋と言う少年もあの二人の戦いに付いて行けるのだ、何とも末恐ろしい。

そして、柳橋の言った通り時間内に試合が終わることなく。引き分けと言う形になった。

その後の帰り道。

「二人とも今日空いてる?」

「どうしたんだいきなり?」

「何かあるんですか?」

景夜が「実は……」と語り出した。

何と、今日は家に誰も居ないらしく、暇だから遊びに来てくれないか?

という、お誘いだった。

若葉とひなたは少し間を空けて答える。

「別に構わないぞ」

「私も大丈夫ですよ」

二人の言葉に少し安心する景夜、三人で並んで帰るこの道は少し懐かしい。

「でも、珍しいな。景夜から私たちを誘うなんて」

「そうですね、もしかして一人が寂しいんですか？」

「べ、別に違えよ！ただ何となく……」

「何となく……何だ？」

少し言い淀む景夜、意を決して口に出す。

「偶には、こういうのもいいかなって……そう思っただけだよ」

少し照れくさそうに言う景夜を見て、二人はクスリと笑った。

これは夢だ、あつたかもしれない世界の夢。

「景夜……後は、お前だけなんだ」

ひなたが丸亀城を出た後、杏たちに導かれて答えを得た若葉。

ひなたも帰って来て、ひなたより次は前回の戦いよりも苛烈になると全員が聞かされた。

若葉は球子と骨付き鳥を食べに行ったり、杏と作戦会議をしたり、千景とゲームで協力プレイをしたり、友奈に耳かきをされたりと仲間と向き合ったりリーダーとして。

（景夜、早く目覚めてくれ。）

前回の戦いから約二週間弱、景夜が起きる気配は一向になかった。

若葉の心は重いし、それに――

(景夜、お前が居ないとどこか違うんだ。この日常が少し味気なく感じる……)

心にポツカリ穴が開いた、こんな表現を自分自身が体験することになるなんて若葉は思ってもみなかった。

胸が苦しい、景夜アイツにどれだけの痛みを背負わしてしまったのか。それを思うだけで、若葉の心は張り裂けそうだった。

華恵にも直接謝罪に行った、自分の所為なんだと訴えた。

だが――

「若葉ちゃん、あなたがそんなことを言っってはダメよ。だってあの子はあなたの為に頑張ったんだから。最初に会ったら言う言葉は――」

(「ありがとうと言ってあげなさい」、こんなことを言われたら。私は謝ることが出来ないじゃないか……)

でも、若葉は華恵の言葉に納得していた。

「きつと、景夜だったらそう言うだろうな」と。

「だから……帰って来てくれ。……景夜!」

少女の叫びが、特別治療室前の空間に響いていた。

何日経ったかも分からない夢の世界で、大切な人の声が聞こえた。

その瞬間、授業中にも関わらず学校を飛び出した。

そして、ポケットに入っていたスマホを取り出し勇者に変身する。

(思い出した、全部思い出した!……今回こんなことをした犯人はきつと……)

ある場所に向かっていた、勇者の力があれば数分もかからずに着く。

着いた場所は、霊園だった。

奥へ奥へと、進んで行く。

そして、ようやく見つける。

この世界にしかない、イレギュラー。

「父さん……」

「やっぱり、来てしまったか……」

シエルは自分の墓の前に佇んでいた、まるで誰かを待っているように。

「全部父さんがやったの？……それともトロール？」

「半分正解で半分不正解……かな。実際はどっちもって言うのが正解だ」

そうしたら疑問が出てくる、だから景夜は素直に疑問をぶつけた。

「父さんがこういうことをしてくれるのは、何となく分かる。でも、何でトロールまで手伝ったんだ？」

「それはね、父さんがトロールだからさ」

シエルの言葉に景夜の思考が停止した。

「あ、済まない済まない！私がトロールになった、この方が正しいな」

「え、ちょっと待ってそっちの方が意味分からないんだけど！」

シエルによると、自分の家系が元々ある北歐神話の神の血を引いていて神性が強かったことが原因らしい。

死後に神樹が生まれ、神樹によってに神樹中に入れられて精霊と言う器を貰ったとのこと。

この話を聞いて落ち着いていられるのは、色々摩訶不思議な体験を

した景夜だからだろう。

「どうしても、行くのかい？ここは平和で安全だ、ここに居れば普通に暮らせる。僕も君と暮らすことが出来る、君を父親として愛したい」
死した者の願い、生きたかった者の願い。

だが、人は時にその願いを見捨てなければならない。

「ゴメン、父さん。それは出来ないよ、だってあっちには置いてきてしまった人たちが大勢いるから」

「そっか……華さんは元気かい？」

「華さん？……ああ、母さんのことか。元気だよ、凄く元気に暮らしてる。よっぼど一途だったのか父さん以外の人と結婚しないって言うぐらい」

堀の深い顔に、碧眼。そして綺麗な銀髪、それを見て景夜は「やっぱり、父さんなんだな」と思った。

碧眼から涙が流れているのが分かる、だが景夜は言った。

「父さん、もうお別れだよ」

「ああ、そうだね。華さんのことを頼んだよ景夜」

名残惜しそうにするシエル、だが伝えるべきことは伝える。

「それと、愛してるよ！僕たち親子の絆は永遠だ、髪の毛だけが繋がりにゃない！心で繋がっている！憶えててくれ、僕は君や華さんの心の中に生きている！君の中から成長を見守っているよ……」

それが、最後の言葉になりシエルはピンク色の光の粒子になって消えていく。

「俺も母さんも、父さんのことを愛してるよ。心の底から……」
夢は覚める、意識が現実に戻還する。

景夜が目を覚ますと、そこは薄暗い病室だった。

まだ、少し胸が温かい。

景夜は急いで自分に付いている医療器具を取り外す。

耳障りなベルの音が鳴っているが、今は無視して突き進む。

特別治療室を出て、廊下を歩く。

特別治療室前で泣いている、若葉を発見した。

「か、景夜！本当に景夜なのか!?!」

「他の誰に見える？正真正銘、柊さん家の景夜だよ」

言い終えた途端に、若葉が抱き着いて来た。

「良かった、本当に良かった。もう一生目覚めないんじゃないかと……」

「俺はそんなに軟弱な体してねえよ、それよりも言うことがあるだろう？」

若葉は何とか涙を拭く、そして正面を向き笑顔で感謝を告げた。

「私を助けてくれてありがとう……もし、私に何かして欲しいことがあったら言ってくれ。へ、変なことはダメだが、それ以外だったら何でも構わない。何事にも報いを、だからな」

「うんうん、それが言えるってことは一皮剥けたってことか」

「うんうん」と頷いた景夜は笑顔になり、お願いを言う。

「じゃあ、明日一日——」

そして、若葉は後悔することになる。
景夜にあんなことを言ったのを。

翌日。

「おっはよう！あれみんなどうしたの？入り口前で固まって？」

本日一番最後に登校した友奈が、入り口前で固まっているみんなをみて疑問を口にした。

「いいから、あれ見て見ろって。アハハ！」

球子が笑いながら、教室を見やすいように場所を開ける。

するとそこには。

「か、景夜、この格好は恥ずかしいんだが」

何故かミニスカメイド姿で体をモジモジさせている若葉が居た。

「どういう状況なのこれ？」

「何でも、若葉が何かして欲しい事はあるか？って聞いたらああなっ
たらしい」

あまり理解できないが、友奈は何となくで理解した。

「可愛いですよ！若葉ちゃん！最高です！もっとかポーズ取ってく
ださい！」

鼻息を荒くしながら写真を撮るひなた。

「若葉さつきも言ったけど、今日の俺はご主人様だぞ」

ドヤ顔で若葉が顔を赤くし恥じらってる写真を撮る景夜。

今日復帰したばかりの景夜を気遣うものは、この教室にはおらず。

みんながみんな、若葉のメイド姿をみて楽しんでいた。
少しだけカオスだが、日常が戻りつつあった。

第十話 「願いと因果と希望の兆し」

時は少し遡る、景夜が目覚めた日の夜。

少女は病院の廊下を走っていた。

嬉しいことがあっても早歩き程度の彼女が走っている。それだけで何か大事な事だと分かる。

「ひなたさん、あまり病院の廊下を走らない方が……」

一緒に来ている杏や友奈たちの声も聞こえていない。

先程の若葉の電話から十数分、ひなたは走って景夜の下に向かっていった。

勇者として訓練を積んでいる友奈たちの方が早いはずなのに、何故かひなたに追いつけずにいた。

そして、――

「景夜君！」

「おお、ひなたにみんな来てくれ――」

景夜が言葉を言い終える前にひなたが景夜に抱き着いた。

本日で若葉にされたのを合わせて二回目の抱擁、ひなたの中学生にしては育ち過ぎとも言える双丘が景夜の体に押し付けられる。

いきなり抱き着かれたことによる驚きと、風呂上りなのか仄かに甘い香りのするいい匂いが景夜の頭をショート寸前まで追い込んだ。

「お、おい、ひなた。景夜の頭が沸騰しそうだ離れてくれ」

「す、すいませんーで、でも……景夜君が悪いんですからね！」

彼女の目には涙が溜まっており、今にも溢れ出しそうだった。

その涙を景夜は指でそつと拭き取る。

「ごめんな、ひなた。色々心配掛けて、友奈やチカたちも悪いな色々迷惑かけた」

「別にそんなことないわ……乃木さんが変わったのはあなたお陰でもあるもの……」

千景はそんなことはない、と、即答した。

他のみんなもそれに続き始める。

「そうだぞ！タマ達は迷惑だなんて思っていない！」

「そうですよ！私たちは迷惑だなんて思ってません」

球子と杏も、景夜の言葉を否定する。

景夜はそれがなんだか嬉しくて、少し泣きそうになった。

「そうだよカゲヤ君、それに私だって謝りたいことが……」

少し複雑そうな顔をする友奈を若葉が慰める、いつもなら有り得ない光景のように見えた。

「友奈、それは言わない約束だろ？」

「うん……」

友奈がいつもの笑顔に戻る。

ひなたはハグは止めたが、未だに景夜の手をずっと見ていた。

「生きてるんですよね、ちゃんと……」

「まあな、父さんのお陰かな……」

「心配したんですよ！若葉ちゃんが医者さんに話してことを聞いて、心臓が止まるかと思いましたが！何であんな無茶したんですか！」
ひなたの責めるような言葉が胸に響く。

分かっていたのだ、自分がこうなれば心配する者がいるということが。

「ごめんな……」

「謝って欲しい訳じゃないんです！あなたが怪我をしたら心配する人のことを考えて下さい、華恵さんなんて私たちが視てられないくらいに酷くて……」

ひなたが続きを言おうとした瞬間、その人は来た。

「景夜……良かった、本当に良かった！しんぱいしたんだから〜！」

華恵が景夜を抱きしめる、痛いくらいに強く。

もう二度と離さないように。

泣いていた、恥じらいもなく大人と言う立場も忘れて、一人の親として彼女は泣いていた。

「母さん……寝ている間に父さんに会ったよ、凄く善い人だった。母さんが惚れ込むわけだよ……」

「……………」

華恵は次の言葉を待つ、一字一句聞き逃さないように。

まだ泣いているのに、それでも聞き逃したくなかった。

『僕は君や華さんの心の中に生きている！』だつてさ、『愛してる』とも言つてたっけ。ホント善い人だったよ、父さんは」

「そうでしょ、最高の人だったわ。私には勿体無いくらいに……」

抱きしめる力が更に強くなる、まるでこの親子の絆の様に。

その後は、紅葉も来て大騒ぎになった。

景夜はこの日、自分がどれだけ仲間に思われているかを知った。

「それで、少し真面目な話に入るわね。景夜の体についてよ」

みんなが固唾を飲む、景夜の体は一体どのようになってしまったのか？

「医学的には何の問題もない至って健康な状態よ、でも大社によるとトロールの霊核を景夜の魂が取り込んだらしいわ」

「霊核を……取り込んだ？」

「そう、千景ちゃんが起こした精霊憑きとは違う。精霊憑きは使用者の魂を精霊が取り込んでしまうこと、つまり千景ちゃんのやつとは真逆に近いことなの」

みんなが少し首を傾けて話を聞く中、景夜はシエルの最後の言葉を思い出していた。

「君の中から成長を見守っているよ……」、この言葉は本当のことだったのだろう。

クスリと笑みが零れる、自分の胸に手を当てる。

心臓が一定のリズムで鼓動している。

(ここに父さんがいる、俺の心臓は父さんが精一杯の力で動かしてくれている……)

死ぬわけにはいかない、また一つ少年に死ねない理由が出来た。

「ちなみに大社はこの事象のことを精霊喰いと呼んでる、景夜の魂のことは霊核を宿してるためか霊核魂れいかくこん呼んでるらしいわ」

「精霊喰いに霊核魂か……何か中二病拗らせた奴が付ける名前みたいだな」

その何も考えずに出た言葉が、千景の心を傷つける。

「まあ、カツコイイから良いか」

すぐに景夜の言葉で回復したが。

「そうか、私はそうは思わんが」

少し話をした後、退院の手続きの為に華恵だけが残り他のみんなは帰った。

ある一人を除いては――

「景夜君、少しお話があります」

「何だ？」

ひなたの真面目な声に、景夜も気を引き締める。

「こんなこと言っても無駄だと分かってるんです、でも言います言わなくちゃいけません！お願いですから、もう戦わないで下さい。昔みたいにもいつも笑顔で、いつも楽しそうだった景夜君に戻ってください！」

「……………」

景夜はひなたの訴えを無言で聞いていた。

「助けられなかったと泣かないで下さい、無茶をして怪我をしないで下さい、お願いだからもう武器なんて持たないで下さい。お願いですから……………」

また泣いている、先程はみんなが居て言えなかったのだろう。

きつと若葉には言っていない、自分にだけ言ったのだろうと景夜は分

かっていた。

（お前の泣いてる姿は耐えられないから泣き脅しか、つくづくイイ手を考えるな。きっと昔の俺だったら耐えられなくて、頷いてただろう。でも今は違う）

「悪いひなた、そのお願いは聞けそうにない」

「……そうですよ」

嘘泣きではなかったのだろう、でもそれでもダメなのだ。

「若葉たちを見捨てるわけにはいかない、それに諏訪の人たちも助けられてない。まだやらなきやいけないことが多すぎる……でもさ、もし全部終わったら……」

「終わったら……？」

「みんなで旅行に行こう、世界中を回る旅。きっと楽しいぞ、天の神から世界を取り戻したらきっと」

それは夢、叶うかも分からない幻想。

それでも少年は夢を見る、「何の憂いもなくみんなで笑えればいいな」と。

空を埋め尽くす無数の星々。

星の数は、かつて誰も見たことがないほど多い。

星々のいくつかは重なり合い、より輝きを増していく。

それらは流星のように墜ちて。

大地を蝕み、壊していく――

――それが、上里ひなたが神樹から受けた神託のすべて。

意味するものはバーテックスの総攻撃。

そしてもう一つ、大社が気にかけていることがあった。輝きを増していく星……それがバーテックスの進化体を意味するのなら。

彼らはどこまで強化されるのか。

無作為に大型化しているだけなのか、それとも目指すべき『形』があるのか。

そして予言された侵攻が起こったのは、景夜の目覚めから数日も経たない頃だった。

樹海化によって一変した風景を見下ろしながら、勇者たちは丸亀城の城郭に立っていた。

瀬戸内海の向こうから、バーテックスの群れが迫ってくるのが見える。

若葉はスマホのマップを使い、侵入してきた敵の数を目算で確かめようとする。しかし、もはやマップ全体を埋め尽くすほどの量だったため不可能だった。千や二千といったレベルではないだろう。

「比喩ではなく、『無数』ということだな……」

険しい表情で若葉がつぶやく。

前回よりも厳しい戦いになる——分かっていたことだが、いざその状況を前にすると、不安を感じないわけはなかった。

そんな若葉の額を、友奈が指でつついた。

「若葉ちゃん、眉間に皺が寄ってるよ！ そんな怖い顔しなくても大丈夫。私たちは絶対に勝てるから」

「……そうだな」

友奈の笑顔のお陰で、若葉は肩の力を抜くことができた。リーダーである自分が不安を露わにして、周りを不安にさせてどうする？

「そうだ、みんなでアレやろうよ！」

「アレ？」

友奈の言葉に、球子が首を傾げる。

「みんなで肩を組んで丸くなって、『行くぞー！』ってやる奴！」

「円陣ですね。そういえば、勇者になる前の学校では、球技大会なんかでやってるチームがありました」

「……いいかもしれないな」

若葉、友奈、球子、杏、景夜が肩を組んで円陣になった。

千景はどうすべきか迷うように、視線を彷徨わせる。

「ほら、ぐんちゃんも！」

「チカも早く！」

友奈と景夜が千景に手を差し出した。

「……うん」

千景は戸惑いながらその手を取った。友奈が彼女を円陣の中に引き入れる。

そしてリーダーである若葉が声をあげた。

「四国以外にも人類が生き残っている可能性——希望は見つかった。希望がある以上、私たちは負けるわけにはいかない。この戦いも、必ず四国を守り抜くぞ！ ファイト、」

「「「オーツ!!」」」」

勇者たち六人の声が合わさる。

そうなのだ、まだ人類が生き残ってる可能性がある地域が見つかった。

南西にある沖縄、北東にある北海道。

この両地域で、生存者や勇者の存在が微かにだが確認された。

今回の総攻撃に当たり、杏が考えた作戦は、フォーメーション陣形を使うことだった。勇者たち六人を決められた場所に配置し、役割を分担してバレーテックスを迎撃するのだ。

迎撃の中心とする場所は丸亀城。丸亀城周辺は樹海化中も、まだ完全には植物に覆われておらず、見通しが良かったためだ。

丸亀城の正面・東・西にそれぞれ一人ずつ勇者が立ち、その後方に杏が待機。残った二人は休憩しておく。前方の三人が襲撃してくるバレーテックスを倒していき、討ち漏らした敵は遠距離攻撃に秀でた杏が仕留める。そして前方の三人の中で、疲労が見えてきた者は、休憩中の一人と交代する。

敵の多さから、今回は戦いが長引くのは間違いない。しかし休憩を挟んだローテーションで戦えば、長期戦にも対応できる。

また、切り札は疲労が激しいため、できる限り使わないことにする。

「で！何で景夜は早速精霊使ってるんだよ！話しちゃんと聞いてか！？」

「タマも俺の話聞いてないだろ、霊核魂になっただけからは負担が極端に減ったんだよ。むしろ使ってた方が調子が良いんだ」

「そうみたいなの、だから景夜さんには常時使って貰ってすぐにフォーローに回れるようにしてもらったの」

杏の言葉に球子が「なるほど！」、と言う感じに納得して前衛の三人を決める。

「丸亀城の正面には私が立つ」

円陣を組んだ後、そう言ったのは若葉だった。

「正面はバーテックスの群れの中心だから、きつと一番大変だよ……
いいの？」

心配そうな友奈に、若葉は凜とした口調で言い切った。

「だからこそ、私がやらねばならない」

「……なぜ？ より多くのバーテックスを……仕留めたいから……
？」

心の中を覗くように、ジッと千景が若葉を見つめる。

若葉はそんな千景の視線に、薄く笑って返す。

「違う。リーダーとしての責務——そして何よりも、この四国の人々
を守るためだ」

彼女の答えを聞き、仲間たちは表情を緩めた。千景だけは、まだ少し納得していないようだったが。

「分かったよ。そんじゃ、正面は頼むぜ、リーダー！」

「無理はしないでね、若葉ちゃん！」

「信じてるぞ、若葉」

球子と友奈が若葉の肩を叩き、景夜が背中を叩く。

「では、正面は若葉さん、東側は友奈さん、西側はタマっち先輩。千景
さんと景夜さんは一時待機。始めましょう！」

指揮官役も兼ねる杏の声と同時に、少女たちはそれぞれ自分の配置
に向かって跳躍した。

陣形を組みつつ戦うこと数時間、先程球子が『輸入道』によって何倍にも大きくした旋刃盤で大量の星屑と進化体で出て来た蛇型を倒した直後にそれは起こった。

景夜がバーテックスの群れへと目を向ける――

蛇型は殺され、球子の火炎旋刃盤に為す術もなく蹂躪されたバーテックスたちが、再び集合し始めていた。

蛇型が出来た時よりはるかに多い数の個体が融合していく。

「大きい……！」

バーテックスは、建物の屋上に立つ若葉からも見上げるような巨体になろうとしていた。

丸亀城と同じか、あるいはそれさえも凌駕するサイズかもしれない。

球子の輸入道の力でも倒せないよう、自らも巨大化させることで対抗してきたのだろう。

(バーテックスって頭悪くないか！)

景夜の考えは間違いではないが正解でもない。

四国に侵入してきたバーテックスのほぼ全てが一体に纏まろうとしている。

敵にとって最後の手段なのだ。

「若葉ちゃん！あんなに大きくなったら、どうにもできないよ！」

「どうすんだ、若葉！」

焦る友奈の声と落ち着いて冷静な声で問いかけてくる景夜の声聞きつつも、若葉は静かにバーテックスを観察していた。

敵をよく見ることは、武道において重要なことだ。

幼い頃からそれを体に仕込まれてきた若葉は、この緊急事態におい

ても敵を見ることは忘れなかった。

景夜はどうすればいいか分かっていて聞いているのだろう、行動を若葉に託しているのだ。

(あれだけの巨体を急ごしらえで作れば、どこかに綻びがあるはずだ……)

集合する通常個体バーテックスの動き――

形成されていく巨体の全身のバランス――

(……見えた)

若葉は形成途中の巨体バーテックスの中で脆弱な箇所を複数見つけ出した。

そして他の勇者たちへ叫ぶ、

「こいつの身体には、まだ脆い部分がいくつかある！奴の身体が完成する前にそれを叩けば、倒せるかもしれない！」

「脆い部分？けど……！」

友奈にも敵の脆い部分は見えたのだろう。

しかし、それは数百から数千ものバーテックスが集まっている中心だ。

簡単には近づくとさえできない。

「タマの輪入道なら……行ける！」

球子はフラつく体で、自分の近くに戻した旋刃盤に飛び乗った。

輪入道の力を纏ったこの旋刃盤であれば、通常個体バーテックスを倒しながら、融合する巨体に近づくことができる。

球子の旋刃盤が巨体バーテックスへ向かって飛行する――

「タマっち先輩、私も行くよ！」

その時、杏も旋刃盤に飛び乗った。

今まで指揮官役として丸亀城郭に留まっていた彼女だが、最後の攻防となる今、バーテックスも勇者も総力戦となる。

ならば自分も前線で戦うべきだと判断したのだ。

更に球子の旋刃盤に乗り込んだのは、杏だけではなかった。

「タマちゃんやアンちゃんだけに危ないことさせられないよ！」

「一和同心。共に行かせてもらおうぞ」

友奈と若葉。

「チームプレーも大切よ」

千景も。

「タマタクシー、あの巨体まで頼む。運賃はお手製。 Pastaで！」
そして景夜。

勇者たち全員が旋刃盤に飛び乗っていた。

旋刃盤の上に集まった仲間たちに、球子は一瞬キョトンとして――
―やがて笑みを浮かべた。

「よし、じゃあみんなで行くかっ！お代はそれで勘弁してやる！」

形成途中の巨体バーテックスは下腹部から砲弾のようなものを次々に放ち、若葉たちの接近を妨げようとする。

球子は輸入道を上手く操縦し、それらをすべて回避していく。

肉体の疲労は限界に来ているが、球子は気合で意識を保っていた。

（ありがとう……友奈、球子、杏、千景、景夜）

みんながいてくれることに、若葉は心の中で感謝した。自分の隣に仲間がいて、一緒に戦ってくれる。

それがどれほど、若葉にとって心強いかな。

巨体バーテックスの脆弱な箇所は複数ある。

若葉一人でそれらすべてを破壊するのは困難だっただろう。

だが——仲間たちと共にであれば、可能となる。

「球子は前方正面！杏は右上方二時の方向！友奈は下方五時の方向！千景は斜め後方！景夜は左上方十時の方向！私は上方を叩く！」

若葉と友奈と景夜以外の三人も、ある程度の場所を伝えられれば、敵の脆弱な部分を見つけることができた。

「行くぞー！」

若葉の合図に五人が旋刃盤から跳躍し、球子は旋刃盤に乗ったまま、それぞれ脆弱な箇所につっ込んでいく。

しかし——

バーテックスも弱点を狙われることは予想していたのだろう、脆弱部を守るように通常個体が集まり、勇者たちを取り囲んでしまった。これでは巨体バーテックスの脆弱部を攻撃できないどころか、逆に集中攻撃を喰らってしまう。

（まずい……！）

その状況に若葉は焦りを感じる。

こちらの動きを完全に逆手に取られた。

仲間たちは窮地に陥り、超巨体バーテックスは融合を終えて完成しようとしている。

（迷ってる時間は——ない！）

仲間たちを守るために。

この地に住む人を傷つけさせない為に。

もう二度と同じ過ちをしないように。

若葉は今、奥の手を使う。

神樹の概念的記録にアクセスし、そこから精霊の力を引き出し——
次の瞬間、若葉の身に新たな力が宿る。

「おおおおお!!」

若葉は近くを飛んでいる通常個体バーテックスの一体を蹴り、更に跳躍した先でまた別の通常個体を蹴って跳ぶ。

それを繰り返し、本来は空を飛ぶことが出来ない勇者が、空中を凄まじい速さで移動していた。

彼女が神樹から引き出した精霊は——『源義経』。
人間離れた体術を持つ武人。

義経はある時、海に浮かぶ舟から舟へと跳躍を繰り返し、跳ぶように移動したという。

その技は八艘はっそう飛びと呼ばれている。

八艘飛びにより空中における桁外れの機動力を得た今の若葉は、危機に陥った仲間の下へ一瞬で駆け付けることが出来る。

まあ、一人だけ危機に陥っていないものもいるが。

(相変わらず強いな、二週間も寝ていたとは思えない)

重力など存在しないかのように、空中を自在に飛び回る若葉。

他の勇者たちを取り囲んでいた通常個体バーテックスを、次々に斬っていく。

八艘飛びを繰り返せば繰り返すほど、彼女の速度は上がっていった。

もはや常人では目で追うことさえ不可能な領域に達する。

若葉の八艘飛びと斬撃により、勇者たちの行動を妨げていた通常個体バーテックスは、瞬く間に数を減らしていく。

「サンキュ―若葉、これ行ける!」

「撃ち抜けます!」

「今度こそ勇者。パアンチ!」

「感謝するわ乃木さん、これでやれる!」

妨害する通常個体を若葉が倒してる間に、五人の勇者たちは巨体の脆弱部を次々に攻撃していき……そのすべてを破壊した。

形成途中の綻びを抉られた進化体バーテックスは、巨体を崩壊させ、奇妙な悲鳴をあげながら消滅していく。

巨体のバーテックスが消滅する姿を見ながら、若葉は空から真逆さまに落ちていく。

(身体が……動かない……)

奥の手を使った反動が出ているのだろう。

「まったく、ヒヤヒヤさせるなお前は。後は俺たちに任せとけ、ゆっくり休んでな」

抱きしめられた腕の中で、少し夢を見た。

優しくて厳しい、そんな夢を。

こうして若葉は、過去との因果を断ち切った。

そして――

後世に『丸亀城の戦い』と呼ばれる激戦は趨勢を決した。

前例のない大規模な進化体バーテックスは、形成途中で崩壊。

侵攻してきたバーテックスの殆どを使った融合であったため、残った通常個体バーテックスを掃討するのは残された五人の勇者だけで

容易だった。

「うまつ！美味しいぞ景夜！こんなのでどうやって作ったんだ！」

「企業秘密だよ、また食べたくなったら言ってくれ」

あの激戦から一日、景夜は病室でパスタを振る舞っていた。

「それより、景夜は大丈夫なのか？お前も精霊使ってただろ？」

「大丈夫、そこらへんは父さん任せだけど何とかなってるよ」

景夜の精霊との同調律は八〇%を優に超えている。

それでも大丈夫なのは、景夜の魂が霊核魂になったこととシエルのサポートのお陰だ。

昨日も夢の中に出て来ては、昔話をしてくれた。

「若葉のやつも検査入院してるんだろ？そっちに行った方が……」

「あのなあ、あっちにはひなたが居るしいんだよ。それにお前にこれ食わせるって約束したからな、約束は守る」

「そういうところ、若葉に似てるよなく。まあいいや、サンキューな病院食じゃ味気なくて」

最初の方の言葉はスルーして、球子が食べ終えた皿を回収する。

「どういたしまして。それじゃあ、俺そろそろ帰るから」

「じゃあなー！」

病室を出て、丸亀城に帰る。

丸亀城に戻ると、放送室に行く。

後数分でここに勇者通信が来ると、神託が下った。

マイクの音量調整をしようとした瞬間、通信をキャッチした。

『もしもし。香川の勇者、柊です！』

『諏訪の巫女、藤森です。や、やっと繋がった、お願いします勇者の皆さんはこちらに来てください！』

焦っている、声も震えていて今にも泣きだしそうな雰囲気があった。

『落ち着いて、そちらの状況を教えて下さい』

『ええっと、北海道の勇者である秋原雪花あきはらせつかさんが来てくれたお陰で何とか持ってますが、それもいつまで続くか……』

北海道、本州より北にある雪国であり、確かに生存確認で引っかった場所だ。

『分かりました、至急そちらに向かう準備を始めます！それまで、何とか持ちこたえて下さい』

『は、はい、なるべく早くでお願いします！』

そしてプツリと通信が切れた、本気で不味い状態のようだ。

「希望は見つかった、ここからが正念場だ」

そして、物語の舞台は四国外に移る。

第十一話「二人の勇者と巫女（水都）と水守（美森）の勇者」

一二時間、四国の瀬戸大橋記念公園を旅立って移動し続けた時間だ。

諏訪との連絡が取れてから二日、神樹からの神託により侵攻が一時的に無くなることを知った。

勇者の全員が支度をしていた為に即出発したのだ。

「ひなた、辛くなったら言ってくれ。休憩挟むから」

「大丈夫ですよ、それよりも早く諏訪に行きたいんでしょう?」

「そ、それは……」

ひなたの言う通りだ、本当なら四国外の水質や土質の調査の為に行くはずだったのだ。

それを景夜が、「助かる人が居るのに、見捨てられるか!」と言い放ち勇者のみなどと全速力で諏訪に向かっている。

ひなたは、何時でも何処でも神樹から神託を受け取れる存在として同行している。

ひなたのことをお姫様抱っこで運ぶ姿に、杏が鼻血を吹き出しそうになったのはまた別の話だ。

「そろそろですね、諏訪の皆さんは無事でしょうか?」

「さあ?それを確かめに行くんでしょう?」

「そうだぞアンズ、まずは確かめることが大事だ!」

みんなが揃って球子の方を向く、球子のことを見る目は心配そうな

感じた。

「済まない球子、何か不調があったのだな」

「ゴメンねタマちゃん！」

「何かあったんですか、球子さん」

「どうかしたのか？タマ」

「土居さん、大丈夫かしら？」

「タマツチ先輩！風邪でも引いちやった？」

「だー！何でタマが真面目なことを言っただけでこうなるんだ！」
少しコントを挟みつつ、着々と諏訪に近づいていく。

その時だった、前方から爆発音が響いて来た。

勇者ではないひなたでさえ分かる大きさの爆発音。

明らかに尋常ではない、景夜は自分の心臓の鼓動が早くなっているのを感じる。

焦っている、いつものような冷静な思考が保てない。

（目の前で誰かに死なれるのもう真つ平だ！）

穂先の精密操作で階段を作る、まるで空を走るように爆発のあった場所に駆け付ける。

そこには、以前の大規模襲撃の際に現れた進化体バーテックスに酷似したものだ。

体長は二回り程小さいが、それでも臀部の所から砲弾のようなものを放つ攻撃は強力だ。

だが、一回見ている者からすれば大したものではない。

「ひなたを任せたぞ若葉！」

「任された！」

ひなたを若葉の方に渡し、空中から地面に降りる。

「喰らえやあー！」

トロールを降ろしてからの全力のやり投げ、速度はどうにマッハ1を超えている。

その攻撃で進化体は大穴が空き、進化体は砂になって消えていった。

「ホワイ！今のいかにもデンジヤラスな攻撃はどこから？」

「あゝ、多分あの人じゃないかにやゝ」

邪魔な敵が消えたそこには、眼鏡を付けたどこか飄々としている少女と、何故か英語風の話し方をする陽気そうな少女が居た。

「いやゝ、まさか二日で来てくれるなんて。思いもしなかったわ」

「そうだね、運が良くて助かったにやゝ」

「全速力で飛ばしてきたからな、お陰でヘトヘトだよ」

巫女であるひなたと水都がお茶を出す。

「何より、無事で良かった。歌野に藤森に雪花も」

若葉からしたら、二度と会うことはないと思っていた友に再開したのだ。

嬉しくない訳がない、呼び方に関しては歌野と雪花から名前で呼んでほしいと言われたのでそうなる。

少し長めの自己紹介を終えた途端、景夜が頭を深く下げた。

「本当にすまない！助けに行けなくて、こんなに遅くなってしまつて」

「別に良いのよ、景夜。全然ノープログラムだったわ！」

「そうか？ならいいんだけど」

「案外律儀な性格してるのね景夜は」歌野にそう言われて少し照れたように、景夜は顔を逸らした。

けれど、ただ一人だけ彼らを糾弾するものが居た。

「全然問題なくないよ！今日だって、一歩間違えれば死ぬかもしれないよ！それ……私たちは囿にされたんだよ、何でうたのんは怒らないの！」

ちやんと納得したのだ、歌野の理由を聞いて。

けれど言ってしまう、だつてしようがないだろう水都にとって歌野は大切な人親友なのだから。

「通信が切れたあの時に、秋原さんが来てくれなかったらみんな死んでたんだよ。運が良かったから助かったんだよ！」

そうだ、実際景夜たちは六割がた諏訪はもうだめだと思つていた。

「ゴメンな、でも歌野が頑張つて稼いでくれた時間のお陰で俺たちは強くなれた。諏訪との通信が切れたときすぐに行きたかった、けどあの頃はまだみんなが上手く噛みあつてなくて行けなかった」

言葉を続けようとした景夜を水都が遮る。

「私は何もできなかった！うたのんが傷ついているのを見て手当てをするだけ、私はうたのん勇者つて言う影に隠れてただけ。巫女としても全

然役に立ててなかった……」

水都の言葉は自分に向いていた、戦えないもの叫びだろう。いつの時代も、戦う力の無い者に世界は残酷に出来ている。

だが、景夜も見過ごせない部分があった。

(役に立ててない、か……水都それは違うな)

「それは違う、水都は十分歌野の役に立てたと思う。多分歌野一人じゃこうはならなかった、水都が隣に居たからこそだ。……ちよつと話は変わるけどさ俺も昔は弱虫だったんだ」

景夜は話した、ひなたや若葉との出会い。

勇者に目覚めてまだあまり時間が経ってなかった頃の話。

「——と、こんな感じだ。俺も若葉も支えられてきたひなた^{巫女}って言う存在に、

だから言える。水都、お前が役に立ってなかったなんてことはないちゃんと歌野^{勇者}を支えてたと思うよ」

水都が歌野を見る、答えを待っているのだろう。

「うたのん……」

「みーちゃんが居たお陰でここまで戦ってこれたつてのはトゥルースよ、だってみいちちゃんがいてくれると私のハートはストロングになるんですもの！」

少し英語交じりだが、歌野の感謝の念が伝わってくる。

百点満点を上げてしまいそうになる、理想とも言える相互信頼関係だ。

「私たち四国の勇者をパスに神樹様の力を使って、諏訪にいる皆さんを四国に転移させます。すでにこちらの土地神様からの了承はされ

てるようなので、明日にでも転移を行いたいお思います」

杏が歌野や雪花や水都に今回の作戦の説明をしている。

作戦の内容としては、若葉たち（景夜を除く）四国勇者と神樹の力渡しの関係を利用し、少なくとも三人を軸にして諏訪に霊的なパスを繋ぐ作業をする。

パスが繋がれば諏訪にいる住民たちを四国の結界の中に移動させることが出来る。

だが神樹も全能ではない少し座標に誤差が出る可能性もあるので、軸になった三人の勇者はそのまま四国に帰還するようにする。

残った三人の勇者と巫女のひなたは、水質や土質調査をやって帰ることになっている。

「オールライト！それじゃあ、私もそのリサーチに協力するわ！」

「雪花さんも協力しますよ、一応助けてもらうわけだしね。借りは返さなきゃだし」

雪花の視線がある方向に向く。

その視線の先には、ひなたに膝枕をされ気持ちよさそうに寝ている景夜の姿があった。

「そつちの景にゃんは大丈夫なの？さつき善い事言っただと思ったら、杏の話が始まって数分で寝ちゃったし。もしかして、難しい話は苦手なの……？」

「それはないな雪花、景夜はこれでも杏と同等かそれ以上の頭の良さがある」

「じゃあ、なんで眠っちゃったのさ？」

「それはですね——」

ひなたの話によると、今回の作戦を立てたのは全部景夜らしい。諏訪との連絡が取れた数時間後には、この作戦を大社本部に送り付けた。

「神樹からの神託により侵攻が一時的に無くなることを知った」のが、ちょうど今日の午前五時頃。

それまで景夜は不眠不休で、諏訪への救援のために準備を済ませたり、作戦の成功率を少しでも上げるために大社の中を走り回っていたのだ。

「へえ、景にやんって結構お人好しなタイプだね」

「結構どころではないわ……最高にお人好しよ、景夜君は」

そんな話をしていると景夜がもぞもぞと起き始めた。

「ワリイ、寝てたわ。それで、作戦の話は済んだか？」

「済んでますよ。で、軸になる人はどうしますか？」

「軸かあ、杏と球子それと……友奈かな。こっちには雪花が居るし作戦立てや後衛の方も大丈夫だし」

景夜は、もし自分たちが居ない間に侵攻が来た時の為に球子と杏と友奈を選んだ。

球子の精霊は大多数戦に向いているし、杏の精霊もそうだ。

友奈を返したのは、もしもの場合に備えてだ。

それに、機転の良い杏がいれば少しの問題も解決出来るだろうという信頼もある選択だ。

「悪いが、今言った三人は諏訪の土地神様が祀られてある神社に行く
てくれ。今日はそこで過ごしてくれ、そうすれば一応パスは繋がるは
ずだ」

「りよーかい！行こう、アンちゃんにタマちゃん」

友奈が杏と球子連れだして家を出ようとした時、水都が小さく声
を掛けた。

「あ、あの、案内しましょうか？」

「だいじょうぶだいじょーぶ！それより、そこにいる不眠不休で頑
張ってたバカゲヤのために何か飯でも作ってやってくれ」

「そうですね、場所は何となく分かっているので景夜さんのことをお
願ひします」

「わ、分かりました！気を付けて下さい」

球子と杏の言葉を聞いた水都は柔らかな笑顔になった。

「柊さん、そのご飯何か食べたいものつてありますか？」

「あー、パスタとかってないよね？」

「スイマセン！その……蕎麦なら」

「なら、蕎麦でお願い。蕎麦って一度食べてみたかったん……あのさ
そんな目で見るとやめてくんない！」

景夜が蕎麦を頼もうとしたら、若葉とひなたと千景の三人に白い目
で見られたていた。

そんな気まずい空間を壊したのは、幼い子供の声だった。

「歌野おねーさん！新しい勇者さんはどこー？」

「歌野ねえちゃん！新しい勇者さんいるー？」

「海斗君に水守^{みもり}ちゃん！ここに来ちゃダメって言ったのに」
来たのは八歳位の男の子と女の子だ。

女の子の方は礼儀正しいがまだ幼さが残っていて可愛い感じだ。
男の子の方は元気ハツラツって感じた、だけど……

「あの、その子……右腕が……」

「ああ、海にゃんはねバーテックスに腕をやられちゃったの。運よく助かったんだけどね」

千景の言葉に雪花は軽い感じで返してるが、相当なことがあったのだろう。

「実はね雪花さんが来てくれて少し経った頃にね……」

歌野が話したのは勇敢な少年の話だ。

「これでフィニッシュ！センキュー雪花さん」

「いやいや、どうってことないって。と言うか、歌野はこれから畑行くんでしょ？頑張ってるね！」

いつも通り、危なげなく戦いを終えた二人。
そこに二人の子供がやって来た。

「歌野おねーさんに雪花おねーさん！水都おねーさんが呼んでたよー！」

「水守ちゃん！走らないでよー！それに外は危ないよ！」

水守は用事を伝えるのに必死だったのか、結界の外に出たのに気がついていない。

海斗は水守が結界の外に出たのが見えたので走って追って来たのだ。

「ありがとみもっちゃん、歌野行こっか。二人も一緒にね〜」

「はい！」

「ふふ、雪花さんも段々ここに馴染んで来たわね」

「もー、雪花ねえちゃんも歌野ねえちゃんも水守ちゃんのこと少しは注意してよー！」

四人が談笑していた、その瞬間事件は起きた。

「カチカチ！」

歯のような部分で音を鳴らしながら、バーテックスが迫っていた。

「水守ちゃん！」

「え？！」

気付いたのは海斗だった。

バーテックスの進行方向上には水守美森がいる、そんな時に海斗がとる行動は？

決まっているだろう、

「きゃっ!？」

「うあああああ!!!!」

水守が突き飛ばされる、何とか間に合ったのだが。

海斗の断末魔のような叫びが聞こえた。

少年の右腕は、すでに。

「海斗君！」

「海にやん！」

勇者の二人が動いて、バーテックスをすぐに片付ける。

倒したは善いが、海斗の右腕は肘から先が無くなり、骨が見え血が湯水のように溢れ出ている。

「か、海斗！海斗！何で、どうして！」

「あ、たりまえじゃん、水守ちゃ、んを助けるの、なんて」

言葉が痛みで上手く話せないのか、途切れ途切れの言葉が口から出ている。

「歌野！海斗をお願い！私は水守ちゃん連れて水都の所に行ってるから！」

「ラジャー！そっちはお願いするわ！」

二人の迅速な対処により、海斗は一命を取りとめた。

これが事の顛末だ。

「そんなことが……」

景夜は海斗の所に向かう、今は水都の居る台所で料理を手伝っている。

「海斗、少し聞いていいか？」

「何？勇者の兄ちゃん？」

「お前は何であの子を助けたんだ？」

多分帰ってくる言葉は、少年にとっては当たり前のことなのだろう。

「父さんが俺の名前に海斗って付けたのは理由があったんだ、海のようにビツクなハートを持って欲しいからだって言ってた」

「そっか……」

「それでね、大好きな女の子を守れるんだったら、腕の一本位安い！って言えた方が善いかなって思ったから」

親に願われたから、ただそれだけの理由なのだ。

海斗が水守^{美森}を守る理由はそれで善いのだ。

「俺と君は、結構似てるな」

「そうかな、兄ちゃんみたいな勇者になれる？」

憧れたものを見る目だが違う、景夜も海斗のことをそんな目で見ていた。

「もうなってるよ、あの子の勇者に」

諏訪には勇者が居る。

歌野に雪花と言う土地神に選ばれた勇者。

そして、水守^{美森}の勇者が一人。

諏訪に居た。

第一二話 「実力と質問と天使」

諏訪を出て早一日、勇者たちは夜の森林にてキャンプを行っていた。

「まさか、景夜君がキャンプ用品について詳しいなんて知りませんでした」

「そうだな、どちらかと言うと景夜はインドアなものの方が好きだと思っただが」

「インドアなものも好きだよ。アウトドアはタマに教わったんだよ、前々から興味はあったし何回か二人でハイキングにも行った」

球子と景夜は仲が良い、最初に会った頃から意気投合し加速度的に距離が無くなった。

友奈の場合は彼女の方から寄り添って来たが、球子の場合は感性の近さやお互いの性格故に仲良くなった。

ハイキングに行ったのも本当で、景夜がもつと球子のことを知るために彼女が好きなアウトドアに誘ったのである。

作戦は大成功で、最初の一回でお互いを良く知ることが出来た。

その後もちよくちよく行っているので、今回のようなキャンプの仕事にも大分慣れている。

「良いなくそう言うの、私の方はそんな余裕あんまりなかったからさ
」

「そうだよな、雪花は凄いよ。北海道何て言う大きな地域を一人で守ってたんだから、俺たちなんて四国を護るので精一杯だよ」

景夜は心の底からそう思っている。

もし自分がそうになったら、きつとどこかで折れていただろう。

その言葉を聞いた雪花が徐に立ち上がり、自分の武器である投げ槍を召喚する。

「ねえ景にゃん、一度じっくり君の実力を見せてよ？今日は敵に遭遇しなかったしさ」

「……はあ、いいぞ。一通りキャンプの準備は終わったしな」

景夜が周りを見渡す、そこには二つのテントと焚火。

テントも立て終わり、火も起こした、後は食事の準備をするだけだ。それならひなたや水都に任せられるだろうと判断し、自分も天逆鉾を手に取る。

「勇者服は着ないの？」

「ハンデだよ、あれは雪花たちの勇者服よりなにかとスペックが高いからな」

ニヒルに笑って見せる景夜に対して、雪花は目を細める。

「舐めてる？」

「まさか、尊敬してるは本当だし、実力も分かってるつもりだ」
決して舐めて掛かっている訳ではない、これ位が丁度良いと景夜が判断したまでだ。

慢心は無く、ただ単に「これで勝てなきや、師匠に申し訳ない」と思っている。

雪花を過少評価してる訳ではなく、実力を考えての行動だ。

「後悔しても遅いよ！」

「それはどうかかな？」

雪花が不意打ち気味に槍を投げる。

景夜は浮いた穂先を使つて、難なく槍を叩き落とす。

「今度はこっちから行かせてもらおうぞー！」

力を込めて地面を蹴る、すると一瞬で数メートルはあつたであろう距離が無くなる。

幾ら勇者になつて鍛えたからと言って、こんなことは有り得ない。

景夜自身も内心少し驚いていた、トロールの魂と同化して霊核魂になつた所為か、今までより格段に基礎能力が向上している。

一瞬で無くなつた距離感に少々驚く雪花だが、そんなことでは隙を晒さない。

すぐさま替えの槍を用意して、柄の中ほどを持ち迎撃態勢を取る。

一方、突っ込んだ景夜も無難に柄の中ほど持ち近接戦に持ち込む。最初は様子見で、上段から振り下ろす。

だが、その振り下ろしの速さも異常で音を立てながら迫つて来る。

雪花は即座に受け切れる攻撃ではないと判断、柄を短く持ち替えて攻撃を逸らす。

「中々やるねえ、景にやん」

「今のは受け流して正解だな、多分受けてたらヒビ入ってた」

（何となく分かつてけど、化け物過ぎない。勇者服なしの神器だけの状態でこんだけとか、完全な状態で精霊？だっけ使つてたら勝てないじゃん！）

雪花は景夜の強さに内心舌打ちしつつも、この人が仲間になつてく

れるなら心強いと思った。

「まだやるか？雪花」

「……いや、止めとくわ。今の一撃で確実に強いってことは分かった。だから……」

「だから……？」

雪花のいつもの飄々とした態度は鳴りを潜め、真面目な声音で話す。

「強さは分かった、だから景にやん。次ぎは心のテスト」

「心のテスト？」

「そう、次のテストは四国組に人全員が答えてね」

真剣に話す雪花の雰囲気は呑まれ、その場一帯が静まり返る。

「水都と歌野にはもうしたんだよね。心理学とかに近いんだけどさ」
雪花がある話を話し始めた。

話はどうだ……

あなたは大切な人（家族、恋人、友達、e t c）と銀行に来ていました。

その時、銀行は銀行強盗に襲われてしまい、人質として捕まっています。

人質の数はあなたたち二人、警察は人質が居る為派手に動くことが出来ません。

偶然にもあなたは警察官で、上司に内部で動いて強盗犯を捕まえろと命令されました。

しかし、犯人はあなたの大切な人に爆弾を付けてしまう。

爆弾を取り外していたら、犯人は逃げてしまいます。

犯人を追いかけたら、大切な人は死んでしまいます。

あなたは、どうしますか？

使命感や責任感に押され、大切な人を捨てて犯人を捕まえますか？
そうすれば、あなたは同僚や上司に称賛されることになるでしょう。

ですが、大切な人には恨まれることになります。

愛や友情の為に大切な人を助けて、犯人を見逃しますか？

そうしたら、あなたは同僚や上司に蔑まされることになります。
ですが、大切な人には感謝されるでしょう。

こんな感じの話だ、如何にも心理学の話であるもの。

小を為して、小に称賛されるか。

大を為して、大に称賛されるか。

景夜からしたら、そんなのは決まり切っている。

「そんなの決まってるだろう、なあ若葉？チカやひなたもそうだろう？」

「景夜の言う通りだ、答えは決まり切っている」

「何となく若葉ちゃんや景夜君の言いたいことが分かりますね」

「そうね、私もそうありたいわ」

四人の答えは……

「二」大切な人を助けた後犯人も捕まえる（です・わ）「三」

同じだった、景夜に若葉は勿論。

千景やひなたも同じ答えだった。

ひなたは景夜と若葉の考えを読み、自分も二人の傍に居る為にこの
答えを選んだ。

千景は景夜と同じ答えに辿り着きたいと言う感情と、若葉に対する対抗心によるものだ。

雪花はその答えを聞いて笑い出す。

「アツハハハ！きつつすがだね、歌野や水都と同じこと言ってる」

「だから言ったでしょう雪花さん、聞いても無駄だって」

「うたのんの言う通りだったね」

この七人で過ごす最初の夜、心の距離は先程の問いのお陰か殆ど無くなっていた。

「景夜君、覗かないで下さいよ？」

「覗かねえよ」

ひなたがからかうように景夜にそう言うと言の中に入っていく。

水を浴びて体を洗うために女子組が川の浅瀬に入っていく。

座って腰が浸かる所まで行くと、全員が腰を下ろす。

「いや〜冷たいにや〜、流石にこの時期は寒いよ」

「そうですね雪花さん、こういう時はジツとしている方が善いですね」

「そうだな、余計に体力を持っていかれかねん」

雪花に若葉にひなたは座ってジツとしているが、歌野は水都にジリジリと近寄っていく。

「ねえねえみいーちゃん？」

「な、何うたのん」

手のひらを皿のようにして、水を貯めている歌野に対し水都は少し後ずさる。

「せーい！」

「ひゃっ！も、もう！うたのん」

歌野は容赦なく水をかける、水都もお返しと言わんばかりに水をかけ返す。

歌野はそれをサラリと躲す、その後ろには千景が。

「きやつ!?!」

千景は少し驚いた声を出した後無言になり、いきなり立ち上がる。

「デンジャラスな感じがするわ」

「うくん、逃げるが勝ち！」

「えっ?せ、雪花さん」

立ち上がった千景は歌野と水都を標的とし、水かけの準備を始める。

その動きを見て、自分に被害が出るのを恐れて退避。

「景にやん、もう上がったよ」

「早いな、って！服着ろ服！」

「あ……景にやんの変態……」

「理不尽だ！」

退避してきた雪花は服を着るのを忘れ、景夜の前に全裸で行っ

てしまい、何だか気まずい雰囲気になってしまった。

景夜に後ろを向かせ、雪花は急いで服を着る。

「何か……ゴメン」

「い、いや私の方こそ」

大きな岩に背中を預けて座っている二人、後ろの方からは悲鳴が響いてくる。

そんな気まずい雰囲気の中、草むらの方から音が聞こえた。

「人か？いや……動物の可能性もあるな」

「そうかな、バーテックスの可能性は？」

雪花の考えは考えは間違っていないが、景夜は直感的にそれは違うと分かった。

「多分違う、それにバーテックスだったらとつくに襲いに来てる筈だ。

雪花みんなを頼む、俺は少し様子を見てくる」

「景にやん一人で大丈夫そう？」

「もしもの場合は助けを呼ぶよ、そんな時はよろしく」

そう言い残して、景夜は変身して音のした草むらに走っていく。

「念の為に着替えときますか」

雪花も勇者装束に着替え直し、景夜の帰りを待った。

三分程走った頃だろうか、微かに人影を見つけた景夜は思い切つて声を掛けた。

「その人、少し待ってくれ。ここは危険だから俺たちの方……に……」

景夜の声が途切れる、驚いているのだろうか、完全に固まってしまっている。

人影の正体を見て。

「よう！柊景夜くん、初めまして。俺は天の神の使い……君たち風に言ったら天使かな？」

十四歳か十五歳程だろうか景夜とそう変わらない歳の少年だ。

だが、問題はその少年の容姿だ、似てるのだ可笑しい位に。

「あれ？もしもーし、ちゃんと聞こえてるよね？可笑しいな、こんな感じの言葉で合ってるはずなんだけど」

言動が少し幼く感じるが、似ているのだ声の質も。

いや、そっくり何てレベルじゃない。

どこからどう見てもその少年は柊景夜そのものだった。

「お前、何で俺と同じ……」

「ああ、この格好？これね、生き残ってる人類の中で最も強い人物を参考に作ったんだって。君にそっくりなのもその所為だよ」

無邪気な子供の様に呆気からんと言う少年に対して、景夜は一種の恐怖を感じた。

「目的は何だ？お前みたいのが作られたのは、何かしら目的があるんだろ？」

「目的？うーんしいて言えば人類の根絶かな、でも安心して今回は君たちを観察しに来ただけ。それに君たちは……完成型には勝てないだろうしね。もしもの時に用意されたのが俺ってわけ」

この少年の意図が景夜には分からない、目的をペラペラ喋るし、今回は観察しに来ただけでも言うし。

だが、景夜はこの天使が言っている言葉には嘘が感じられなかった。

「完成型に、もしもの為の天使か……嘘は言っていないよな」

「何で嘘なんか言う必要あるのさ？君たちみたいに不完全な生物には嘘は必用かもしれないけど、俺は天使だそんなものは必要ない。それに君たちが俺に勝てるとは思えないし」

確かに、天使から発せられてるオーラは段違いだ。

この前の超大型バーテックスが可愛く見える程の格の違いが分かる。

「じゃあ、今日はこれでサヨナラ。今度君たちに会う時は樹海の中かな」

天使はそこに階段があるかのように、空に向かって駆けあがっていく。

空に突如として光輝く扉のようなものが現れて、天使がその扉の中に入りどこかに消える。

扉に入った後、その光輝く扉は消えてしまう。

「何だったんだ……」

景夜はただそこに立ち尽くし呆然としてしまう。

突然のこと過ぎて、景夜の頭でさえもキャパオーバーを起こしてしまった。

天使が去った後、そこには静寂だけがあった。

その後は、みんなの下に帰りあった事柄を細かく伝える。

聞いた全員が驚いて少し固まったが、各々何とか理解して情報を飲み込む。

そして、その日は勇者が後退で当番をして就寝した。

四国へ帰る途中、名古屋駅近くのビルにて卵状のものに覆われている都市群を見た。

梅田駅の地下街では、地下に逃げ込んだ少女の日記を見た。

景夜たちは、人間の醜さを直視させられている気がした。

地質や水質の調査はサンプルを持ち帰るだけだったので何とかなったが、みんなの気分は少しだけ落ち込んでいた。

だが、歌野の底なしの明るさのお陰でどうにかなった。

物語は進み、着々と決戦は近づく。

果たして、誰が生き残り、誰が居なくなるのか。

まだ誰も知らない。

十三話 「レクリエーションと卒業と告白」

「なあ杏?」

「何ですか? 景夜さん」

「俺は何を見せられているんだ?」

景夜の目の前に写るのは学ランを着て球子に壁ドンをする若葉と、それを横から止めに入る友奈（こちらも学ラン着用）。

球子もいつもとは違う大人しい女の子風の出で立ちだ。

「このシチュエーションがやりたかったんですよ!」

杏は鼻息を荒くして生末を見守っている。

「四国の勇者さんたちっていつもこんな感じなのかにや?」

「いいや、断じて違う。今回はたまたまだ」

雪花の考えを速攻で切り捨てて、何でこうなってしまったのかを彼は思い出す。

遠征から帰って来て数日たったある日、若葉からこんな提案が出た。

「レクリエーションを兼ねた模擬戦?」

「そうだ、雪花と歌野も加わったことで戦術の幅も広がった。それにここ最近は嘘の報道ばかり聞いて皆もウンザリしてるだろう?」

若葉のみんなに問いかけるような言葉に、そこに居る者たちは全員頷いていた。

「優勝者が他の者に命令することができる、どうだ？中々に面白いものだと思うのだが」

若葉の提案にみんな乗り気になってきたが、ここで一つ重大な問題が起きた。

「景夜君はどうするの……？」

千景の言葉に場が凍り付く。

誰もが忘れていた景夜と言う勇者の^{化け物}ことを。

「ノープロブレム！景夜のこととは問題が出てからどうにかしましょう！」

「うたのん、それは何か投げやりだよ」

結局、景夜も参加することになり。

翌日、二の丸で模擬戦^{レクリエーション}がスタートした。

開始の合図から数分、それぞれ適当な場所に配置されたのでみんながみんな獲物を探し周る。

そんな中、景夜はスタート位置から一向に動かずにいた。

「今日は風が涼しいな〜」

何故か一人黄昏ている景夜。

既に、景夜の周りには続々と他の勇者が迫って来ていた。

彼はそのことを分かっているのか、模擬戦用のゴム槍を地面に突き刺し、空を仰いでいた。

「見つけたぞ景夜！」

「サーチしてやっ与会えたわ景夜」

「ヤバそうな人は最初に潰すに決まってるからにや〜」

「ごめんなさい、景夜君。でも……今回は譲れないの……!」

「カゲヤ君見つけ!あれれ?!他のみんなもいる」

「景夜!今日と言う今日はお前に一泡吹かせてやる!」

杏以外の全員が、景夜の下に集合していた。

景夜は溜息を吐きながら、文句を垂れる。

「お前らさあ〜、もうちよつと遠慮とかないわけ?」

「そんなものはない!」

「ナツシングよ!」

「ないにや〜」

「今は……無いわ」

「少しあるけど、何かカゲヤ君だったらこんなにかくさんいても負け
そうな気がするんだよね」

「おい友奈、それは言うなよ!ああ、もちろんタマも遠慮なんてない
ぞ」

それぞれ違う回答が飛び交う中、景夜は槍を地面から抜き構える。

「来るぞ!」

若葉の声が放たれた瞬間には、景夜は雪花の背後を取っていた。

「まずは一人」

突然のことにも、雪花は何か対処しようとするが、如何せん相手が悪い。

受け流そうと思って構えた槍は、いつの間にか柄の中心部分から真つ二つになっていた。

「嘘！チート過ぎるでしょ！」

あまりの出来事に悪態を突いているが、これで雪花は脱落。

次に景夜が狙ったのは千景だ。

「ごめん、チカ。模擬戦でも負けるわけにはいかないんだ」

あまり使わない足払いの攻撃で、体制を崩した所を狙おうとしたが、視界端からの斬撃の所為でその攻撃は中断される。

「礼は言わないわよ」

「別に構わない、それに数が居ないとアイツは倒せん」

二人のやり取りに微笑ましさを覚えながらも、しっかりと敵を見据える。

（仕切り直そう）

そう考えた景夜は、跳躍して姿を眩ませる。

「逃げたか……」

「エスケープしたわね」

「だったら、狙いを変えるまでよ」

千景が、大鎌を歌野と若葉に向ける。

愚策ではあるが、闇討ちならまだ景夜に勝てる可能性があると考えての行動だろう。

「私も手伝うよ、ぐんちゃん！」

「だな、景夜を倒した後はこの二人が敵になるだろうし」
こうして、三対二の戦いが始まった。

景夜は天守閣の屋根に立ち、みんなの行方を捜す。
天守閣三階の窓から双眼鏡で戦況を見ているひなたと水都に、景夜は問かける。

「ひなたに水都、残っている奴は後誰だ？」

「球子さんだけですな」

「それ以外は？」

「みんな相打ちですよ、激しい戦いがあつたみたいですから」
何故か終始水都が黙っていたが、景夜はそんなことは気にせず天守閣を下りていく。

その時、球子の旋刃盤が景夜の横を通り抜けて行った。

「あつぶな！けど、これでタマに武器はない。悪いけど俺の勝ちだ」

景夜は完全に油断していた、この姿を紅葉に見られていたら完全にお仕置きコース確定だろう。

そんな油断していた景夜の眼前に、一本の矢が迫っていた。

(はっ……もしかして、ひなたに騙された?)

「確実に当たる」、杏は確信していただろうし、どこから出て来たの

か球子もドヤ顔で景夜を見つめている。

だが、景夜は飛んできた矢を歯で噛んで止めて見せた。

「ぺっ、まさか杏も残ってるなんてな」

呆然としていた球子をゴムの穂先で叩いてリタイアさせ、残る杏にも穂先を向ける。

「良い作戦だったよ杏、危うく負けるところだった。てか、霊核魂になる前までの俺だったらまず負けてた」

「……ありがとうございます、でも負けは負けです」

「そのことでな、一つ提案がある」

そこで景夜は自分には命令しないと言う条件付きで、杏に「命令権」を譲った。

この時の景夜は、あんなことにあるとは思ってもしなかったのだ。

こうして、第一回バトルロワイヤル模擬戦は、終景夜の勝利に終わった。

だが、勝利の権利である「命令権」は伊予島杏が獲得することになった。

そして――

「私のものになれよ、球子……」

「わ、若葉君……そんなこと言われても、タマには他に好きな人が……」

「待ちなよ、若葉君！球子さんが嫌がっている」

「あ、高嶋君……つて！なんじゃこりやあああつ！」

「カット、カットおっ！ダメだよ！タマっち先輩！ちゃんとセリフ通りに言ってくれないと！」

教室の中で、若葉が球子を壁際に追い詰め、腕を壁ついて逃げ場を塞いで甘い言葉を囁く——いわいる『壁ドン』

そこにやって来た友奈が、若葉と球子の間に割って入る……三角関係。

景夜からしたら、何が何だか分からない光景だ。

本当ならこのシーンは自分がやる予定だったのかもしれないと思うと、背筋に嫌な汗が流れた。

因みにこれは、景夜も読んだ杏が気に入りの恋愛小説の一節を若葉と球子と友奈を使って再現してるのだ。

これの前にも、歌野と雪花を使って寸劇を繰り広げていた。

「こんな恥ずかしいセリフ言えるかつ！というか、なんでタマが『内気で大人しい少女』の役なんだよっ！」

「このヒロイン、背が低いって設定だから。タマっち先輩に合うかなって」

「タマがチビだっけ言いたいのかあっ！」

球子には杏に対して抗議をしている、景夜から見てもこの寸劇は何とも言えないものがあった。

「というか、私は男装までさせられているんだが……」

「私も……何だか男子の制服って、変な感じ」

「悪かったな、変な感じで」

学ランは元々景夜のものだ。

だが、成長するにつれ学ランよりブレザーの方が着やすいことが分
かり。

中学一年の秋には、ブレザーに変えた。

杏が必要だからと言うので、押し入れから引っぱり出してきたの
だ。

杏監督の厳しいこだわりであった。

因みに、ひなたはとてもホツコリした顔で、若葉・友奈・球子の演
技を鑑賞していた。

もちろん、スマホでその様子を撮影することも忘れていなかった。

「とっ、とにかくっ！あんずの言う通りにしたぞっ！もうこれで命令
は終わりなっ！」

「私もこれで終わり……でいいか？」

球子は顔を赤くしながら叫び、若葉はぐったりしていた。

「面白かったけど、やっぱりちよつと恥ずかしいよね」

友奈も照れながら言う。

「まあ、少し再現度に不満はありますが、よしとしましょう。さて、次
は……」

杏の目が、千景に向く。

ピクツと体を震わせる千景。

「私も、あんな恥ずかしいことを……？……？……ぜ、絶対にお断りよ……
！」

「ふふふふふ。千景さんに合った役柄は何がいいでしょうか？」

杏は口元に悪どい笑みを浮かべる。

「うう……」
体を強張らせる千景。

しかし、杏は首を横に振って、

「千景さんには、別の命令にします」

「え……う？」

千景が怪訝そうな顔をしていると、杏は教卓の中から白い用紙を取り出して、千景に差し出した。

用紙には『卒業証書 三年 郡千景』と書かれている。

「命令は、これを受け取って下さい」

「これって……」

千景は呆然としながらも、その卒業証書を見つめる。

友奈と景夜が微笑んで、

「よく考えたら、ぐんちゃんって三年生だから、本当はもう卒業だしね。卒業証書、私たちが作ったの」

「まあ、今のチ力だったら命令じゃなくても受け取ってくれるって言ったんだけどさ」

同じ教室で授業を受けているため、お互いに殆ど意識しないが、千景は中学三年生。

普通の学校であれば、卒業式を迎えている時期だ。

「といっても、学年が高一になるってだけで、学校もここから変わらな
いけどな」

球子は苦笑気味に言う。

この学校が勇者を一箇所に集めて管理することを目的とした施設である以上、高校生になっても学校が変わることはない。

「だが、形だけでも、こういう行事は行った方がいい」

「ええ、私もそう思います」

若葉とひなたが頷いて言う。

「そうね、こういうイベントがあつてこそよ」

「そうだね、こうやってみんなで過ごすのは楽しいし」

「私もみんなに賛成、行事は大切にしないとね」

歌野と水都に雪花も笑顔で頷いて言う。

学校は変わらないから、意味を感じなかったから、千景自身は『卒業』という行事を忘れていた。

けれど――

「……あ、ありがとう」

千景は少しぎこちない笑顔で卒業証書を受け取った。

その日の夜、景夜はひなたに呼ばれて教室に来ていた。

「景夜君……ごめんなさい、こんな遅くに呼んでしまった」

「大丈夫、まだ十時前だし。で？どうしたんだ？」

時刻は十時前だが、それでも辺りは暗く子供が歩き回る時間ではないのは確かだ。

「実は……つい先日、樹海緊急脱出システムが完成しました」

「樹海緊急脱出システム？」

聞いた事のないシステムの名前に、驚く景夜。

「名前の通り、樹海化の最中でも樹海から脱出することができるシステムです。本来は重傷者が出て来た時の為の緊急措置として開発されました」

「そんな、システムが……」

「景夜君にこのシステムの使い方を教えます……だから」

ひなたの言葉が詰まる、また何か言い辛いことでもあるのだろうか
景夜は思い、少しの間続く言葉を待った。

だが、ひなたの口から出てきた言葉に景夜はより驚いた。

「次の戦いが始まったら、これを使ってすぐに脱出して下さい！」

「……?!?! ひなた、お前何言ってるのか分かってるのか？」

「神樹様から、景夜君宛に神託が来ました。次の戦いで完成型と呼ばれるサソリバーテックスにお腹の所を貫かれて……景夜君は……死にます」

ひなたが言った言葉は事実上の死刑宣告だ。

神樹から来る神託は未来予知そのものだ、外れることはまずない。

だが、景夜は諦めない。

そんな、ことで諦める訳にはいかない。

「ひなた、神託の中で俺の近くに誰かいたか？」

死の宣告を受けたのにも関わらず彼は、ひなたに対してこう返してきた。

「……球子さんと杏さんが居ました、状況から見てもあの二人を庇ったものだと思います」

景夜にはひなたの細かい説明のお陰で分かったことがある。

それは――

「近くにタマと杏がいるのか……そうすれば後は何とかなるな」

「景夜君……」

「心配すんな。予想では完成型に通じるのは友奈の『酒吞童子』と若葉が降ろす予定の『大天狗』、それに加えてチカが宿す予定の『玉藻の前』だったか」

完成型……予想では、今景夜が言った最上級の精霊たちを降ろさないと相手にすらならないと考えられている。

「最後に俺の『織田信長』。前に調べたんだが、第六天魔王としての織田信長は『他化自在天』っていう固有の能力的なものがあるらしい。能力としては人間の望みを叶えたり快樂を与えて、それを自分の快樂とすること」

ひなたは最初、景夜が何を言っているのか分からないと言う顔をしていたが、次第に変わっていく。

「俺の近くに仲間が居る限り、俺が死ぬことはない。アイツらは、俺が死にそうになったら「生きろ！」って言うってくれる奴らだからな」

「……それでも、あなたには……」

「なあ、ひなた。人間が天の神に負けるときってどういう時だと思う？」

「戦える力を持つ者が居なくなつたときでしようか」

ひなたの考え方は間違っていない、だが景夜は違う。

「ひなたの考えは多分正解だ。ただ、俺が思う正解は違う。俺が思う正解は諦めたときだ」

「諦めた……とき……」

「そう！誰もが諦めたとき、本当の意味で俺たちは天の神に負ける。成長を諦めて、抵抗することを諦めて、そして最後は生きることさえも諦める」

哲学の問いに近いものだ、本当の正解などない。

ただ景夜は、自分の考えは間違いなく正解に等しいものだと思っ
ている。

「歴史上に語り継がれる偉人はどんな苦難にも挑戦していたと思う、時に挫折し、時に苦悩し、時に絶望する。もうダメだつて何度も思つた人は大勢いただろうし、そこで諦めてしまった人もいるかもしれない。でも……」

景夜がひなたに向き合い、真剣な眼差しで言う。

「自分を信じ、仲間を信じ、最後まで諦めなかつた人たちが居るお陰で俺たちの今がある！」

ひなたにちゃんと届いただろうか、景夜はそれが心配だった。

「それに、ひなただつて。俺が生きることが諦められないから、このことを伝えたんだろう？」

「そ、それは……」

「……ひなた、信じて待って欲しい。無事に帰ってくるとは言えないが、ちゃんと五体満足で帰ってくるから」

景夜は、ひなたの俯いてしまった顔を手で少し強引に向き合わせた。

「だから、ここで待って欲しい俺たちの帰る場所は丸亀城（こゝ）なんだから」

「……………」

ひなたは何も言わない、だが何かを決心した顔をしていた。

「景夜君……私があなたに戦ってほしくない理由は……これです」

景夜の手を押しつけて顔を近づかせる、景夜は動揺して動けずいた。

そして、唇が重なった。

普通のキスではなく、舌を絡ませてくるような情熱的なキス。

「……………ん……はあ……はあ……」

ひなたの色っぽい声が漏れる。

景夜は突然のことに驚き、脳が蕩けていくような感覚に襲われる。

何とかひなたから離れると、先程とは違いか細く消えるような声で彼女はこう言った。

「私は、あなたのことが好きだから」

そして、ひなたは逃げるようにその場を後にした。

月明かりが照らす静かな教室、そこにただ一人。

景夜は取り残されていた。

第十四話 「運命の分かれ道」

ひなたの告白の件から少し時間が進み、翌日の朝になっても景夜は自分への嫌悪感が抜けずにいた。

自分が好きなのは若葉なのに、ひなたとの一件があつてからどうしても気持ちが揺らいでしまう。

昔から好きだったのに簡単に揺らいでしまう自分の気持ちに、心底反吐が出るような気分だ。

珍しく朝練をサボった景夜に対し、彼の気持ち知ってか知らぬか、誰も部屋に来ることはなかった。

一様、いつも通りの時間に登校して来たものの。

授業には集中できていなかった。

「景夜くん！ちゃんと聞いてる？……この問題を黒板の方に来て解いて」

「は、はい」

最近、普通教科の担当もし始めた紅葉からの指名。

黒板の問題を見ると、そこそこ難しい問題に顔を顰める景夜だが、紅葉の有無を言わせぬ視線に負けてせつせと問題を解いていく。

「スゲーな景夜、あんな難しい問題解いちまうなんて」

「景夜さん、頭いいですからね」

球子と杏が景夜のことを褒めているが、若葉や雪花がそれを否定する。

「いや、景夜は頭が良い訳じゃない。元々努力家なだけで、勉強も私やひなたと出会った当初は並みと言った所だったからな」

「だね、景にゃんからは努力家の気配がビンビンするんだよね」
若葉は昔の記憶から、雪花は第六感に近い直感から、景夜の努力家な面を知っている。

四人がそんな会話をしてる中、ひなたはボーっと景夜のことを眺めていた。

「ひなたさん大丈夫かな？なんかボーっとしてるし」

「ドントウオーリィよみーちゃん、こういうときは若葉か景夜に任せて方が良いわ」

歌野と水都の席はひなたの席からそう遠くないのだが、ひなたの耳には今の会話は聞こえていないらしい。

授業終了のベルが鳴り、お昼休み。

みんなが昼食の為に食堂に出向く中、ひなただけが教室に残っていた。

(昨日、私はここで……)

昨日のことを思い出し、そっと唇に指先を触れさせる。

キスをしたときのことは、ひなた自身良く分かっている。

唇が重なったとき、頭の中で何かが弾けるような感覚がして、ただ無我夢中に自分の気持ちをぶつけた。

それが悪いことだと分かっている、景夜が好きな人も知っている。それでも、伝えずにはいられなかった。

そんな所に、ひなたが来ないことを可笑しく思ったのか、若葉がやって来た。

「ひなたどうした？今日は景夜もお前も少し変な気がするが」

「心配をかけてすいません、私は大丈夫です。ささ、早くみなさんの所

に行きましよう」

若葉の心配をする言葉に罪悪感を抱きながらも、ひなたは何でもな
いように答えた。

少しづつ変化する日常の中で、彼ら自身も変わっていく。
良い意味でも悪い意味でも。

午後は訓練で、景夜と若葉は道場にて刀と槍を交えていた。
訓練の時だけでも集中しようとした景夜だが、上手くないかず。
その日は負け続きだった。

「景夜？今日は調子が悪いのか？霊核魂になってから一度も勝てな
かったのに、今日だけで既に五本は私が取っているぞ？」

「何でもない、心配掛けてワリイな。……少し水被って頭冷やして
る」

若葉の心配する言葉が胸に響く、罪悪感で押し潰れそうな心を何と
か隠し、景夜は逃げるように道場の外にある水道に行く。

何度か頭に水を浴びせ、道場に戻ろうとしたとき。

紅葉が物凄い笑顔で現れた。

紅葉の深紅色の髪が太陽の光で反射されて、美しくも恐ろしい雰
囲気を醸し出している。

「か・げ・や・く・くん？あなた、今日はあんまり集中できてないわね」

「し、師匠!?!……それは……その……」

言葉が詰まった景夜を紅葉は吟味するように眺める。

そして、

「何か悩み事でもあるの？だったら相談しなさい、あなたには良い仲間がいるでしょう？」

「それは……そうなのですが……」

「他の子たちに言い辛いんなら、私が聞いてあげる。それで、何があったの？」

景夜は紅葉の優しさにうるつときたが、持ちこたえて話す。

「例え話ですよ。師匠にもし好きな人がいて、それで昔からの親友の異性に告白されたとします。その時に師匠はどっちを選びますか？昔から好きだった人か、昔から隣に居た人」

「そうね、やっぱり好きな人かしら。親友からの告白は断るでしょうね、まあ出来る限りフォローはするつもりだけど」

紅葉のキツパリとした物言いに驚きながらも、景夜は改めて自分の師を尊敬した。

「凄いですね、師匠は……俺はてんでダメみたいです」

「へえ、もしかしてひなたちゃんにでも告白された？」

数秒後、彼は自分の失言に気付き、猛烈に恥ずかしくなり冷やしたばかりの頭が、また熱くなっているのを感じる。

「……やらかした」

「アハハ、景夜くんはホントに嘘が下手だね」

少しからかわれた後、紅葉に昨日の件を話した。

「……そんなことが、道理でひなたちゃんも今日は少しボーっとしてた訳だ」

紅葉は納得したような顔つきで手を叩く。

そんな紅葉を見ながら、景夜が申し訳なきように呟いた。

「師匠、俺どうしたらいいんでしょう。若葉が好きという気持ちはここにあって、でもひなたが泣いてしまう姿は見たくなくて。……俺の前では泣かないかもしれませんが、それでも俺が振ってしまったら、きっと何処かで泣く。誰にも見つからないような場所で」

「だろうね、あの子は強いから。……君を苦しめない為に、そうするでしょうね」

「それに……怖いんです。もしもひなたを振った後、そのことでアイツとの関係が終わってしまうかもしれない！」

すれ違い、よくあることだ。

それまで仲の良かった友達でも、たった一回のすれ違いで関係が終わってしまうかもしれない。

その後、ようやくすれ違いに気付いて後悔した時には、もう手遅れなのだ。

「景夜くんは失うことが怖いのね？だから、悩んでるんでしょう」

景夜が無言で頷く、その表情はいつもの彼のものではなく、お化けを恐れる子供のそれだ。

自分が死ぬのは怖くない、何時か終わる命だと分かっている。

景夜が本当に恐れるものは「喪失」と「無力」、友達を失うのが怖い、家族を失うのが怖い、仲間を失うのが怖い、無力故に何かを失うのが怖い。

普段は見せない、彼の弱さ。

いつもの景夜は、ゆうなれば勇者・柊景夜の仮面を被ってるに過ぎ

ない。

本当の彼は、どこにでもいる少年だ。

変わった生い立ちがあるが、いつも笑顔でいつも楽しそうで、見ているこっちが幸せになれるような、そんな才能がある子だった。

彼が変わった理由は、大切なものを失いたくないから、無力な自分でいたくないから。

だから、鍛えた。

紅葉と言う師匠を作り、自分を追い込み追い込んで。

誰からも、どんな敵からも、大切なものを奪わせない為に、もう何も失わない為に。

今、紅葉の目の前に居るのは。

勇者としての終景夜ではなく、ただの少年としての終景夜。

千景に散々言っておきながら、景夜は『勇者』であろうとした。それが、彼の本質。

典型的なお人好しで、大切なものに関してには優柔不断。

紅葉は少し悲しく思う、自分より年下の彼らに重荷を背負わせていることに。

(私も、あれが完成すれば……)

「取り敢えず！景夜くんの良いアドバイスを上げるわ！」

「ほ、本当ですか？是非お願いします、師匠！」

あまりの嬉しさに目を輝かせる景夜、相当悩んでいたのだろう。

「そんなに大切なら、どっちも取りなさい！今の関係を失いたくないのでしょうか？あなた前に言ったらいいじゃない、人間の手の長さは短い。なら、どっちも取るしかないわ」

「どっちもって、それって二又とかになるんじゃない？」

「良いのよ別に、昔は一夫多妻制とかあったでしょう？それみたいな感じよ」

紅葉は冗談半分本気半分のつもりが、景夜は真剣に考え始める。そして、唐突にいつもの調子に戻り笑顔で紅葉に感謝する。

「ありがとうございますございます師匠！お陰で色々吹っ飛びました、二人や他のみんなに何て言われるか分かりませんがやるだけやってみます！」

「そ、そっか……頑張つてね……」

「はいー！」

少年の笑顔が眩し過ぎて、紅葉は冗談半分だと言うことが出来なかった。

その後、景夜はすぐに道場に戻っていったが、紅葉は水道に残り一人眩いた。

「……若葉ちゃんが何とかしてくれるか！」

この教師、何ともダメな人である。

その日の夜。

時刻は、昨日と同じ十時前。

教室には景夜と若葉とひなた。

景夜は窓側に立ち、若葉とひなたが廊下側に立って向かい合っている。

「ワリいな、遅くに呼んで」

「別に構わん、何か話があるのだろうか？」

「……………」

若葉は言葉を返したが、ひなたは無言でいる。

そこで景夜は、昨日起こったことを全て若葉に話した。

「……そんなことがあったとわ」

「それを踏まえて話がある。……俺は若葉のことが好きだ」

一瞬、嬉しそうな顔をしたが、その顔はすぐに怒りに染まっていく。

「景夜！貴様、ひなたが隣に居ることを分かって言っているのか!!」

若葉の怒りは最もだ。

何せ、今の言葉は捉え方によってはひなたの告白を断つたも同義だし、それに加えて隣にいる者に告白するなど屑の所業だ。

「若葉ちゃん！景夜君を責めるのは止めて下さい！私が悪いんです、景夜君が若葉ちゃんのことを好きなのは分かっていたのに！あんな混乱させるようなことを言った私が！」

「何を言うひなた！今のは完全に景夜が悪いだろう！」

完全に混沌カオスな空間になりつつあるが、景夜が言いたいことには続きがある。

「二人とも話を聞いてくれ！俺はひなたの告白を断つた訳じゃない、ていうか断れるか！」

「な、なら何なんだ！今の言い方ではそう聞こえてもしようがないじゃないか！」

正論が返ってくるが、それをスルーし話を進める。

「結局、俺は何度考えてもひなたの告白を断ることが出来なかった。関係が壊れるのが嫌で、お前が泣いてる姿を見るのが嫌で。……俺は

意気地なしだ……だから……」

「だから……?」

二人が景夜の言葉を待つ。

「二人とも選んでいいか……?」

「二人とも?どういうことだ?」

「もしかして、私と若葉ちゃんの両方と付き合おうと?」

「ひなたの言う通りだ……クズみたいなこと言ってるのは分かってるし、調子のいいことを言ってるのも分かってる。……でも、俺にはその位が限界だ」

若葉とひなたは顔を合わせて二言三言話し、景夜に向き直る。

「私なりの解釈で行くが、私たちがお前の妻になり、お前が私たちの夫になる。こんなものでいいのか?昔の一夫多妻制のようなものだな」

「そうですね、少し違いますが概ね同じです」

「ふ、二人とも……本当に良いのか?」

景夜がそう言うと、二人は呆れたように笑ってこう言った。

「仕方があるまい、それに私もひなたが泣いてる姿は見たくないしな」

「私も、大好きな景夜君と若葉ちゃんと一緒にいられるならそれで構いません」

「ありがとう!若葉にひなた」

これで三人にわだかまりが出来ることはなくなる。

後は、何時他のみんなに報告するかだが。

「そんなことはどうでもいい」、と景夜は思っていた。

色々なことがスツキリしたので、帰ろうと言おうとした瞬間。

若葉に口を塞がれた、勿論唇で。

「ん〜！ん〜！〜！」

景夜の声にならない声が出る中、キスは続き。

最終的にひなたと同じで舌まで絡めたキスになり、景夜の理性が取れかけた。

「私は自分の想いを口にしていなかったからな。昔から口にするより行動が得意だからな、行動で示した」

「お、おう。お前の気持ちは伝わった」

「お前への想いをに気付いたのは、お前が長く眠っていた期間だ。あの時の私には、お前が居ないだけで少し日常が味気なく感じた。胸にポツカリ穴が開くという感情をしっかりと味わった」

熱烈に想いを打ち明ける若葉に、景夜とひなたまでもが赤くなってしまう。

「だからな……絶対に死ぬんじゃないぞ」

「分かってる、死なないさ。それに、死ねない理由が多過ぎるからな」
ふざけるように笑って言う景夜に、若葉とひなたも釣られて笑う。

今日ここに、昔までの三人とは違う関係が出来た。

三角関係のようでそうじゃない、不思議な三人の関係。

周りから見たら歪に見えるかもしれないが、これでいい。

これが、三人にとっての最高の形。
互いに想い合い、互いに惹かれ合う。
三人だけの秘密が新しく出来た。

第十五話 「三人と仲間と思い」

幼馴染三人の秘密の関係が始まってから数日。

今日は土曜日で、訓練やら修行はない。

何でも、紅葉が大社本部に行っているらしい。

最近はあまり休みがなかったので、「今日は休みでいいよ」と紅葉から言われ景夜は絶賛ゲーム中だ。

千景とではなく紅葉とやっている。

テーブルをずらして、テレビの前に座布団を置いて二人が座る。

後ろのベットでは、ひなたがゲームをする二人を見守っている。

「紅葉！後ろ後ろ、殺人鬼来てるから！」

「むっ、しまった一発喰らってしまった。景夜私が直していた発電機を直しておいてくれ、私がこの殺人鬼を引っ張ってみる」

「了解了解」

d b dをやっているのだろうか、景夜と紅葉以外の生存者は既に天に召されている。

その後は、二人のチームワークが炸裂してなんとか無事脱出。

「さあさあ、二人ともゲームは午前までです。午後は外に出かける約束でしょう？」

「……洋服屋には別に行かなくてもいいのだが」

「りょーかい、紅葉諦めタマへ」

自分が着せ替え人形にされるのが分かっているのか、紅葉が嫌そうな顔で訴えているが景夜の言葉によりその訴えは却下されてしまう。

景夜は着替えて部屋を出る、外には若葉とひなたが先に来ていた。
「来たな、では行くか」

「そうですね」

「いや、もう少し待てよ」

少し遅れ気味だった景夜を尻目に先を歩く若葉とひなた。

若葉はいつもながらボーイッシュな服装をしている、それに対してひなたは年頃の女の子代表のような服装でいるため、景夜は少し錯覚する。

（あれ？何か二人が並んできると普通にカップルに見えるんだが……深く考えないようにしよう）

丁度正午ごろ、ショッピングモール内は休日ということもあってか賑わっている。

「凄い人混みですね……」

「そうだな、休日に加えてお昼時だし」

「はぐれないようにしなくては……」

二人が景夜の顔をジッと見つめる。

最初は理解できていなかった景夜だが、ようやく分かったのか二人の一步前に出て両手を差し出す。

「エスコートしますよ」

「ええ、お願いします♪」

「……頼む」

ひなたは嬉しそうな顔をして手を掴む、若葉は少し頬を赤くして手

を掴む。

(何だかんだ喜んでくれてるみたいだし良いか……)

景夜を真ん中に、右にひなたで左に若葉。

三人手を繋いで歩くのは何時ぶりだろうか、ふとそんなことを考えた若葉だったが、今はそんなことどうでも良いと思えるくらいには幸せだった。

最初は三階にあるフードコートで食事。

フードコートと言えばバリエーションが多いというイメージがあると思うが、このショッピングモールは店の三分の一がうどん屋というものになっている。

ちよつとやり過ぎなんじゃないかと思つた景夜だが、二人が楽しそうにうどん屋を選んでるので深く考えるのを止めた。

「景夜、ここでいいか？」

「別にいいぞ？俺はざるうどんも大に野菜かき揚げで」

「分かりました、若葉ちゃんはどうしますか？」

「きつねうどんだな」

ひなたが注文をしに行った直後、若葉が景夜に対して耳打ちをする。

(景夜、何か変じゃないか?)

(俺もそう思っていた所だ……何でこんなに人が少ないんだ)

(分からん、だが用心した方が善いのは確かだな)

ひなたが帰って来た所で話を切り上げる。

景夜と若葉が言ったように、このフードコートには人が殆どいない。

時刻はまだ一二時一〇分、普通ならそれ相応に混んでるはずなの

だ。

「幾ら先程まで居た一階にも食事処があるとはいえ、明らかに可笑しい。」

「少し不穏な空気を感じながらも、ひなたに悟られないようにいつも通りを装う。」

「それにしても、空いていて良かったですね！」

「まあ、下にも食事処はあるし。そこが混んでいるのか、それとも映画館の方に行っているんじゃないか？」

「そうかもしれんな」

「このショッピングモールは広い、レイ？タウンまではいかないがイン程の広さがあり施設も充実している。」

「その為か、今日のような休日は家族や学生で賑わっている。」

「だからこそ、二人は気にしている。」

「何かあったら最優先に守るのはひなた、どちらかが言わなくとも分かっている。」

「だが、二人が考えるような危険な事件は起こらず、普通に食事をしていた。」

「うむ、やはりうどんはいい。このコシがたまらん」

「ですね、景夜君はどうですか」

「美味しいよ。言っとくけど、別に俺はうどんが嫌いな訳じゃない。パスタの方が好きだけだ」

「三人で特に中身があるわけでもない雑談に花を咲かせつつ、食事を

楽しんだ。

その後は、若葉を着せ替え人形にして遊んだり。

逆に、ひなたのことを若葉と景夜が着せ替えて褒め殺したりと。

色々なことがあり、今は映画館で映画鑑賞中。

東野？吾さん作の「マスカレード・ホテル」を見ている。

景夜が杏に勧められ読んだ作品で、面白かったこともあり二人に見てもらいたくてこれが決まった。

ひなたと若葉は食い入るように画面から目を離さない、見入っていることが嬉しくて景夜は一人微笑んでいた。

映画も見終わり、映画館の外に出る。

人の流れは早く、すぐさま次の上映を見る人たちが並んでいく。

景夜は余韻に浸っている二人の手を引き近くのソファに腰を下ろさせる。

「面白かっただろ？」

「とても！とーっても面白かったです！ね、若葉ちゃん」

「ひなたの言う通りだ、お前の意見を聞いて正解だったな」

そのまま映画の話が続けていると、後ろから声を掛けられる。

「景屋さん達も見に来てたんですね！感激です！」

「いや〜面白かったにや〜」

そこに居たのは、杏と雪花。

雪花も読書家なので、大方杏に動かされてここまで来たのだろう。

「タマは一緒じゃないんだな、珍しい」

「はい、流石に合わないものに付き合わせるのは可哀そうかなと思ひまして。その代わりに雪花さんに来てもらいました!」

「そうそう。なんか、いきなり私の部屋に入つて来るやいなや映画見に行きましよう!とか言われたからね、流石にビックリしたよ」
そえでも面白かったのだろう、苦笑しつつも嬉しそうだ。

景夜は仲間に伝えなくてはいけないことを思い出して、至急全員に連絡を入れるようお願いした。

「二人ともごめん、今から少し付き合つてくれ」

「?」

二人とも良く分かつていないが、そこはフィーリングでカバーしすぐに動き出した。

その様子を見守る者が一人、

「……へえ、完成型に勝つつもりでいるんだ。まあいいや、俺が出るのはまだ先だしね」

天使が一人、勇者達を見ていた。

みんなが集まったのは大体十八時頃、歌野は鍬を持ちながら走つて来た。

「それでエマーゼンシーだつて言われたから走つて来たけど、何かあったの?」

「そうだよ、景夜さん。緊急の呼び出しだからビックリしたよ」

「……景夜君らしくないわね、どういう内容なの？」

「ぐんちゃんと同じ。何があったか聞いても良い？」

「そうだと景夜、タマたちには仲間として聞く義務がある」

それぞれの反応を伺いつつも、景夜はひなたの神託の話をした。

場が凍り付いて、誰も声を上げようとしなない。

不味いと思つた景夜が、『信長』の話をして何とかなることを証明する。

「――、これで分かったか。杏とタマ、お前たち二人は何かあつたらこれを使って離脱しろ」

景夜が見せたのは、『樹海緊急脱出システム』と書かれたスマホの画面だ。

「この画面になったら、自分と相手の名前が付いたマークをタップする。そうすればすぐに樹海から離脱出来る」

最初から、一個一個丁寧に順序を説明していく。

「お前らを死なせるつもりはないし、守りたいと思つてる。でも、もしもの場合は俺を置いてでも逃げろ。……なーに、大丈夫だよ。お前らと違つて悪運は強い方なんだ」

景夜が勝気な笑顔で言い切るが、球子に杏は引く姿勢を見せない。

「何言つてんだ！このバカゲヤ、タマがそんなすぐ仲間を見捨てる奴に見えるのか？お前がどんな手を使つてもタマは残る、お前たちと戦う」

「私もタマっち先輩と同じです。景夜さん、頼りないかもしれません

第十六話 「完成型と絶技と夜」

景夜が仲間たちに神託のことを告げてから一週間弱、樹海化が起こることはなく平穩に過ごしていた。

小春日和と言つてもいい程の穏やかな天気と気温。

時刻はお昼過ぎ、ご飯を食べて眠くなりがちな時間帯。

勇者たちの耳に聞きなれた警報音が鳴る。

「樹海化か……」

「どうした景夜？ 怯えたような顔を見せるなんてお前らしくないぞ？」

景夜の顔はあまりいい物とは言えない、何か底知れぬ不安を感じてしまう。

若葉はそれをそつと拭き取るように声を掛けた。

「……そんな変な顔してたか？」

「ああ」

「大丈夫、なせば大抵なんとかなる。気合い入れていこうー！」

景夜の掛け声に合わせて、周りにいた勇者たちも声を上げる。

千景の一件で分かったことだが、精霊には穢れを体内に貯める副作用があるらしい。

最近になってようやく発見されたその事実、勇者たちに知らされた。

今回は杏の指示により、まだ精霊を使用したことのない杏・歌野・雪花が精霊を使う。

景夜は例外的に精霊の使用を許された上で今回の戦いに挑む。

この作戦が吉と出るか凶と出るか、答えは誰も知らない。

景夜は今朝、予知夢のような悪夢を見た。

その悪夢の中で、彼は球子と杏を救うことが出来ず。

仲間が目の前で殺されてしまうとと言う光景をただ見せつけられる、そんな救いのない夢だった。

だから、若葉に不調を悟られてしまったのだ。

今回の侵攻を上手く回避できれば、全員が生存したままお役目を終えられる確率はかなり上がる。

そして――

「アンちゃんのお陰で殆ど敵居なくなったね！」

「だにや、でも次回からはその寒〜い精霊使う時は一言掛けてね？」

「す、すいません」

杏の精霊は『雪女郎』、分かり易くすると雪女。

その能力は「冷氣」、先程はその冷氣で敵の殆どを倒し壊滅にまで追い込んだ。

欠点としては、その「冷氣」による吹雪の所為で視界が奪われてしまう点だ。

これだけは何とかしていかないといけない。
こんなことを戦闘中に思う景夜だったが、すぐさま思考を切り替える。

未だ現れていない完成型サソリバーテックス、それに向けて警戒の度合いを引き上げる。

だが、そんな警戒も無駄だと言わんばかりに絶望が空から落ちてくる。
バーテックス

景夜は一瞬だけ視界に入った光でその光が、前に見た天使が使っていた光輝く扉のものだと確信した。

「来るぞ!!!!」

景夜の声と共に現れた完成型は、精霊の使用により疲れている杏を狙って尻尾の毒針を走らせる。

一瞬の攻防、球子は杏を守るために前に出る。

杏はサソリ型の毒針の部分を壊そうと矢を撃つ構に入った。

そして景夜は……その二人を、毒針の進行方向から逸らす為に二人を突き飛ばす。

その場にいた全員の中で動けたのはこの三人だけ、他の者たちは位置が離れていて助けに動くことなど出来ない。

敵も残っているため、安易に背を向けて走ることも出来ず。

少年の胸に、一本の毒針が突き刺さった。

そして、用は済んだと言わんばかりに突き刺さった景夜の身体を投げ捨てる。

「景夜!」

若葉が叫んだ。

「カゲヤ君!」

友奈が叫んだ。

「景夜君!」

千景が叫んだ。

「景夜!」

歌野が叫んだ。

「景にやん！」
雪花が叫んだ。

「景夜！」
球子が叫んだ。

「景夜さん！」
杏が叫んだ。

全員の叫びが樹海の中に響く中、少年の脳内ではこれまでの人生がパノラマショーのように映し出されていた。

走馬燈、この方が正しいだろう。
みんなの声は聞こえている、だが体を起こして反応することが出来ない。

走馬燈が終わった後、景夜の脳に浮かんだ言葉は「死」だ。
痛いでも苦しいでもない、自分の身体が自分のものではなくなっていくかのような感覚。

痛覚も既に機能していないのだろう、痛みさえ感じることが出来ない。
い。

（死ぬのか……俺……？）
脳に浮かんだ言葉が反芻される、「死」逃れることの出来ない人の終着点。

（友達を置いて？）
浮かぶのは昔の友たちの姿、懐かしい記憶。

（家族を置いて？）
浮かぶのは今ここに居る仲間と、現実の世界で帰りを待っている母。

自分に力の使い方や人生の歩み方を教えてくれた大切な人。

(死んで師匠の教えを無駄にするのか?)

自分に技を授け、心の在り方や仲間を守る力を教えてくれた大切な恩師。

(死んで愛する人をまた泣かせるのか?)

若葉にひなた、自分の事を好きだと言ってくれた。

優柔不断な自分でも……それでも傍にいてくれる愛する人。

(こんなところで死ぬ?ここまで頑張って、ここまで足掻いたのに……)

必死に努力した、必死に足掻いた。

もう何も大切なものを失いたくなくて。

(嫌だ!嫌だ嫌だ!死にたくない!友達を置いて、家族を置いて、死んで師匠の教えを無駄にして、死んで愛する人を泣かせて……)

諦めない、諦められない。

死にかけの身体でも、心が折れそうでも。

立ち上がる、武器を取る。

だってそれが勇者だから……

「し……んで……たま……る……か」

毒の所為で体は麻痺して上手く動かないし、胸には反対側の景色が見える程の大穴が開いている。

「景夜!死んだら許さないからな!絶対生きろ」

球子が叫ぶ。

「そうです、生きて下さい!死んじゃダメです!」

杏が叫ぶ。

「そうだよ景にゃん！こんなところで死んだら全然恩返せないじゃん！」

雪花が叫ぶ。

「そうよ景夜！死ぬデステニイーなんてひっくり返しなさい！」

歌野が叫ぶ。

「生きて帰って、みんなでお花見しようよ！」

友奈が叫ぶ。

「新しいゲーム買ったの、パーティゲームよ。まだ死ぬなんて許さないから！」

千景が叫ぶ。

「景夜、負けるな！お前は、勇者なんだろう！」

若葉が叫ぶ。

みんなの思いが聞こえた、みんなの願いが聞こえた。今なら、

「来い！……織田信長！」

文字通り死力を尽くして叫んだ、その瞬間景夜を禍々しい炎が包み込む。

炎が消えた後に出てきたのは、頭部以外の体全体に鎧を身に着けその上から羽織を着こんだ景夜の姿だった。

羽織には「天下統一」の一言。

そして、胸にあった傷は塞がっている。

「これが……信長の力か。身体中から力が漲ってくる……」
手を握ったり開いたりして力の変化を確かめる。

トロールとは違う、圧倒的なまでの格の違い。

そして、景夜は次の獲物を狙わんとするバーテックスに声を掛ける。

「お前らに声が聞こえてるかは分かんねえが、聞け」

「俺は負けない、いや俺たちは負けない。人間は諦めたりしない、お前たちに奪われた世界を必ず取り戻す」

景夜の言葉に反応しているのか、サソリ型の動きが止まる。

「その為に、死ぬわけにはいかない。終景夜の生き様は、明日を生きる人に希望を！」

自分の想いを吐き出していく。

「今から見せてやる、本物の希望ってやつを！」

景夜が槍を構えて、言葉を紡ぎ始める。

「絶技開放」

絶技、一日一度しか使えないとっておき。

「この槍は最強に非ず、持つ者に最高を与える」

これは解放の言葉。

「故にこの一撃は最強ではなく最高の一撃と知れ」
神器の真価を發揮させる、魔法の言葉。

「I r a t h e s u p p r e m e b r e a k
憤怒による、最高の一撃！」

サソリ型に向けて、槍を放つ。

サソリ型は、防御の姿勢を取るが甘い。

そんな防御では、この一撃は受けられない。

「そんな防御に！負けるかー！！！！」

景夜の声に答えるように天逆鉾が勢いを増し、サソリ型に命中する。

サソリ型は耐えることなど出来ない、何故ならあの穂先には日本国土の総質量を載せているのだから。

命中した瞬間、サソリ型は呆気なく消滅する。

あれほど自分を追い込んだ敵が、こんなにも呆気なくやられるのは爽快だ。

景夜は投げた天逆鉾の回収がてらに、周りにいた星屑^{ザコ}を倒している。

景夜の行為にやっと我に返った勇者たちは、星屑の掃討を再開する。

「今だ、流れはこちらにある。畳みかけるぞ！」

若葉の言葉と共に再開された星屑の掃討は、数分で片が付く。

今回も無事にお役目を終えた。

周りが光に包まれ、樹海化が終わったと思った瞬間。

景夜は何故か見知らぬ空間に居た。

そこにはポツリと椅子とテーブルが置かれただけの真っ白な空間。

取りあえず椅子に座りながら数分待つと、そこに一人の少年が現れた。

容姿は景夜に似ているが髪の色は焦げ茶色で、目付きが少し……いや大分悪い。

「よう、相棒。これからよろしくさせてもらおうぜ」

「お前は……信長なのか？」

「おお、よく分かったな！ついでに言うと、ここは深層心理……まあ分かり易くすると精神世界みたいなものだ」

当然のように言い放つ信長に頭を痛めそうになる景夜だが、自分の父もこういうことをしていたので何も言うことが出来ない。

「……で？俺をここに呼んだ用は何なんだ？」

景夜は早く会話を終わらせたいので話を急かす。

「悪い悪い……早速本題なんだがな。簡潔に言うとお前の魂と俺の霊核が融和してしまった」

「融和？溶け合っただってことか？」

「そういうこと、本当ならそんなこと起きないんだが。如何せんお前は霊核魂になって魂の器が広がった、これだけならいいことなんだが」

「何が問題なんだ？」

「大きくなった魂の器に、俺の霊核にスッポリ収まっちゃってな。何とか抜け出そうとしたんだが、相性が良すぎてそのまま融和しちゃった」

何を言っているのか、景夜からしたらサッパリ分からないが。

少し不味い問題に発展してしまっただけらしい。

「お前も運が良かったんだ、本当なら俺の霊核がお前の魂を取り込む所だったのに押し返されちゃったからな」

「それで、融和したと……。何か不都合があるのか？」

「そうだな、現実世界でもお前との意思疎通が出来たり。後、これが面倒だ。死後、お前たち勇者が神樹に吸収されるってのは聞いたか？」

「ああ、一样」

景夜たちは死後、神樹の中で英霊として過ごしていくこととなる。このことは、案外勇者になった頃には聞いていた。

「お前と俺は、半ばくっ付いてしまってる状態だから、もしかしたら精霊として俺が外に呼ばれたときにお前もくっ付いて行くことになるかもしれない」

「そんなことか、なら問題ないよ。未来のやつ力になれるなら大歓迎だ、俺の生き様も果たせそうだし。……それに……」

「戦いを俺たちの時代で終わらせれば良いだけの話だ」

そう言つて、景夜は椅子から腰を上げて立ち上がる。

「そうか……まあ頑張れよ。応援はしてやるし、力も貸してやる。俺を存分に暴れさせてくれよ相棒！」

信長がそう言うと、一面真っ白だった世界に扉が出来る。

景夜はそこに向かって歩き出し、最後に言葉を交わす。

「これから、よろしく！」

長かった一日が終わった夜。

景夜の部屋には寝間着姿の若葉とひなたが居た。

「なあ、流石に三人は狭いと思うんだが？」

景夜の部屋に置いてあるのはベッドで、しかもシングルサイズだ。とてもじゃないが、三人が寝ていられるスペースは無い。

「ご安心を！そんなこともあるかと、ちゃんと大きい布団を持って来ましたから！」

「中々運ぶのに苦労したんだぞ？途中で友奈と千景に出会った時はヒヤヒヤした」

そういう若葉も、若干楽しそうなを見ると景夜も断りずらい雰囲気が出てくる。

「でも、流石に布団一組じゃ……なにこれ大きい?！」

大きいと言ってもそこまでだろうと思っていた景夜だったが、予想を覆すかのように優に四人は寝れそうな大きさの布団が、ベッドの置いてあった場所に敷かれていた。

「邪魔になってしまったので、ベッドはどかしてしまいました♪」

笑顔で言い放つひなた、運が良いのか悪いのか。

景夜は年頃の男の子らしいことは全くしていない。

……流石にそれは嘘だが、パソコンの方で済ませていたりするので履歴漁られていなければどうと言うことはない。

(大丈夫だ、流石にひなたと若葉でも俺のパソコンのパスワードは解けないだろう……多分)

「そういえば……お前のパソコンの履歴を見させてもらった」

「はっ?!?!? いや、どうやってパスワードを！」

「景夜君、不用心なのはいけませんね。自分の名前に私や若葉ちゃ

んの誕生日を足しただけのものなんて、生温いですよ？」
ひなたの背後に修羅が見えた、若葉も怒っているのか青筋が浮かんでいる。

「あんなもの見なくても良いように、私たちが満たしてあげますから」

そして、この一言で今日寝れないことを悟った。

第十七話 「悪意と催眠とカイン」

夏真つ盛りの六月某日、千景により呼び出された勇者一同は丸亀城の食堂に向かっていた。

「千景に飯に誘われるなんて、明日は雪でも降るんじゃないか？」

「もう、そう言うこと言わないのタマつち先輩」

「あながち否定できないのが、友人として辛い所だな」

暴走した時の一件からみんなと想像以上に打ち解けている千景だが、まだまだ友奈や景夜以外を食事に誘うのは難しいらしく未だに出来ていない。

今回球子がこんなことを言っているのも、その所為だろう。

「だが良い傾向じゃないか、千景がこうやって食事に誘ってくれるのは」

「話があるとも言ってましたが……」

「何をトークキングするのかしら？」

「私もぐんちゃんから特に何も聞いてないんだよね」

友奈も聞いてないことから、何か緊急の話なのかもしれない。みんなもそれが分かっているのかあまり明るい雰囲気ではない。そんな空気を変えたのは水都だった。

「も、もしかしたら！本当にみんなで食事がしたかったただけかもしれない。話って言うのはきつとついでみたいなものですよ」

「だね、話つて言うのはもしかしたら恋バナだったり？」

雪花の茶化しも入り、少しいつも通りの雰囲気を取り戻して食堂に向かつて歩く。

食堂には千景が先に居て、ノートパソコンを開いて座っていた。

景夜は千景の様子に少しばかり違和感を感じいの一番に声を掛ける。

「チカー、来たぞ」

「……いきなり呼んでごめんなさい、どうしても見せたいものがあつて」

景夜はみんなに目線で席に着くように促し、自分も席に座る。

みんなが席に着いたのを見計らつて、千景は開いていたパソコンの画面をみんなに見えるように向ける。

そこにあつたのは……

「これは……」

「酷いな……」

勇者への誹謗中傷だった。

匿名なのを良い事に、景夜たち勇者の悪い部分を叩き、良い部分はあることないことで事実を捻じ曲げてそれを叩く。

勇者は戦闘の際、奮闘しているがいつも完璧に守れている訳じゃない。

今の所死者は出ていないが、負傷者は度々出てしまっている。

それを聞いた者は『使えない』『税金泥棒』『勇者はグズばつかで顔が良いだけ』『あんな奴らを選んだ神様は可笑しい』など、勇者だけだ

なく自分達を守護してくれている神樹にまでこう言う始末だ。

他にも、大社に関する誹謗中傷も絶えず書かれている。

大社に対して『北海道や諏訪から来た移民問題をどうにかしろ』やら『子供を勇者として祭り上げている頭の狂った集団』など。

あまり気性が荒くない杏でさえ、怒りの表情がしつかりと見て取れる。

「あななたちは、これを見てどう思う」

千景の言葉に、誰もが声を揃えて何かを言おうとした。

それを感じ取った景夜は先程と同じく、一番最初に口を開いた。

「何とも思わない。俺たちは自分が守りたいものの為に勇者をやつてる、他者評価に意識を流される行為は意味がない。そうだろ？」

景夜の言葉で我に戻ったみんなは笑顔になり、何事もなかったかのように食事を取りに行つた。

「やるじゃない、流石は私の弟子ね」

「流石に何とも思わなかった訳じゃないですよ。大社の人たちを馬鹿にされるのは頭にきますし、みんなに酷いこと言われるのも嫌です。

……それでも、俺は勇者ですから」

紅葉との会話を切り上げ、景夜もみんなと一緒に食事を取りに行く。

「……あなたの思惑通りには行かなかつたみたいね？」

「良く気付いたね?……まあ、今回は軽めのジャブみたいなものだからね。このぐらい乗り越えて乗貰わなきゃ困るよ」

天使がそう言つて姿を消す、後には綺麗な白い羽が一枚残された。

その日の午後、世界を塗り替える警報は唐突に鳴りだした。

「お役目開始だな……今回もサクツと終わらして直ぐ帰ろう」

「だな、今回は敵が多そうだからちよつと面倒くさいけどタマに任せ
タマへー！」

「そうね、早く終わらせて畑の収穫をエンディングに持って行かない
と」

「みんな気合入ってるねえ、私も頑張らないとにや〜」

それぞれが勇者に変身し敵を見据える。

今回は新しく陣形を用意してきたので、その初の試し運用だ。

現実世界の方では練習したが、本番で上手くいくとは限らない。
その為には、頼れる指揮官である杏の指揮が必要だ。

「杏、指揮官として指示を……杏?」

景夜が杏に声を掛ける、だが杏は何の反応も示さず突然クロスボウ
から矢を放った。

「うおっ?!いい、いきなりなんだよ、俺なんかした?!………と言うかお
前、本当に杏が?」

至近距離だったのにも関わらず景夜は難なく躲す、だが今度は後ろ
から金属と金属が擦れるような音が響いた。

「どうしたんだよ若葉!?!斬りかかってくるなんて」

「……………」

若葉は何も言わずただただ球子に襲い掛かる。

しかし、これだけに収まるはずもなくまた違う方向でも戦いの音が響く。

「くっ！高嶋さん……正気じゃないみたいね」

友奈も千景に向かって右の拳を叩きこんでいた。

千景もつつさのことに焦ったが、戦闘で得た経験値はそれ相応にあり何とか対処できている。

「ホワイ！友奈さんに杏さん、若葉までいったい何が起こってるの?!」

「こつちが聞きたいよ……仕方ないかな、景にやん！こつちは私と歌野でなんとかするから、そつちは自力でなんとかしてね！」

雪花の発言は聞く人が聞けば、仲間を見捨てている様な発言だが、彼らの間では信用されてるという証なのだ。

「了解、そつちは頼んだぞ雪花に歌野」

「オツケー、任せといて」

「ザッツオールライ！農業王に不可能はないわ！」

景夜は二人に敵を任せ、自分たちは若葉たちを止めることに専念する。

この作戦が後に吉と出たのは言うまでもない。

一度相手を交換し、景夜が若葉、球子が杏、千景が友奈。

このような組み合わせで、戦いが行われていた。

実際には戦いと言うものではなく、景夜たちが耐えて若葉たちを正気に戻す為に防戦を強いられていた。

「若葉！正気に戻れ、こんな催眠術みたいなもんで操られるお前じゃないだろう！」

「……………」
景夜の説得の声は届かず、若葉から帰ってくるのは刀の一撃だけ。浮いた三本の穂先を使い若葉の行動を制限しているが、焼け石に水であり役に立っていない。

自分に迫ってくる斬撃をひたすら受け流し、反撃の機会を見る。千景や球子も機を見計らっているのか、攻撃はせず最小限の動きで受け流すだけ。

時眼が経つにつれ、景夜は段々と違和感を覚え始めた。

(…………首謀者の目的は何だ?…………もしかしたら…………)
景夜の違和感是最悪の未来を完璧に的中させた。

大地を引き裂くような壮絶な爆発音が、樹海に轟く。樹海の根が揺れ、若葉たちの攻撃も一旦止まる。そして、景夜の目の前にボロボロの勇者服を着た雪花と歌野が落ちて来た。

なんとか二人を抱きかかえる、体のあちこちから血は出ているが致死のレベルには達していない。

だが、二人とも気を失っており継戦は不可能と見るべきだろう。

「…………チカ!今すぐ『玉藻の前』使って若葉たちの催眠状態を解け、出ななきゃお終いだ!」

「分かったわ、…………来なさい『玉藻の前』!」

千景の体を闇が覆う。数瞬もしない内に闇は晴れ、そこから出てきたのは妖艶な美女。

暗い紅を基調とした着物を羽織り、頭には狐の耳で後ろには九つの尻尾が見える。

精霊の中でも最強の一角『玉藻の前』、呪術や妖術の扱いに長けた支援系の精霊。

景夜が使う『織田信長』や友奈の『酒吞童子』ほど近距離での攻撃力はないが、支援系の精霊の中でも最高値の性能を有している。

そんな精霊を降ろした千景は一瞬苦しむ様子を見せたが、今の状況を打破するべく動いた。

「高嶋さんに乃木さん、伊予島さんの中から出ていきなさい。解呪『妖艶華』！」

若葉たちの周りを彼岸花の花弁が舞う。

三人は何故か一瞬の内に正気を取り戻し、頭に手を当てる。

「私は今までなにを……」

「何だが、体が重い」

「大丈夫ぐんちゃん!? 怪我してるよっ!」

自分の心配より他人の心配をしている友奈を褒めるべきか叱るべきか、景夜的には少し悩ましいところだ。

そんな心配をしてる間に、バーテックスはすぐそこまでやって来ていた。

見た目は、以前諏訪の付近で見かけた進化体に似ている、その前の大きな戦いで見た進化体にも似ている。

おおよそ、あの進化体の完成型がこれなのだろう。

布のような触手が生えている分、あのバーテックスは一味違うことが伺える。

けれど、それは負ける理由にはならない。

千景は玉藻の前を降ろすことを止めている、負担が大きかったのか顔も青い。

景夜は自分がもう一度、あの信長を降ろすことを決意する。

「行くぞ、『織田信長』！」

禍々しい炎が身体を包み込み、そこから出てきた景夜は「天下統一」と書かれた羽織を着ただけだった。

一瞬弱体化したような感じがしたが、それがすぐに勘違いだと分かる。

魂が融和したことにより、同調律が急激に上がったのだ。

八〇%は余裕であるだろう。

体を慣らすかのように、少し体を解す。

そして、ゆっくりと息を吐き一歩踏み出した。

「待たせて悪いな……俺の仲間を傷つけた借り、しっかりと返させてもらうぜ！」

二歩目を踏み出した時には、その場に景夜は居らず。

瞬間移動にも匹敵する速さで、敵の目の前に迫っていた。

そこからは一方的な戦いで、バーテックスの周りを縦横無尽に飛び回りながら切り刻んでいた。

その速さは音速を超えていた。

以前も音速を超えた槍投げをしたことがある景夜だが、投げるの自分音速に達するのでは少しベクトルが違う。

そして……

「これで、終わりだ」

最後は下腹部にある爆弾を発射するための部分に槍を突き刺し、内側から爆発させてバーテックスを倒した。

「まさか、催眠を解いて二体目の完成型まで倒すなんて……凄いな」

「そりやどうも」

樹海化が終わり丸亀城の中庭にいる景夜たちの目の前には、景夜と同じ容姿をした天使が居た。

「ここまで来たら、正式に挨拶しなきゃね。俺の名前はカイン、人間の原罪を象徴する名だよ」

カインは、旧約聖書『創世記』第四章に登場する兄弟のこと。アダムとイヴの息子たちで兄がカイン、弟がアベルである。人類最初の殺人の加害者・被害者とされている。

「カイン……旧約聖書に出てくるカインから取ったと考えていいんでしょうか？」

杏がそう聞くと、カインは思ったほかあっさりと答える。

「うん、それであってるよ。君は聡いね」

薄く笑うカインに気味の悪さを感じつつある勇者の一行。

カインはそれに気づいたのか気が付かなかったのか、ある一言を残して消えていった。

「君たちに一つ良い事を教えて上げるよ、次の戦いは総力戦だ。君たちが勝てれば、一時の平和が訪れるかもね？」

決戦の日は近い、その先にあるのは――

希望か、はたまた絶望か。

答えは神さえも予測不能なほどに、混沌極まっていた。

最終話 「愛と平和と勇者」

前回の戦いから一ヶ月経った七月下旬。

次の戦いに勝てば以前から進められていた結界の強化が終わり、カインが言った通り一時とはいえ平和が訪れるらしい。

そのこともあつてか、仲間内の雰囲気は悪くない。

みな鍛錬に励み、若葉・友奈・千景の三人は着実に最強の精霊たちを降ろす準備を進めている。

神託によればそろそろ戦いが起こるといふ。

そんな中でも景夜たちは普通に授業も受けていた。

一部では、「今は世界の一大事なんだから授業より特訓した方がタマは良いと思うんだが」など言っていたが……

「あら、球子ちゃんは私の授業が嫌いなのかしら？そう……じゃあ仕方ないわよね、そう言えば最近考案した新しい特訓のメニューが――」

「タマがすいませんでした、普通に授業して下さい」

やはり、紅葉には勝てず。

何人かは渋々授業を受けていた。

景夜も球子の意見に賛成していたが、紅葉の威圧に負けて大人しく授業を聞いている。

今の時間は「道徳」、内容は『戦う理由』だ。

「師匠？確か前にも聞かれた気がするんですけど」

「そうよ、でも今回は違うの。前聞いた時の理由から少し変わってる子も居れば、変わってない子も居る。私が今日の授業でみんなに教えたいのは、戦う理由の根幹にある思いは『愛』ってことよ」

「戦う理由の根幹にあるのが……『愛』？」

若葉もみんなも同じで、あまりピンときていない様子だ。

紅葉は黒板に何かを大きく描く、大きなハートマークとピースサインである。

この絵の所為で、余計混乱する者も出てきたが、紅葉は気にする素振りを見せずに景夜に話を振る。

「景夜くん、景夜くんが戦う理由は大切なものを奪われたくないから、それと自分の生き様を果たす為だったわよね？」

「そうですね、これのどこに愛が……あっ！なるほど、分かりましたよ師匠！」

「景夜くんは優秀でよろしい、分かってない子の為にも説明するけど。例にすると、景夜くんの大切なものを守りたい、奪われたくないって思いはそれを愛しているからこそそのものなんだよ」

紅葉の一連の説明で分かっていたいなかった者たちも、納得したのか頷き始める。

その後、紅葉は黒板に書いた絵を指を指して問いかける。

「この意味、分かる人はいる？」

その問いに一番最初に答えたのは戦う勇者ではなく、巫女であるひなただった。

「ラブ&ピース、愛と平和の為に戦ってほしいということでしょうか」

「ピンポーン！ひなたちゃん筋が良いね〜」

ひなたが正解してからは、紅葉はみんなにもう一度戦う理由を思い出させる。

「最近は精霊の所為で殺気立つちやう子も居るかもだから、しつかり言葉で伝えるね。よくある特撮のヒーローたちはいつも力なき人たちの平和の為に戦っている、あなたたちも力ある勇者として戦い力の無い人たちを守っている。君たちは力なき人から見たら本当に勇者なんだ、だからこそ君たちには『愛と平和』の為に戦ってほしい。これが私からの最後のお願ひ」

彼女がそう言い終えると、授業終了のチャイムが鳴り授業が終わる。

彼女がこの言葉にどれほどの思いを乗せていたのか、景夜たちはしつかりと感じ取っていた。

それから間もなく、戦いは始まった。

壁の外から無数に出てくる大群、その中には一際存在感を放つ五体とそれ以上に危険な匂いを漂わせる一体の完成型が居た。

そして、最後に――

「久しぶり、勇者のみんな。刈り取りに来たよ君たちの命を」

「そんなことはさせないし、刈り取られるのはお前の命だよカイン」

「ふふつ、威勢が良いね。幾ら君が強い精霊を宿そうと俺には勝てない」

「やってみなきや分かんないさ……若葉と友奈に千景は完成型を頼む。残りのメンバーで通常個体を倒してくれ、進化体にさせないように素早くな」

『任せ（ろ・てください）！』

全員の声が響き、それぞれが飛び立っていく。

四人が同時に精霊降ろしを行使した。

「行くぞ！ 『織田信長』」

「来い！ 『酒吞童子』」

「降りよ！ 『大天狗』」

「来なさい！ 『玉藻の前』」

四人の周りをそれぞれの花びらが舞う。

桔梗・山桜・彼岸花・グラジオス、まるで虹のようにも見える色合いを見せて全員が変身を終える。

若葉は僧侶のような見た目の勇者装束に変化し、背中から漆黒の巨大な翼が生える。

友奈は頭に角のようなものが生え、勇者装束もどこか無骨なものに変化する。

彼女の武器である手甲が巨大化している。

景夜と千景も前回宿した時となんら変化わないが、それでも前回より格段に同調律は上がっている。

「さて、ここからは戦争だ！絶対に勝つぞー！！！！」

『おおー！！！！』

離れていても届くほどの大きな声で、彼女たち叫ぶ。

勝利への思いを。

「君たちは本当に面白い……見てて飽きないなく、だけど人間がつけ上がらないでくれるかな？虫唾が恥じる」

「良い殺気だな……来いよ全力全霊で相手してやる！」

カインが構えるのは槍、ただの槍ではない景夜が持っている物と同じ。

(天逆鉾……それもそうか、これ元々はあいつらの物だしな)

「ハアッ！」

流石はコピーと言うべきか、景夜と全く同じ動きと技で攻撃してくる。

だが、景夜は攻撃を受け流す素振りは見せず棒立ちのままだ。

目の前に迫る獲物を見て、景夜が思った感想は――

(遅い)

これだけだった。

景夜は七割程の力で動き、見事にカインの後ろを取った。

残像を残すほどのスピードだった為か、カインは気付かずに残像を切りつける。

しかし、手ごたえを感じなかったことから不審に思い後ろを振り向く。

そこには、槍を思い切り振り上げた景夜の姿があった。

回避行動を取ろうとするが遅く、もろに振り降ろす攻撃を喰らってしまう。

右肩から左脇腹にかけてを切り裂かれたカインは激痛のあまり悶え苦しむ。

景夜は声も出さずに苦しむカインから目を逸らし敵の群を見つめる。

カインは痛みには耐えながら、なんとか落とした武器を拾う。

少し手が震えているがどうと言うことはない、自分は高位な天使なのだから。

そう思うカインだが、景夜に槍を向けることが出来ない。

頭では勝てると思っていて、体が拒否している。

こいつとは戦いたくないと、そう叫ぶように。

(そうだ！勇者を殺す役目はなにもこいつからやらなくてもいい、他の奴を狙おう)

方針を変えて、他の勇者を狙おうとして天使の翼で移動しようとするが――

「行かせねえよ、ここで死ね」

景夜はそう言って、槍を人間で言う心臓の部分に突き刺した。

勿論、カインにも弱点はある。

元は景夜という人間をモデルにして作ったのだから、人間としての弱点をそのまま受け継いでしまっているのだ。

それもあつてか、カインの意識は暗闇の中に堕ちていく。

もう二度と起きることはない、生と対を為す死の暗闇に堕ちたのだから。

カインの死を確認した景夜は、仲間の下に向かおうとした。しかし、嫌な胸騒ぎに足を止められる。

(なんだ、この感じ。……まさか、まだ終わってないのか)

少年はゆっくりと後ろに振り向く、そこには本当の天使が居た。

神々しい光を放ちながら、悠然と景夜を見下ろすカインの姿がある。

カインは自分の身体を見て微笑む、無邪気に……そして邪悪に。

「フッフ、ハハハハハ！君は神々を怒らせた、これがその証だ。もうさつきと同じようにはいかないぞ、俺は今神の寵愛を一心に受けているのだから！」

祈るように天を見上げるカイン、その姿はまさに天使。美しく、恐ろしい。

「そうでしょう伊邪那美神様！」

景夜はカインに加護を与えている神の名前に驚愕する。

「伊邪那美神か、流石に夫婦揃ってこつち側には来てくれないわな」
諦めたように言う景夜に、カインが笑みを向ける。

「君たちの負けだ、君たちは自分たちの世界を作った神の力で滅ぼされるんだ光栄に思え！」

「光栄に思え？ふざけんな、滅ぼされてたまるか！」
景夜が先程とは違い一〇〇%の力で突っ込む。

瞬間移動さながらの早さを見せるが、目の前まで迫り槍を振ろうとした瞬間。

カインの身体が煙のように消え去った。

逃走という言葉が頭に浮かんだが、すぐにその思考を捨てる。
あのプライドが高そうな天使が、勝てると言っている試合をみすみす捨てる訳がない。

その考えが頭に浮かんだ瞬間、後ろから声がした。

「こつちだよ」

すぐさま後ろに振り向き防御の姿勢を取った。

だが槍自体の攻撃は止められたが、浮いた三本の穂先の攻撃は受け流せず、そのまま景夜の身体を突き刺した。

痛みの所為で防御が少し緩んだ隙を突き、蹴りで吹き飛ばす。

地面に三、四回バウンドしたところで動きは止まる。

吹き飛ばされた景夜はピクリとも動かない。

吹き飛ばされた景夜は激痛の走る身体で必死に頭をフル回転させて、先程の裏取りのトリックを考えていた。

(考えたくはないが、もし本当に瞬間移動だったら……)

景夜は自分の方に足音が近づいているのが分かる、体を動かしたいが筋肉が痙攣して動けそうにない。

信長を宿しているため、防御力も上げている筈なのに全くもって意味がないように感じた。

「これで、形勢逆転だね。立てないのなら、そのまま死ね」

体中にある無数の細胞が死にたくないと叫んでいて、立ち上がろうとする。

だが、上げることが出来たのは頭だけで、景夜は静かに目を瞑る。

(何だろう、さつきからしてた胸騒ぎは一つじゃない。もう一つが……来る)

諦めた訳ではない、死ぬ気がしなかったのだ。

こんな状況なのに、景夜は自分が生きること信じていた。

そして、景夜の第六感にも近い胸騒ぎは的中した。

「私の弟子を虐めてんじゃないわよー」

凜とした声を響かせ、綺麗な深紅色の髪を揺らし、七竈を彷彿とさせる勇者衣装を着た紅葉の姿が見えた。

「師匠……すいません、見苦しい姿で。弟子失格ですかね？」

「まつさか、ここで諦めてたら失格だけど、君は諦めてないでしょ？」

「そうですね、でも師匠はどうやってここに」

「ああ、それには色々理由があつてね。この神器のお陰なのよ」

そう言つて、カインの天逆鉾を押し返して、景夜に見えるように槍を見せる。

その槍は、赤い茨のような見た目で紅葉の深紅色の髪に良く似合っている。

「名前はゲイ・ボルグ、景夜くんも名前だけなら聞いたことあるでしょ？昔、世界中を旅してた時に拾つたのよ。今まで戦いに参加できなかった理由は、神器は神器だけど神話の体系が違うせいで上手く勇者システムが作用しなくてね。その所為で、新しい私専用の勇者システムを作つてたらこんな時期になったのよ」

景夜の方を見ながら説明をして、カインの攻撃は片手間に受け流す。

景夜とカインに明らかかな実力差があるように、紅葉とカインにも目に見える程の実力差があつた。

カインの暴力的なまでの力を、完璧な技で受け流す。まさに清流のような優雅さを持って、戦いを進める。

そして、粗方景夜の身体の痙攣が収まったのを見定めてバックステップで景夜のもとに下がる。

カインもすぐに手を出そうとは思わず、様子を見る。

「師匠、二人で行けば勝ってます。このまま——」

「ごめんなさい、それはちよつと無理だわ。私の勇者システムは急ピッチで仕上げた張りぼてなの、アイツと戦ってたらいつか変身が解けて負けるわ」

申し訳なきように呟く紅葉に対し、景夜は笑顔で返す。

「分かりました！アイツは俺が。若葉たちの方を頼みます」

景夜はある覚悟を決める。

「ええ、任せておいて。あつちも残ってるのは完成型一体と少しの通称个体だけみたいだから、安心して戦いなさい」

「後師匠、俺にもしものことがあつたらみんなに今までありがとうって伝えといてください。後は……若葉とひなたに愛してるって。お願いします」

「死ぬ気なの？そんなこと生きて帰って自分で伝えなさい」

「死ぬ気はないですよ、それに五体満足で帰ってくるって言ったんで保険みたいなもんです。負けませんよ今の俺はなんたって——」

「愛と平和の為に戦ってますから！」

景夜は槍を天に掲げ、叫んだ。

「この身に降りよ、国造りの神！『伊邪那岐神』」

光が景夜の身体を包む、あまりにも綺麗なその光は敵であるカインでさえも虜にする。

光が晴れて、景夜が姿を現す。

勇者装束は通常通りの物で何の変化もないが、景夜を包むオーラは尋常ではない。

神降ろし、禁忌中の禁忌であり、直接伊邪那岐神との？がりがある景夜でも、使えば体に掛かる負担は『大天狗』や『酒吞童子』の比ではない。

だが、得る力も格段に上がる。

今、景夜とカインは同じ土俵に立った。

紅葉はその場を景夜に任せ、若葉たちの下に向かっていく。

「逃がしていいのかよ？」

「君から目を話す方が危険な行為だと分かるからね、彼女を殺すのは君の息の根を確実に止めてからだ」

これから始まるのは神と神の戦い、次元を超えた戦いの火蓋が切つて落とされた。

穂先がぶつかり合い火花が散る。

ぶつかったと思つた瞬間にはその場に二人は居らず、片方が瞬間移動で別の場所に移動しそれをもう片方が追う。

基本的に逃げるのがカインで、追うのが景夜だ。

神降ろしを行使したことで、パワーバランスは元に戻り景夜が押していた。

しかし、景夜の消耗は激しい。

まだ二分しか時間が経っていないにも関わらず、景夜は身体から異常なほど汗をかいていた。

顔色も悪く、青を通り越して白くなりつつある。

勝負が着くのも時間の問題だろう。

景夜がカインに向かって足払いを仕掛けるが瞬間移動で回避し、背

後を取り蹴りを入れようとするが景夜はこれを柄の中ほど持ち棒術を駆使して受け流す。

受け流した後は瞬間移動し距離を取る。

カインは自分から攻めようとせず、景夜の動きを待つ。

瞬間移動は体に掛かる負担が大きい為、景夜的にあまり使いたくないが今は使うしかない。

今度は少し離れた所から神通力で、雷と炎を同時にカインの近くで発生させて爆発させようとするが、カインも神通力で対応。

バリアのようなものを張って爆発の熱や威力を無効化してみせる。罫が明かないことを悟った景夜は、一発の賭けに出る。

「……はあ、どこまでいっても決着が付かないな。ここらで一つ提案だ」

「面白そうだし、良いよ」

カインは余裕そうな笑みで答える。

「今のままだと永遠に終わらない泥仕合を続けることになるから、お互いに自分が持つ最高の一撃で勝敗を決めないか？」

「楽しそうだ！でも、君は良いのかい？顔色が悪いけど」

自分の勝ちを信じて疑ってないのだろう、景夜に情けを掛ける程には余裕があるらしい。

だが、景夜はそうはいかない。

体感的に後三分持てば良い方、集中力がなくなったら勇者への変身も維持できない程に景夜は追い詰められている。

「心配どうも、全然大丈夫だよ。お前を倒す分には問題ない」
皮肉を言いながら、槍を構える。

「そっか、じゃあ行くよ！」

「絶技開放！」

二人の声が重なる。

「この槍は最強に非ず、持つ者に最高を与える」

「この槍は最高に非ず、持つ者に最強を与える」

カインの詠唱は景夜と一部分が違う。

「故にこの一撃は最強ではなく最高の一撃と知れ」

「故にこの一撃は最高ではなく最強の一撃と知れ」

最強と最高、果たしてどちらが打ち勝つのか。

「憤怒による、最高の一撃！」

「supperbia the almighty break高慢による、最強の一撃」

二人の放った槍が衝突する。

景夜は憤怒による最高の一撃を放ち、カインは高慢による最強の一撃を放った。

詠唱や技名が違うだけで、威力は変わらない。
なら、勝敗を分けるのは想いの差だろう。

景夜は残った力の全てを槍に乗せた、そのことで景夜の変身はすでに解けている。

一方、カインはまだまだ力をあり余らせており、押されてると思ったら神通力で押し返せばいいだけだ。

勝利はこの時点で既に決している、景夜の敗北は確定的だろう。

けれど、勝利の女神が微笑んだのは景夜の方だった。

「押されてるっ!? フン! この程度の力は神通力で簡単に……」

押し返そうとして神通力を発動させるが、どれだけ力を込めても押し返せない。

「ふぎけるな!!!! 俺の方が押されてるなんて有り得ない、有り得ない筈だ」

「言っただろ、愛と平和のために戦ってる今の俺は負けないって。それが答えだよ!」

景夜の言葉に反応するように、槍の勢いが強くなっていく。

「ありえない、有り得ない、アリエナイ、オレガマケルナンテ——!!!!」
押し負けたことで、景夜が投げた槍と自分が投げた槍に貫かれてカインは消滅する。

威力だけで見れば、その力は日本国土の総質量の約二倍。

そんなものを喰らえば、跡形も残らないのは当然だ。

景夜は限界が来たのか倒れ込む。

持てる力の全てを出し切った、起き上がる力はもう残ってない。

薄れていく意識の中で、景夜は思う。

（勝ったんだ……まだ完璧な勝ちではないけど。それでも、俺たちは

景夜は信じていた、人間の勝利を。

epilogue 「明日の勇者たちに」

嫌に五月蠅い機械音、その音が段々と鮮明に少年の耳に入る。寝ぼけているのか体を動かそうとするが、上手く動かない。

それもそのはずだ、景夜の身体はベットに固定されていて身動きを取ることが出来ないようになっていたのだ。

それ以外にも、重度の身体の怠さがある。

少し重たい瞼を開けて、周りを見渡す。

そこでようやく自分の状況に気付いた。

ベットの脇にはひなたが居る、寝不足なのだろう酷い隈が見える。

だが、居たのはひなただけではなく、反対側に若葉もおり慌てた様子でひなたを起こしナースコール押す。

何かを話してるようだが、景夜の耳は上手く機能しておらずよく聞こえない。

少しだけ聞き取れたのは、若葉の「起きろひなた」ぐらいのものだった。

その後、数時間に及ぶ検査を受けて、今は個室に戻って来た所だ。移動は車いすだったが、あまり乗りられていない景夜は少し不安がっていた。

寝起きから数時間の検査など滅多にないが、景夜は些か特例が過ぎるのでしようがない。

個室に帰ってきてからはみんなから、大泣きされた。

何とか泣き止んだものの、ひなたと華恵に至っては泣きながら説教を始めると言う高等な業を披露した。

落ち着きを取り戻した所で、ひなたが代表になって話をし始める。

「景夜君、今から言うことをよく聞いてください。……………私たちが人

間は、天の神に敗北し降伏を宣言しました」

「……はっ?!いい、今んて言った!俺たちが負けた、天の神に降伏?一体どういうことだ説明……ぐツ」

頭に血が上がったことで自分がまだ怪我をしてることを忘れて、ひなたに掴み掛かろうとしたのだ。

しかし、怪我の所為で上手く動けず、逆に自分がダメージを受けてしまった。

「順を追って説明します」

彼女の話はこうだ。

あの戦いの後、殆どの勇者が怪我で入院し、最低でも二週間は安静に過ごすように指示が下ったらしい。

意識を失っていた者も多く、最上級の精霊を降ろした三人は勿論、紅葉も急ピッチで仕上げた勇者システムが祟ってしまい意識はなく。

けれど、ひなたが神樹から受け取った神託によると三週間後に今回の規模と同レベルのものが起こると判明。

絶体絶命に落とされた人間側は、ある策を講じて神に赦しを請うた。

それが、

「奉^{ほう}火^か祭^{さい}、今回が初の試みでしたが無事に成功しました」

「奉^{ほう}火^か祭^{さい}?どんな神事なんだ?」

景夜の質問に、ひなたは苦しそうにしながらも話を続ける。

「大社は祭りを行ったのです。壁の外で……。そして、天に話し、願ったのです。今後、この地から出ないことを条件に、侵攻を赦してもらいたい、と」

「……それだけか？」

景夜が何かを訝しむように、ひなたを問い詰める。

「地に棲まう者たちの——すなわち我々の根絶こそが、恐らく敵の目的。それがほぼ達成してる今、このタイミングだからこそ、可能だったんです。私たち巫女は神託を受け取る者。神の声を聞き得る者。その巫女たちに、こちらの話を届けてもらいました……天に」

「……どうやって……？」

巫女は神の声を聞く。

だが、今まで神樹との交信でさえ、神から人への一方通行だった。

まして、神樹よりも遠い存在である天の者たちに、どうやって人の言葉を届けるのか。

「……今、世界は天の神の力により理が塗り替えられて、世界が炎に包まれています。神樹様の結界がある四国以外は全て無くなってしまいました。……先程言った巫女、計六人を炎の海の中へ」

「生贄にしたってのか？」

「ここにいらっしゃる皆さんには何も伝えずに行いました、若葉ちゃんたちは反対するだろうと思いましたが。……景夜君は特に」

「じゃあ、俺たちは六人の何の罪もない女の子の命を犠牲にして生き残ったのか？……ふざけんな!! 何で戦わない、何で策を講じない、何で足掻かない！俺たちは負けてなかった、このままいけば——」

「このままいけば勝てたとでも？冗談は止めて下さい、私たちは負けまたんです。それが事実なんですよ」

景夜の声に被せるように、ひなたは景夜たちが聞いた事のないような冷たい声で言った。

その顔も、いつもの朗らかなひなたの顔とはかけ離れていて、冷酷で利己的な少女の姿がそこにあった。

「違う、俺はまだ負けてない。まだ戦えるし、諦めてなんかない！」

「そうやって、戦い続けるんですか？何度もボロボロになって、心をすり減らして、仲間を失って」

「みんなは俺が守る！伊邪那岐神の力さえ上手くコントロール出来れば——」

「もう、止めて下さい……」

ひなたの瞳から涙が零れ落ちる。

先程も大量に出していたのに……それでも溢れ出る程に、彼女の心も擦り切れていた。

この涙をもって、景夜は戦いを止めた。

愛と平和の為に戦った少年は、愛と平和の為に戦うことを止めた。

神世紀元年、四月五日。

少年は一人、丸亀城の本丸から海を見つめていた。

時刻は七時半を過ぎた辺りだろうか、周りに人の気配はない。

あれから景夜は、暇を見つけてはここに来てただ海を見つめていた。

ただただ海を眺める、制服姿なので目立つが本人は気にする様子もなくボーっとしている。

少しして、その隣に腰かける少女が居た。

若葉だ。

「またここに居たのか？飽きないな」

「……別に、そんなんじゃないさ」

大社が『大赦』と名を改めて、元号が変わり神世紀になり。色々のことが変わっていった、中でも特に変わった部分は……

「大赦の人たちも太っ腹だよな、普通の学校に行くことを許してくれるなんて」

「まあ、気晴らしにはなるんじゃないか。私たちは、三年……いや三年半勇者のお役目を果たした。少しくらい羽を伸ばしても文句は言われんだろう」

「にしても、みんな同じ学校で、杏も同じ学年になるとは一体どおいう裏通しをしたんだか」

自分に向けられたであろう言葉が恥ずかしく、皮肉を吐きながら返す。

「別にいいだろう？最初は少し居心地が悪かったが柳橋のお陰で、校内での評判も悪くない。そうだろう『銀髪の王子様』？」

「うるさいぞ、『イケメン剣士』」

学校でささやかれているお互いのあだ名を弄る。

それのお陰か何なのか、景夜の顔から笑みが零れる。

「行くか、遅刻する」

「そうだな」

言葉少なく、二人は歩き出す。

早く行かなくては、親友に怒られてしまう。

「いつか……取り戻せると良いな。俺たちの世界を」

「ああ、その為にも今は耐えよう……でもいつか必ず」

『本当の平和と世界を取り戻す!』

諦めない、今は耐えるしかないがいつかきつと成し遂げてくれる筈だ。

景夜たちは信じていた、景夜たちは期待していた。

天の神を倒す勇者たちはきつと、『愛と平和』そして『絆』を胸に戦う者たちだと。